

先生方とともに  
高校生の今と未来をつなぐ

# VIEW21

〈ビュー21〉  
高校版  
2020  
Volume 4

10月



今号の表紙の  
絵の制作者

富山県

私立片山学園中学校・高校

木村洸斗さん

表紙裏に木村さんへの  
インタビュー記事を掲載

## 特集

シリーズ 教育の「これから」を考える①

# 主体的・対話的で 深い学びを問う

新課程に向けて描く「学校教育デザイン」

宮城県立高鍋農業高校

主体的・対話的で深い学びへ  
実践 アクティブ・ラーニング

生物 宮城県村田高校 清水<sup>あやこ</sup>絢子

英語 香川県・私立四国学院大学香川西高校 大西友一郎

指導変革の軌跡

石川県立加賀高校

表紙制作者

富山県・  
私立片山学園中学校・高校  
1年生  
木村<sup>ひろと</sup>洸斗さん



聞き手

VIEW21 編集部  
統括責任者  
木本 崇

1998年4月号から生徒と教師の写真で飾られてきた本誌表紙。2020年6月号からは、臨時休業という想定外の状況下で、学校での学びの価値を捉え直した生徒のアート作品の力を借りて、引き続き、生徒と教師の関係を描きます。

漫画好きの父親の影響で、幼い頃から漫画をたくさん読み、自分でも作品を制作するようになった木村さん。「完成した絵を父に見せたら、『発想がいいね』と褒めてくれました」（木村さん）。



木村さんが通う富山県・私立片山学園中学校・高校は、今号の「改良！ 指導ツール ビフォーアフター」（P.50～53）の改良会議実施校です。

## 学校でお互いを認め合うことで 生徒は自分を好きになれる！

**柏木** 漫画タッチでのアプローチは予想していなかったので、正直驚きました。

**木村** 『VIEW21』は、これまでずっと先生と生徒の集合写真が表紙を飾ってきたので、そうした光景を写実的なタッチで描いてはどうかと先生からはアドバイスをいただいたのですが、せっかくなら、自分の得意なタッチで描き、しかもこれまではない作風にしたいと考えたんです。

**柏木** 前例にとらわれなくて、自分の個性を生かすチャレンジをしたんですね。すごいことだと思いますし、実際、見る人をひきつける絵になっていますよね。化学の実験風景ですが、モデルになった先生はいるんですか。

**木村** 楽しい実験をしてくれる理科の先生がいて、その先生のことを考えた時に、この絵のアイデアが浮かびました。ただ、その先生とこの絵の先生は、見た目が全然違います（笑）。僕にとって実験は、先生と生徒がコミュニケーションを取りながら学んでいく時間なので、生き生きとした様子が描けそうだったんです。

**柏木** 木村さんが描いたような、コミュニケーションを取りながら学ぶ時間は、コロナ禍によって残念ながら減っていますよね。

**木村** 先生や友人たちとにぎやかに語り合いながら学ぶことが難しくなったことで、それまであまり意識していなかった学校の価値を再確認できたような気がします。そして、学校だけでなく、そもそも人生は、他者がいてこそ楽しいものなんだと改めて認識したんです。世界がもしも自分1人だったら、誰かに向けて表現することも、誰かから影響を受けることもできません。自室で1人リラックスする時間もいいけれど、学校で周囲の人たちに気を使い、ちょっとドキドキしながら過ごす時間も大切なんだと思うようになりました。

**柏木** 他者に気を使いながら過ごす時間も、自分の成長のためには必要だと気づいたわけですね。ただ、そうした時間が「自分はこうありたい！」という思いを抑圧してしまうようなことはないのでしょうか。

**木村** 自分のことを好きでいられれば、他者に流されずに自分の個性を大切にできて、相手のことも大切にできるような気がします。そして、自分のことを好きになるには、やっぱり他者の力が必要です。僕ら高校生は、授業や部活動などでお互いを認め合えれば、自分のことを好きになれると思うんです。

**柏木** 前例にとらわれず自分の個性を発揮できる木村さんだからこそ、ほかの人の個性を尊重することの大切さに気づくことができたのでしょうか。みんなが互いに認め合えるような社会を、一緒につくっていきましょう！

## ベネッセ文教総研 設立のご挨拶

平素は、弊社ならびに弊社の学校事業活動にご高配を賜り、厚く御礼申し上げます。

この度、学校教育のシンクタンク組織として、ベネッセ文教総研を設立いたしましたので、その旨、ご挨拶申し上げます。

ベネッセコーポレーションの前身である福武書店の創業者、福武哲彦は、かつて小学校の教師でした。その経験から、創業者は常に、「学校は2つの役割を担っている。1つは、今の生徒を育む役割。もう1つは、将来を見通しながら教育のあり方、形を考え、実践する役割だ。だからこそ、『半歩現実・半歩未来』が、学校支援を行う我々の基本スタンスなのだ」と申しておりました。

学校が今、対応すべき課題は、「大学入学共通テスト」実施初年度入試を始めとして、with コロナにおける学校運営やクラス経営、教科指導、特別活動、さらには新たな教育手法・指導モデルへのチャレンジと、枚挙に暇がありません。と同時に、新学習指導要領に基づく教育課程の編成の準備と実施、その先の大学入試への対応といった未来課題についても考える必要があると拝察しております。

そうした課題感から、地域に成り立つ学校として、将来を生きる生徒のために、どのような役割を果たすべきか、学校経営・運営のあり方を校内でどのように整理していけばよいのか、学校が抱える、今と未来の課題への取り組みに微力ながらも貢献すべく、ベネッセ文教総研を設立いたしました。その活動の柱は、学校経営・運営や先生方の指導力の向上に特化した研究と、その成果をエビデンスとした情報発信になります。具体的な活動計画は、今後、本誌『VIEW21』などを通じてお伝えしてまいります。

ベネッセ文教総研からの提言・提案も含めた発信、学校現場の実践をお伝えする『VIEW21』や先生方の活動をご支援するベネッセハイスクールオンライン、そして全国の支社からの訪問活動と、トータルに学校をご支援してまいりたいと考えております。これからも、先生方からのご意見を踏まえながら、「半歩現実・半歩未来」のスタンスで活動してまいります。引き続き、ご指導、ご鞭撻のほど、何卒よろしくお願い申し上げます。

ベネッセコーポレーション  
学校カンパニー長  
山河健二

今号では、連載コーナー「-疑問や課題を解決！ 実践につながる！-新課程レポート」(P.67～71)におきまして、ベネッセ文教総研が作成した、「高校現場における新学習指導要領に基づく教育課程（以下、新教育課程）の検討の流れ」と「新教育課程編成における検討ポイント」を掲載しておりますので、新教育課程編成のご検討の際にお役立ていただけますと幸いです。

3 特別企画

工夫が求められる今こそ、非認知能力を育成する特別活動を生徒主体の活動に

6 特集

シリーズ 教育の「これから」を考える①  
「主体的・対話的で深い学び」を問う

8 5人の教師が考える「主体的・対話的で深い学び」実践事例  
生徒に身につけさせたい資質・能力を起点とした「これから」の授業の実現を目指して

主体的・対話的で深い学び

- 9 実践事例1 国語 宮崎県立高鍋高校 三浦章子  
「当事者意識」を高める協働学習で抽象と具体を行き来し、深い学びに迫る
- 12 実践事例2 地理歴史・公民(世界史) 静岡県立御殿場高校 美那川雄一  
生徒が自分の言葉で歴史を語り合い、世界史の本質に触れることで、想像力や広い視野を育む
- 15 実践事例3 数学 大阪府・私立近畿大学附属高校・中学校 芝池宗克  
教師の役割を生徒に委譲しながら、社会で求められる数学的な力を養う
- 18 実践事例4 理科(生物) 熊本県立熊本北高校 溝上広樹  
生徒が疑問や質問を出し合う対話を軸にした学びで、自律的学習者を育てる
- 21 実践事例5 英語 大阪府立今宮高校 森 一真  
「知りたい」「伝えたい」思いを、題材、人間関係、授業の仕組みで刺激する
- 24 解説「主体的・対話的で深い学び」5人の教師の実践を交えて  
「深い学び」の構造を理解して、知識を「駆動」させる学びを実現  
國學院大學 人間開発学部 初等教育学科 教授 田村 学
- 28 VIEW21 PRESENTS オンライン・ワークショップ  
第1回レポート 自校の教師同士の対話を通じて、教育の「これから」を考える
- 31 (イベントのご案内) 第2回オンライン・ワークショップ
- 32 生徒の・教師の・自校の・社会のNEXTを語り合うワークシート

34 新課程に向けて描く「学校教育デザイン」

宮崎県立高鍋農業高校

学校生活の場面ごとに行動目標を設け、その達成状況をデータで示すことで、自己肯定感を高め、前向きな行動を促す

38 実践 アクティブ・ラーニング

38 生物 宮城県村田高校 清水絢子

ラーニングマップの作成と生徒同士の相互説明・評価を通じて、知識を体系化させ、伝える力を育む

42 英語 香川県・私立四国学院大学香川西高校 大西友一郎

協働学習やアウトプット活動をバランスよく配置し、自ら学びに向かう姿勢を育む

46 指導変革の軌跡

石川県立加賀高校

観点別学習状況の評価の実施

授業態度を重視した評価と少人数制クラスの導入で、生徒の学習意欲を高める

50 改良! 指導ツール ビフォーアフター 生徒とともに!

1年生 文理宣言シート

改良会議実施校 富山県・私立片山学園中学校・高校

54 これからの進路指導のための 世の中トレンド解説

スペシャルニース

解説者 内閣府認定特区高等学校

明達館高校 校長・理事長 日野公三

58 SDGsの視点で見る大学の学び

58 解説 目標 4・6

60 大学の学び 目標 4 質の高い教育をみんなに

東京大学大学院 教育学研究科 学校教育高度化専攻 教育内容開発コース 北村友人研究室

教育現場を理解する研究者を育成し、日本や世界の教育改善に貢献する

62 大学の学び 目標 6 安全な水とトイレを世界中に

金沢工業大学 バイオ・化学部 応用化学科 土佐研究室

水処理などを効率化する新技術を開発し、衛生的で安心な水環境を実現する

64 NEXTリーダーがオンライン&オフラインで集まり、語り合う 若手教師・教育創造 MTG

第3回オンラインミーティング&有志メンバーによる授業研究・レポート

日々の授業実践や思いを語り合い、若手としての共通の課題を追究する

67 一疑問や課題を解決! 実践につながる! 新課程レポート

テーマ 新教育課程の編成方針と校内での推進方法

実践事例 青森県立青森高校

資質・能力、指導・評価を踏まえた新教育課程編成へ

72 VIEW'S REPORT

「生徒国際イノベーションフォーラム2020@オンライン」開催

世界中の生徒や教師たちが、「学校のWell-being」を語り合う

80 Reader's VIEW

巻末 教師を育てた言葉たち

「思うようにやりなさい。生徒のためを思うなら、やって無駄なことはない」

愛媛県立丹原高校 五味 稔

今号の刊行にあたって

「主体的・対話的で深い学び」の核心へ

◎8月号の特集を受けて、今号より、「教育の『これから』を考える」と題したシリーズ特集をスタートします。1回目のテーマは、「主体的・対話的で深い学び」です。その学びの視点は、「アクティブ・ラーニング」という言葉で登場し、新学習指導要領の告示を経て、学校現場に広く浸透しました。その実践に手応えを感じている教師がいる一方で、実践の質の差を懸念する声も聞かれます。その差は、「主体的・対話的で深い学び」の理解の質の違いによって生じているのではない——現場の先生方が異口同音に指摘したその点に着目し、今号の特集を企画しました。先生方の授業の「これから」を考えるヒントになれば幸いです。

『VIEW21』高校版 編集長 柏木崇

<https://berd.benesse.jp>

本誌記事は、ベネッセ教育総合研究所のウェブサイトでもご覧いただけます。

印刷製本/ (株) 協同プレス 編集協力/ (有) ベンダコ 執筆協力/ 長谷川教、中丸 満、二宮良太 撮影協力/ 川上一生、田中秀和、谷口 哲、筒井岳彦、鍋坂樹伸、福山 哲、藤木潤一、ヤマグチイッキ

\*本文中のプロフィールはすべて取材時のものです。また、敬称略とさせていただきます。

\*本誌記載の記事、写真の無断複写、複製及び転載を禁じます。

©Benesse Corporation 2020

# 工夫が求められる今こそ、非認知能力を育成する特別活動を生徒主体の活動に

学校行事や生徒会活動などの特別活動も、新型コロナウイルスの感染拡大を受けて中止や延期が余儀なくされている。そうした事態に直面し、改めて、生徒の成長に寄与する特別活動の意義を実感したといった学校現場の声も多い。そこで、次年度以降の教育活動計画に特別活動をどう位置づけ、実施していけばよいのか、3校の校長が語り合った。

## 特別活動の状況

### 感染予防のアイデアを 生徒が中心となって出し合う

——新型コロナウイルスの感染拡大を受けて、学校行事においては、どのような対応をされていますか。

**常松** 本校で中止とした学校行事は、1学期では芸術鑑賞会と球技大会です。教師間では学校行事の実施について賛否両論ありましたが、島根県は臨時休業期間が1か月半足らずと比較的短かったため、授業の遅れも学校再開後の工夫で十分補える」と判断し、学校行事の時間を比較的削りませんでした。いわゆる「3密」を避けるよう最大限に配慮し、例えば、毎年9月上旬に行っている学園祭は、規模を縮小しつつ、例年通り3日間開催しました。生徒が提案してくれた様々な感染予防策の1つとして、体育館でのイベントは、観客数を制限した上で演目ごとに座席を指定し、「3密」を防ぐようにしました。

**藤野** 都立高校では、東京都教育委員会会の判断により、大半の学校行事を中止または延期としています。ただ、私自身、集団で1つの物事を成し遂げる特別活動が、生徒の人間的

な成長に与える影響は大きいと強く感じています。そこで、生徒や教師に、「感染予防ガイドラインに沿うことは前提として、実施を可能にする工夫を考えよう」と呼びかけ、中止した文化祭と体育祭の代替となる「活動報告会」の実施を提案しました。生徒会役員と各委員会が中心となって計画を立て、全校生徒の熱意と創意工夫により、9月中旬に皆が充実感を得られる行事を実施できました。

**中森** 本校でも、生徒会執行部の約40人が臨時休業中からオンライン会議ツールで議論し、感染予防に配慮した計画を立て、学校祭などを実施しています。生徒会ではほかに、臨時休業期間中、ウェブサイト上に意見箱を設置して生徒からの様々な質問に答えたり、新入生に向けて制服の着こなし方を紹介する記事を配信したりと、高校生活を支援する活動を自主的に行っていました。

——学級づくりの軸となるホームルーム活動も十分実施できなかったと思います。

**藤野** 臨時休業中は、生徒が抱えている不安や負担を教師間で共有・理解しながら、どのように生徒を支援



島根県立松江北高校  
校長 常松 徹

福井県立若狭高校  
校長 中森 一郎

東京都立三鷹中等教育学校 統括校長 藤野 泰郎

していくかが、大きな課題だったと思います。本校では、全生徒が1台ずつタブレット端末を所有しており、臨時休業の開始時からオンライン会議ツールでホームルームを毎日実施しました。当初は、1クラス約40人全員でホームルームを実施していましたが、画面越しでは生徒一人ひとりの様子をつかむことが難しくなったため、担任・副担任が半分ずつ受け持ち、ホームルームの時間を

使って生徒と1対1で順番に話す形にしました。教師が生徒の声を丁寧に聞くことで、生徒との信頼関係を築くことができました。それは、6月の学校再開後のスムーズなクラス運営にもつながりました。

**中森** 本校も、4月中旬から毎朝、生徒各自が体調や前日の学習時間などを「Google フォーム」(\*1)で報告し、担任がそれを確認して、気になる生徒に電話して話を聞くようになりました。本校では今年度から、生徒が自分のやりたいことを見つけ、それに思う存分取り組める高校生活を送れるよう、教師が支援することを目指し、「指導」から「支援」への転換を図っています。各部署主導から、学年会を軸とした体制に刷新し、学年間の連携も密にして情報共有を図り、学年会による支援体制を築いておいたことが、臨時休業中の生徒支援に効果を上げました。

**常松** 本校では臨時休業中、週2回程度、担任と副担任が分担して生徒に電話をかけ、状況把握に努めました。毎日の健康観察を生徒自身に「Classi」(\*2)で報告させて、気になる内容を入力していた生徒には、担任が連絡を取るようになりました。

三鷹中等教育学校の取り組みを伺い、画面越しでも生徒と教師が対面でコミュニケーションを取る重要性を改めて感じました。教師による生徒支援を強化するためにも、ICT環境を整備したいと考えています。

### 特別活動の意義

## 集団で物事を成し遂げる経験が非認知能力の育成につながる

——3校とも、制約がある中でも工夫して特別活動を実施されています。改めて、特別活動の意義をどのように感じられていますか。

**常松** 例えば、学園祭では、生徒が意見を出し合い、様々な調整をしながら準備を進め、問題が起きても解決策を考えて乗り切るなど、最後まで物事をやり抜く力やレジリエンスが必要とされます。それらは、社会で生きるために必要な資質・能力であり、学校行事や生徒会活動、部活動などは、そのような非認知能力の育成に必要不可欠であると、常々思っています。本校では、学外から大勢来場する学園祭の実施の是非が大きな議論となりました。どの学校でもそうだと思いますが、学園祭は

生徒が力を入れて取り組む最も楽しみな行事の1つです。職員会議では、感染防止の観点から中止という意見も出しましたが、教師も生徒も、学園祭の意義を十分理解していたため、感染症対策をしっかりとした上で実施するという結論に至りました。

**藤野** 本校では、理科で年間50回以上の実験を行うなど、体験学習を重視しています。学校行事は、体験学習の最たる例であり、行事当日に加えて、準備や振り返りなど、生徒が主体となって活動することで多くのことを学びます。相手の目を見て、言葉を交わすことは、人間だからこそその行動です。直接コミュニケーションを取り、一体感を持って集団で物事を成し遂げることは、学校に来て、学校行事や生徒会活動をしてこそできる経験であり、これほど大事な教育活動はないと、教師、生徒、保護者の誰もが強く感じています。

**中森** 本校の学校祭や体育祭、合唱コンクールでは、クラス単位のほかに、学年縦割りチームでの対抗戦も行います。異年齢の集団での活動という点では同じ部活動ともまた違う貴重な経験となります。今年度の体育祭のフィナーレでは、中止した合

唱コンクールに代えて全校生徒で合唱を行いました。夕暮れの空に美しいハーモニーが響きわたり、言葉では表現できない感動がありました。

——対面での集団活動が、生徒の成長をもたらすということですね。

**中森** 今年度の学校行事は、感染予防に配慮した計画を立てなければならず、それは教師にも経験がないことだったため、生徒と同じ目線で議論してきました。生徒会執行部を中心に知恵を出し合い、協力し合って、一から行事を創り上げていきました。生徒会担当の教師は、「今年度の生徒会執行部は、例年以上に主体的に取り組み、責任感も強い」と評価していました。コロナ禍だからこそ、伝統行事はもちろん、新たな学校行事を生徒主体で創り上げる好機だと捉えられるでしょう。

### 次年度の活動計画立案のポイント

## 特別活動を他の教育活動と有機的に連動させる

——新学習指導要領の実施を見据え、次年度以降の教育活動計画に特別活動をどのように位置づけ、実施していくのがよいとお考えですか。

\*1 アンケートを作成し、そのアンケートの集計や分析を行えるオンラインツール。

\*2 株式会社ベネッセホールディングスとソフトバンク株式会社の合併会社である Classi 株式会社が提供する、学校教育での ICT 活用を総合的に支援するサービス。

**中森** 本校で鍵となるのは、探究学

習と特別活動の連動です。本校の学  
校祭では、社会課題の中からテーマ  
を選んで探究し、提案する、クラス  
単位の企画があります。海洋科学科  
のクラスが「海洋酸性化の実態」を  
テーマにするなど、探究学習の研究  
テーマと関連した社会課題をテーマ



東京都立三鷹中等教育学校 統括校長

**藤野泰郎** ふじの・やすろう

教職歴38年。同校に赴任して4年目。

**東京都立三鷹中等教育学校**

◎ 東京都立三鷹高校を母体に開校した中高  
一貫教育校。基本理念に「思いやり・人間  
愛を持った社会的リーダーの育成」を掲げ  
る。東京都教育委員会「東京グローバル10」  
[Society5.0に向けた学習方法研究校]など  
の指定校。

◎ 設立 2010（平成22）年

◎ 形態 全日制／普通科／共学

◎ 生徒数 1学年約160人

◎ 2020年度入試合格実績（現浪計）

国立大は、北海道大、東北大、筑波大、東  
京医科歯科大、一橋大、京大、九州大など  
に42人が合格。私立大は、慶應義塾大、上  
智大、早稲田大などに延べ468人が合格。

◎ URL <http://www.mitsukachuo-e.metro.tokyo.jp/ste/zen/>

に選んだクラスもあります。資質・

能力の育成に効果的な学びとするた  
めには、授業や特別活動、さらには  
部活動も含め、すべての教育活動が  
有機的に連動したカリキュラムをつ  
くる必要があると考えています。



福岡県立若狭高校 校長

**中森一郎** なかもり・いちろう

教職歴35年。同校に赴任して2年目。

**福岡県立若狭高校**

◎ 教育目標は、「異質のものに対する理解と  
寛容の精神」を養い、教養豊かな社会人の育  
成を目指す。文部科学省「スーパーサイエ  
ンスハイスクール」の指定は現在2期目。「日  
本イノベーション教育ネットワーク」研究校

◎ 設立 1897（明治30）年

◎ 形態 全日制・定時制／全日制は、普通科・  
文理探究科（国際探究科、理数探究科）・海  
洋科学科／共学

◎ 生徒数 1学年約300人

◎ 2020年度入試合格実績（現浪計）

国立大は、北海道大、東北大、筑波大、金沢大、  
福井大、神戸大などに80人が合格。私立大は、  
東京理科大学、明治大、同志社大、立命館大、関  
西大、関西学院大などに延べ349人が合格。

◎ URL <https://www.wakasa-h.ed.jp>

**藤野** 中森校長が言われた通り、カ  
リキュラム・マネジメントの視点は

重要です。本校であれば、教育理念

の「思いやり・人間愛を持った社会  
的リーダーの育成」の達成に向けて、  
教育活動計画に特別活動をどう位置  
づけ、実施していくのか。コロナ禍  
による新たな生活様式の中で、学校  
行事やホームルーム活動、生徒会活  
動などを発展させるためにはどうす



鳥根県立松江北高校 校長

**常松徹** つねまつ・とおる

教職歴36年。同校に赴任して2年目。

**鳥根県立松江北高校**

◎ 教員伝習校変則中学校を前身とする伝統  
校。校訓は「質実剛健」。教育目標は、「高い  
知性と豊かな心情、強い意志を培い、心身と  
もに健康な人格の形成を目指す」。授業改革  
と地域課題解決型キャリア教育を通じて、社  
会に貢献できる人材の育成に努めている。

◎ 設立 1876（明治9）年

◎ 形態 全日制／普通科・理数科／共学

◎ 生徒数 1学年約280人

◎ 2020年度入試合格実績（現浪計）

国立大は、東京大、一橋大、京大、大阪大、  
神戸大、鳥取大、鳥根大、広島大、九州大  
などに165人が合格。私立大は、慶應義  
塾大、上智大、早稲田大、同志社大、立命  
館大などに延べ391人が合格。

◎ URL <http://www.matsuekita.ed.jp>

ればよいのか。教師と生徒が一緒に

考えるべき課題だと捉えています。  
**常松** 様々な活動を生徒主体で行う  
ことは、新学習指導要領の趣旨と照  
らし合わせても一層重要です。これ  
まではよい成果を出そうと、教師が

手をかける部分が少なからずありま  
した。これからは、生徒に多くを任  
せ、失敗も含めて何事も経験させたい  
と考えています。全校体制で取り  
組む探究学習において進めている地  
域との連携を、特別活動を充実させ  
る視点で強化することも課題です。

**中森** 生徒や学校にとって、教師で  
も生徒でもない地域や外部の人か  
ら、特別活動によってどのような資  
質・能力が生徒に育まれているのか  
について評価を受けることは、大き  
な意味があるでしょう。実は、海外  
の連携先から、日本の学校は取り組  
みを外部に積極的に発信すべきだと、  
アドバイスを受けました。探究

学習に限らず、学校祭や部活動でも  
成果を外部に発信し、形成的評価を  
受ける。それが次の活動への原動力  
になると思うのです。そうした社会  
に開かれた学校づくりは、学校教育  
に関心が集まっている今こそ、進め

ていくべきではないでしょうか。

# 「主体的で深い学び」を問う

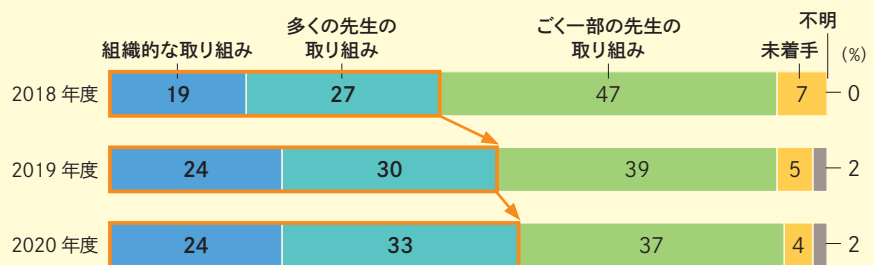
前号（8月号）の特集を受けて、教育の「これから」を考えるシリーズ特集をスタートする。第1回のテーマは、新学習指導要領において、資質・能力を育成するための学びとして求められている「主体的・対話的で深い学び」だ。

「アクティブ・ラーニング」の言葉で注目されて以来、新学習指導要領の実施が近づくに連れて、その学びの実現に向けた授業改善の取り組みは全国に広がっている。ただ、それは特定の指導方法のことではない半面、教師間の理解や認識が合わせづらいのも実情のようだ。そして、コロナ禍の中での授業実践を通じて、自身の授業のあり方を見つめ直している教師も少なくない。「主体的・対話的で深い学び」とは、どのような学びなのか——今号は、その問いに5人の教師とともに向き合ってみていただきたい。

「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善の取り組みは拡大傾向に

コロナ禍の中で、自身の授業のあり方を見つめ直す教師たち

◎「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善の状況



\*ベネッセコーポレーション教育情報センター「教育・入試改革対応に関する調査」（2020年9月）を基に編集部で作成。

「アクティブ・ラーニング」の重要性が広まっていった頃、「指導の特定の型や手法ではなく、考え方である」と繰り返し言われていた。しかし、改善を繰り返し、定着してきた授業形態を、コロナ禍において変えざるを得ないことに対して困惑している自分がある。「それまでやってきた型や手法」が使えずに困るというのは、「型や手法」にこだわっていた部分があったからだろう。「主体的・対話的で深い学び」の原点に立ち返り、授業のあり方を再考している。（山形県）

オンライン教材を作成し、テキストとしっかり向き合えば、対面でも生徒が自ら獲得できる力があることが分かった。今は、対面でしかできないことは何か、考えている。（北海道）

学びに向かう姿勢を育成すれば、自宅学習になったとしても、生徒は自身で学習内容を考え、有意義に過ごせたのではないかと考えると、教師の力不足を感じる。学校で作成した動画を活用して積極的に学ぶ生徒もいて、自分で学習を進められる生徒とそうでない生徒の差が大きく開いてしまった。「主体的な学び」とは何か、どうしたら生徒が「主体的に学べる」のだろうか。（茨城県）

出典／『VIEW21』高校版読者モニターへのアンケート結果（アンケートは、2020年6月、8月にウェブとファクスで実施）。

特集

シリーズ 教育の「これから」を考える ①

# 「主体的・対話」

5人の教師が考える

「主体的・対話的で深い学び」実践事例



国語

宮崎県立高鍋高校  
三浦章子

P.9-11



地理歴史・公民  
(世界史)

静岡県立御殿場高校  
美那川雄一

P.12-14



数学

大阪府・私立近畿大学  
附属高校・中学校  
芝池宗克

P.15-17



理科(生物)

熊本県立熊本北高校  
溝上広樹

P.18-20



英語

大阪府立今宮高校  
森一真

P.21-23

解説 「主体的・対話的で深い学び」

5人の教師の実践を交えて

國學院大學 人間開発学部 初等教育学科 教授 田村 学

▶ P.24-27



オンライン・ワークショップ  
第1回リポート

自校の教師同士の対話を通じて、  
教育の「これから」を考える

▶ P.28-30

生徒の・教師の・自校の・社会の  
NEXTを語り合うワークシート

今号の特集のテーマを  
自校の教師同士で深める  
ツールとして、ご活用ください

▶ P.32-33



このマークのある図版は、ベネッセ教育総合研究所のウェブサイト (<https://berd.benesse.jp>) からダウンロードできます。  
「HOME → 教育情報 → 高校向け」をご覧ください。

# 生徒に身につけさせたい資質・能力を起点とした「これから」の授業の実現を目指して

本誌の連載「実践 アクティブ・ラーニング」に登場した5人の教師を再び取材。彼らが考える「主体的・対話的で深い学び」とその実現に向けた実践、そして、コロナ禍における気付きを踏まえた自身の課題について聞いた。

「主体的・対話的で深い学び」は、新学習指導要領では下記のように説明されているが、自身の授業を振り返った時、それぞれの学びに対応する活動として、どのような実践をしているだろうか。中央教育審議会の答申(\*)では、「主体的・対話的で深い学び」の実現は、「形式的に対話型を取り入れた授業や特定の指導の型を目指した技術の改善にとどまるものではなく」、「特定の指導方法のことも、学校教育における教員の意図性を否定することでもない」と示されており、教師によって方法も内容も様々だ。そこで、5人の教師の実践から、その多様性を感じつつ、「主体的・対話的で深い学び」の本質について一考していただきたい(図)。

## 新学習指導要領における「主体的・対話的で深い学び」の説明

### 資質・能力を育む 主体的な学び

学ぶことに興味や関心を持ち、自己のキャリア形成の方向性と関連づけながら、見通しをもって粘り強く取り組み、自己の学習活動を振り返って次につなげる「主体的な学び」が実現できているかという視点。

### 資質・能力を育む 対話的な学び

子供同士の協働、教職員や地域の人との対話、先哲の考え方を手がかかりに考えること等を通じ、自己の考えを広げ深める「対話的な学び」が実現できているかという視点。

### 資質・能力を育む 深い学び

習得・活用・探究という学びの過程の中で、各教科等の特質に応じた「見方・考え方」を働かせながら、知識を相互に関連づけてより深く理解したり、情報を精査して考えを形成したり、問題を見いだして解決策を考えたり、思いや考えを基に創造したりすることに向かう「深い学び」が実現できているかという視点。

【深い学び】に関する補足 「主体的・対話的で深い学び」の実現を目指して授業改善を進めるにあたり、特に「深い学び」の視点に関して、各教科等の学びの深まりの鍵となるのが「見方・考え方」である。各教科等の特質に応じた物事を捉える視点や考え方である「見方・考え方」は、新しい知識及び技能を既に持っている知識及び技能と結びつけながら社会の中で生きて働くものとして習得したり、思考力、判断力、表現力等を豊かなものとし、社会や世界にどのようにかかわるかの視座を形成したりするために重要なものであり、習得・活用・探究という学びの過程の中で働かせることを通じて、より質の高い深い学びにつなげることが重要である。

\* 文部科学省「高等学校学習指導要領(平成30年告示)解説 総則編」(2018年7月)を基に編集部で作成。

## 図 「理想の授業」を目指すアプローチに対応する、5人の教師が示す実践の視点

### 「理想の授業」を目指すアプローチ

資質・能力を育成するために  
目指す「理想の授業」を描く

理想と現状のギャップ  
(解決すべき問題)を捉える

現在の自分の授業を振り返る

### 5人の教師が示す実践の視点

私が考える

「主体的・対話的で深い学び」

私の「これから」の授業、越えるべき壁

コロナ禍における気付き

私が実践してきた「これまで」の授業

\* 中央教育審議会「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について(答申)」(2016年12月)。

## 私が考える「主体的・対話的で深い学び」

## 私が育成を目指す資質・能力

相手の立場や思いを想像し、自分の考えや気持ちを相手に的確に伝えられる思考力や表現力、対話力。それらを発揮しながら、多様な価値観を持つ他者と対話・協働することで、問題を解決したり、何かをつくり上げたりする力。

## 資質・能力を育む主体的な学び

生徒が学習の内容や目的を理解し、「今、あるいは今後の自分に必要な事柄だ」といった強い思いを持って実践する学び。主体的な学びは、対話的な学び、深い学びを行うための動機となると考える。

## 資質・能力を育む対話的な学び

学習のテーマに対して、どの生徒も高い関心を持ち、楽しさを感じ、話が尽きない状態で意見を述べ合うことで、考えを広げたり、深めたりする学び。状況に合わせて表現方法を工夫し合うことで、対話が円滑に行われ、話が尽きず、考えが広がる状態をつくる。

## 資質・能力を育む深い学び

抽象と具体を往還する過程で題材の本質を深く理解し、思考を深め、表現を磨いていく学び。生徒が自分の持つ情報や経験と題材とを結びつけ、自分事として捉え直すことで理解を深め、自分の言葉で説明できるようになる。



## みうら・あきこ

教職歴 26 年。同校に赴任して 10 年目。指導教諭。探究科学科主任。国語科担当。アクティブ・ラーニングの実践は 7 年目。本誌 2017 年 10 月号「実践 アクティブ・ラーニング」に登場。

**宮崎県立高鍋高校** 秋月藩校「明倫堂」の精神を引き継いで開校。「身心學道」「師弟同行」「文武両道」「真善美」などを教育理念に掲げる。2019 年度、課題研究を通して学力向上を目指す探究科学科を設置。同年度から、文部科学省「学校 ICT 環境整備促進実証研究事業」の指定校。

設立 1923 (大正 12) 年 形態 全日制 / 普通科・探究科学科・生活文化科 / 共学 生徒数 1 学年約 260 人 2020 年度入試合格実績 (現浪計) 国公立大は、筑波大、横浜国立大、九州大、熊本大、宮崎大、鹿児島大などに 47 人が合格。私立大は、法政大、立教大、関西大などに延べ 78 人が合格。

URL <http://takanabe-hs.ed.jp/>

# 「当事者意識」を高める協働学習で 抽象と具体を行き来し、深い学びに迫る

宮崎県立高鍋高校 三浦章子 あきこ

主体的・対話的で深い学び

実践事例

1

私が実践してきた「これまで」の授業

題材を自分に結びつけて、その本質を理解する

資質・能力を育成するために、私は「1人でできる学び」と「皆がいるからできる学び」を生徒に意識させる指導を大切にしています。例えば、漢字や語句の学習は1人で進められますが、題材について意見を交わし合ったり、伝え方を工夫して表現力を高めたりする国語の本質にかかわる学習は、他者の存在が欠かせません。

授業では、1人で考えるよりも思考が深まったり、新たな視点を獲得したりしやすいなど、「皆がいる」意義を繰り返し伝え、そういった体験ができるように、単元や題材の特性に合わせて、グループワークや群読、知識構成型ジグソー法(P.10\*)など、「皆がいるからできる学び」を多く取り入れています。そうした学びに取り組み中で、資質・能力が育まれる実感を得ると、生徒は「この学びを通して、こんなスキルを獲得したい」といった目的意識を持つようになり、主体的に取り組みよう



写真1 1年次の現代文の授業では、「まちの豊かさ」をテーマにした評論を読んだ後、探究学習を行っている時のグループに分かれて、それぞれが考える「豊かさ」について話し合った。普段から協働学習を多く取り入れているため、積極的に意見を述べ合う姿が見られた。三浦先生は各グループを回り、興味深い視点を認めるなどして、話し合いが活性化するようにしていた。

にもなります。

そして、生徒が協働的な学びに主体的に取り組むことが、深い学びにつながるようになっていきます。

国語における深い学びとは、抽象と具体の往還を通して題材の本質を理解し、思考を深め、表現を磨くことだと、私は考えます。例えば、1年次の現代文の授業では、評論「まちの

豊かさとは何か」を精読した後、筆者の考える「豊かさ」についてグループで話し合ってみていただきました。そして、探究学習で行った地域での活動を振り返り、そこで自分たちが感じた「豊かさ」と対比させることで、評論のテーマを自分事として捉え直させることを意図しました(写真1)。ある生徒は、「私は、探究学習を

通じて人とのつながりを築くことができた。それこそが、筆者の述べる豊かさだと感じた」と発表しました。ほかの発表者も、筆者の主張をきちんと捉えた上で、それぞれが考える「豊かさ」を自分なりの言葉で具体的に説明できており、深い学びを實現できた手応えがありました。

抽象と具体の往還に欠かせないのが、シンキングツールです。3年間の指導を通して、「比較する」「分類する」「関係づける」「整理する」など、様々な思考過程を具体化する多様なシンキングツールを提示し、生徒自身が場面に合わせて適切なツールを選べるようにしています。先ほど例示した評論の授業では、筆者の主張を「ステップ・チャート」などでまとめたグループがありました(写真2)。シンキングツールを使うと、問いを自分の体験などに結びつけて考えたり、複数の情報を自分の言葉で再構成して相手に分かりやすく説明したりしやすくなります。そのように、複雑な情報をシンキングツールで図式化して要点を捉える練習は、生徒が今後の生活や仕事などの場面において、他者に説明するために欠かせない思考力の育成に

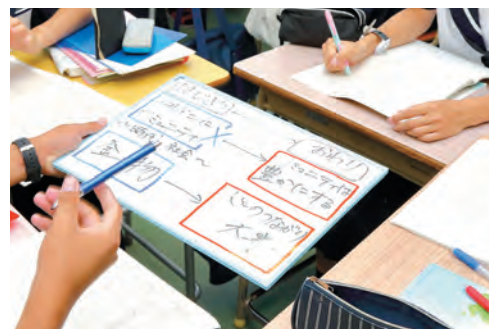


写真2 どのグループも、筆者の主張を考える上で適切だと思うシンキングツールを自分たちで判断して選び、多様な意見を図式化することによって収束させていった。

つながると考えています。

### コロナ禍における気づき

**対話のあり方に変化を感じ、状況に応じて表現する力を育成**

新型コロナウイルスの感染拡大による臨時休業中は、プリント学習が中心となり、「皆がいるからできる学び」が中断されました。私自身、オンラインで人と話す機会が増えたことから、その学びの大切さを改めて痛感し、対話のあり方を見つめ直ししました。そして、顔を合わせる対話以外にも様々なコミュニケーションの方法があることを、生徒に理解して

\* ジグソーパズルを解くように、協力して全体像を浮かび上がらせる協調学習法の1つ。ある課題について、複数の視点で書かれた資料を読む「エキスパート活動」、そこで得た知識を交換し、考えを深めていく「ジグソー活動」、全体でグループの意見を交換する「クレストーク活動」の3つの活動から成る。

ほしいと考えるようになりました。

そこで、学校再開後、教室内をホワイトボードで仕切り、数人の生徒がオンライン会議ツールで考えを伝え合い、ほかの生徒はプロジェクトに映し出された画面を見るといった形態の発表を授業に取り入れられた(写真3・4)。発表を聞いた生徒は、「資料ばかりを見ずに、前を向いて話した方がよい」「資料の提示方法を工夫した方がよい」などと、アドバイスをしていました。

オンライン会議ツールによる対話は、「状況に応じて適切な表現で対話する力」の育成がねらいです。ほかにも地域の人に電話をしたり、壇上でプレゼンテーションをしたり、様々な対話の状況があり、それぞれで適切な表現方法は異なります。授業では、普段と異なる対話を体験し、「対面で話す場合と何が違うか」と問いかけたことで、生徒の考える対話のあり方を描きだしたのではないかと感じています。

実は臨時休業中、実施まで2年を切った新学習指導要領を読み直し、これからの国語では、「実社会」「客観的視点」「情報収集・整理・分析」「他者性」といった観点がますます重

視されることを確認しました。そして、その中で資質・能力の3つの柱を育成する指導のあり方を考えようと、3年間を通して思考力・判断力・表現力等を効果的に育むために取り上げるべき題材とその順序などを組み立て、県内の若手の教師たちとオンライン会議ツールを用いて議論しました。そうした対話は、資質・能力を育成する指導が一層重視される中で不可欠なプロセスであり、今後の指導の方向性であると改めて認識できました。

私の「これから」の授業、越えるべき壁

### 学び合いを主体にした授業で創造的な学び手を育てたい

現在は、「皆がいるからできる学び」の充実に力を入れています。これまでの授業でも、教師が一方的に説明する時間をできるだけ減らしてきましたが、今後はさらに、「1人でできる学び」を効率的に行えるよう、家庭学習の取り組み方を工夫することで、授業での協働学習の比率を高めることを目指しています。

自分が関心を持つテーマについ

て、ほかの生徒と考えを深めていく活動が授業の中心になれば、生徒はますます意欲的に学ぶようになるでしょう。そして、「この題材についてもっと考えたい」「こんな学習活動をしてみたい」などと主体的に取り組んで活動が深まっていくと、まさに「話が尽きない」といった状態になり、考えが広がる好循環をもた

らす対話が生み出されるはず。生徒がそうした創造的な学び手となった時、新学習指導要領の「主体的・対話的で深い学び」の説明にある「思いや考えを基に創造したりすることに向かう」といった状態が実現するに違いありません。現在は取り組みの途上であり、より高い次元の深い学びを追究していきます。

写真3 発表者は、教室の後方のホワイトボードで仕切られた場所に入り、オンライン会議ツールで考えを発表した。



写真4 発表者の生徒がオンライン会議ツールでグループでまとめた考えを発表の様子を、ほかの生徒はプロジェクターで視聴。三浦先生が「気になったことはありませんか」と投げかけると、多くの生徒が、オンライン会議ツールでの対話と通常の対話との違いを意識したアドバイスをしていた。

# 生徒が自分の言葉で歴史を語り合い、世界史の本質に触れることで、想像力や広い視野を育む

静岡県立御殿場高校 美那川雄一

## 私が考える「主体的・対話的で深い学び」

### 私が育成を目指す資質・能力

時間軸や空間軸を広く捉えて、各事象のつながりを理解したり、各事象への思考を深めたりできる広い視野。自分とは直接的なかわりがない世界で起きる事象や異なる価値観を持つ人に対して、想像を巡らせて理解や共感をする力。



### 資質・能力を育む主体的な学び

学びに前向きな気持ちを持つとともに、知識・技能を活用したり、思考力・判断力・表現力等を発揮したりすることで、新たな疑問や仮説を創出していく学び。常に自己と対話して、自分の学びの状態を改善しようとする学び。

### 資質・能力を育む対話的な学び

自他の意見の違いに気づき、新たな視点を得ることで、自己を成長させる学び。世界史の授業では、歴史学のルールを共有して、根拠に基づいて自分の考えを語り合うこと。

### 資質・能力を育む深い学び

「主体的な学び」「対話的な学び」が実現されて、学習課題や教材、あるいは自分の人生の課題に対して、より深く向き合い、新たな考えや価値を創造していく学び。世界史においては、歴史は絶対的の真実ではないことに気づき、他者とのかわりなどを通して自分の考えを形づくっていく学び。



#### みながわ・ゆういち

教職歴 16 年。同校に赴任して 4 年目。3 学年主任。地理歴史・公民科 (世界史)。アクティブ・ラーニングの実践は 12 年目。本誌 2017 年 2 月号「実践 アクティブ・ラーニング」に登場。

静岡県立御殿場高校 校訓に「質実剛健にして美しく」を掲げる。工業・商業・家庭の 3 学科を擁する専門高校。3 年間を通して各教科の授業や特別活動を結びつけ、育成を目指す資質・能力を体系化した「教科横断 MAP」の下、「地域の未来を創造する人材」の育成を図る。

設立 1902 (明治 35) 年 形態 全日制/創造工学科・創造ビジネス科・生活創造デザイン科/共学 生徒数 1 学年約 200 人 2020 年度進路実績 (現役のみ) 私立大は、千葉工業大、関東学院大、常葉大などに延べ 12 人が合格。短大、専門学校進学 50 人。就職 124 人。

URL <http://www.edu.pref.shizuoka.jp/gotemba-h/home.nsf/>

#### 私が実践してきた「これまで」の授業

自分の言葉で歴史を語り合せて生徒が「歴史する」授業

私は、「教科の本質を生徒に委ねる授業」を目指して、協働学習を土台とした論述指導に力を注いでいます。教師の説明だけでも知識は得られますが、生徒が自分の頭で考えて、表現を工夫する学習を重ねなければ、様々な資質・能力の育成に結びつかないからです。

以前は、授業の中で重要で面白い山場ほど、私が没入して説明していましたが、今は、生徒に自分の言葉で歴史を語らせて世界史の本質を体験させる、言わば、生徒が「歴史する」授業を試みています。例えば、1 年生の授業では、教科書に書かれた「啓蒙思想がフランス革命に影響を与えた」という記述を、ルソーの『社会契約論』と「フランス人権宣言」の読み比べを通じて確認し、その内容を論述する活動を山場としました。

最初に、「教科書の記述は本当か、自分で確かめてほしい」「歴史の研究者と同じ作業を体験してほしい」と投げかけることで、生徒に批判的



写真1 論述に取り組む時間は約20分間。この生徒は、「両方に『自由』という言葉が用いられている」などの根拠を示し、啓蒙思想がフランス革命に影響を与えたという立場で論述していた。

な視点を持たせ、確かめたいという気持ちで喚起しました。そして、個人で『社会契約論』と『フランス人権宣言』を読み比べ、「啓蒙思想の影響が見られる・見られない」のどちらか、自分の見解を明らかにした上で、共通する言葉や内容などを根拠として論述させました（写真1）。

次に、周りの生徒と論述を交換して読み合い、「この考え方がよい」「ここが分かりづらい」などとコメントを書いて戻し、指摘された点や他者の論述を読み気づいた点などを参考に自分の論述を加筆・修正させました（写真2）。そこでは、主体的に学ぼうとする生徒ほど、完成度の高い論述にしようと、新たな視点を加えたり、表現を直したりしていました。

歴史学は、研究者が膨大な資料を

照合して検証を重ねた結果であり、教科書の一文一文もそうした作業に基づいて書かれています。今回の資料（『社会契約論』と『フランス人権宣言』の一部）は、生徒が読んで内容を理解できるように、私が書き換えたものですが、生徒は、研究者と同様の作業に取り組んだことで、歴史の本質に触れる体験ができたと思います。そうした学習を繰り返す中で、「世界史は、年号や事実を覚えるだけでよい」といった思い込みから脱し、広い時間軸や空間軸で事象を捉えたり、自分とは直接的な関係がない事象にも想像を巡らせたりするようになるなど、世界史ならではの資質・能力が育まれると考えています。

授業の最後には、前時と本時のまとめで、「フランス革命の中心的な役割を担ったのは誰か」と問いかけ、「裕福な商人」「貧乏な農民」「貧乏な都市民衆」「女性」の中から選ばせました（P.14 写真3）。この問いは、フランス革命を理解するため、多くの研究者が取り組んできた興味深いテーマです。生徒の多くは、「貧乏な農民」「貧乏な都市民衆」を選び、私が「裕福な商人」が正解だと伝えると、学級全体がどよめきま

した。そして、「この中で『社会契約論』を購入できる経済力があり、難しい文章を読める教育を受けたのは誰か」と問うと、「そうか!」といった気づきの声があちこちから上がりました。次時は、4者の各立場からフランス革命の展開を読み解きます。最後の気づきが余韻として生徒の中に残り、主体的に学ぶ姿が見



写真2 書いた論述を複数の生徒で見せ合い、互いによい点や気づいたことを指摘し合った。美那川先生は、「相手のよいと思った点を積極的に自分に取り入れる姿勢は、就職後、社会に出てからも大切にしてほしい」と生徒に伝えて、学び合いの活性化を促した。

られることを期待しています。

コロナ禍における気づき

「個」で課題に向き合う場面でも、つながりを感じさせる

臨時休業中は、生徒のよい論述を紹介する動画の配信などを行いました

た。学校再開後に生徒に行ったアンケートでは、「動画で勉強を進められた」「問題の解き方や答えは、解答・解説を見れば分かる」といった声がある一方で、「自分だけで勉強する大変さに気づいた」「1人で勉強すると不安になる」などの声も多く寄せられました。

本校には勉強が得意ではない生徒が少なくありませんが、そうした生徒も、学校で学びの場と経験を共有することができれば勉強に向かえるのだと、改めて実感しました。協働学習に限らず、「個」で課題に向き合う場面でも、共通の課題に取り組むという生徒同士のつながりを感じさせる指導は大切です。「フランス革命の中心的な役割を担ったのは誰か」という問いでも、自分1人ではなく、皆で間違えたからこそ、気づきや理解は深まりました。そうした生徒の姿から、ずっと心がけてきた「学習集団を育てる」という目標を、より意識するようになりました。

以前は、授業でできるだけ多く話し合いをさせていましたが、最近は密を避けるため、話し合いは必要な場面に絞ったり、ノートの交換にしたりと、対話のあり方を見直しまし

た。そのように変えてみると、話し合いはここぞという場面で行うのが効果的で、何度も繰り返すと、生徒が授業の山場を感じづらいのだと気づきました。今後はICTを活用して、クラスを超えた意見交換の場を設けるなど、様々な形式の対話を取り入れて、生徒間や教師とのつながりを一層感じられる授業を目指します。



写真3 フランス革命の中心的な担い手を考えさせ、正解だと思う選択肢に手を挙げさせた場面。この後、「社会に不満を抱く、貧しい農民や都市民衆が革命を起こしたのだろう」といった生徒の思い込みが覆されたことで、教室中から驚きの声が上がリ、本テーマへの関心をさらに高める姿が見られた。

### 私の「これから」の授業、越えるべき壁

## 生徒間の考え方の差異から対話が生まれ、学びは深まる

現在は、「教師が何を教えて、何を教えないか」を精査する作業に取り組んでおり、育成したい資質・能力を踏まえ、「生徒に何を考えさせる

か」を検討しています。一つひとつの授業のみならず、単元、さらにはカリキュラム全体を同様の視点から見直し、指導改善を図っていきます。

新学習指導要領では、世界史の学びは大きく変わります。学習内容が増えて、ややもすると、詰め込み型の授業に陥ることが考えられる状況下で、生徒に委ねる部分をどこに設定するかの見定めが、これまで以上に重要になるでしょう。

生徒が思考する授業では、同一のテーマに対して、生徒間の認識が全く異なる状況が起こり得ます。そもそも歴史学とは、新しい資料が発見されたり、思考の切り口を変えたりすることで発展してきました。明確な根拠に基づくといった歴史学のルールさえ守られていれば、生徒間の認識が異なるのはむしろ望ましいことです。その差異がさらなる対話を生み出し、学びが深まっていくからです。絶対的な真実を学ぶのではなく、生徒が根拠ではつながりながら、一人ひとりが根拠に基づいて歴史を語り合い、その関係性の中で自分の位置を確認して成長していく。それが、私の理想とする世界史の授業です。

## 私が考える「主体的・対話的で深い学び」

## 私が育成を目指す資質・能力

これからの複雑化する社会を生き抜く上では、事実を正確に捉えられるようになることが求められるため、数学を使って物事の本質を見抜く力を育みたい。そして、授業で経験する協働的な学びを通して、人とよりよいかかわっていく力を身につけてほしい。



## 資質・能力を育む 主体的な学び

教師からの指示や働きかけがなくても、自ら課題を設定したり、それに取り組んだりする学び。その時、生徒は目の前の課題に対して当事者意識を持ち、何をどのように学ぶのかを自分で管理し、ともに学ぶ他者に対して責任も持っている。

## 資質・能力を育む 対話的な学び

生徒が、他者と問いかけ合うことを通じて、熟考するための手がかりを得ようとする学び。教師には、生徒が他者と問いかけ合うに値するテーマを設定することが求められる。

## 資質・能力を育む 深い学び

他者との対話を経て、過去の自分と比べて思考が深まる学び。知識・技能が身につけていること、数学的な見方・考え方をを用いることで、世の中の事象に対する解釈が変わったり、深まったりしていることを自覚するためには、振り返りが必要になる。



## しばいけ・むねかつ

教職歴 32 年。同校に赴任して 18 年目。2010 年頃から協働学習を取り入れ、13 年度から反転授業を開始。本誌 2017 年 6 月号「実践 アクティブ・ラーニング」に登場。

大阪府・私立近畿大学附属高校・中学校 日本工業学校として設立し、1949 年に現校名に改称。2001（平成 13）年に附属中学校と高校が統合した。タブレット端末や電子黒板などで授業の ICT 化を推進。英語特化コースの設置、留学制度の充実など、グローバル教育にも注力している。

設立 1939（昭和 14）年 形態 全日制／普通科／共学 生徒数 1 学年約 1000 人

2020 年度入試合格実績（現浪計）国公立大は、東京大、京都大、大阪大、神戸大、奈良県立医科大学などに 141 人が合格。私立大は、近畿大などに延べ 1300 人が合格。

URL <https://www.jsh.kindai.ac.jp/>

主体的・対話的で深い学び

実践事例

3

# 教師の役割を生徒に委譲しながら、 社会で求められる数学的な力を養う

大阪府・私立近畿大学附属高校・中学校  
芝池宗克

私が実践してきた「これまで」の授業

生徒同士が切磋琢磨して  
資質・能力を身につける

私は 2010 年頃から、ペアやグループで協働的に問題を解く授業スタイルを取り入れています。ただ、生徒たちは、私の指示に応じて表面的には活発に活動していましたが、頭や心が十分に活性化していませんように感じていました。

13 年度、学校全体にタブレット端末が導入されたことをきっかけに、反転授業に取り組みようになつてから、一気に授業のあり方が変わり、生徒の様子も変化しました。反転授業では、生徒は自宅でタブレット端末などを使って教科書の内容の解説動画を視聴し、教室ではその復習や応用に時間を割きます。その一つの形が、生徒が作問し、それをほかの生徒が解き、作問した生徒が採点と解説を行う「級友との錬磨」と名づけた演習形式の授業です。

「級友との錬磨」では、解説役の生徒は、クラスメートの解答を採点する中で、「なぜ間違っているのか」「別解はないか」など、他者の視点を借り

て思考します。解説の場面では、重要な箇所を空欄にしておき、クラスメートと対話しながら穴埋めしていく形式で解説するなど、聞き手の思考や理解を深められるよう、解説役の生徒は工夫を凝らします。クラスメートの成長を願う気持ちは、授業中の活動をよりよいものにするだけでなく、生徒が将来社会に出た時にも求められる、相手に物事を分かりやすく伝える力、周囲の思考を促す力、発言を引き出す力を育む土台としても重要です。

生徒間の協働を授業の根幹に据えることは、学校の本質的な価値を高めるものだと確信した私は、それまで教師の役割と思われていたことを、できるだけ生徒に委譲しようと考えようになりました。授業の進行の一部を生徒に任せるだけでなく、最終的には生徒同士で深い学びにつながる問いかけもし合えるようになることを目指しています。

例えば、1年生の授業(写真1) 3)では、宿題の中で多くの生徒の理解度が低かった問題をとり上げ、教師役の生徒による授業とペアでの教え合いを行っています。まず、生徒は宿題に取り組み、問題ごとの理

解度を「○△×」の記号でオンライン上に入力します。記号は、理解が進むにつれて、生徒自身で更新できます。入力した結果はクラス全員が見ることができ、クラスメートはどのくらい理解しているのか、×や△はどんなベースで○に更新されているのかなどがオープンになっているのです。それは、みんなで×や△を○へと変えていこうという雰囲気をつくるため、そして一人ひとりの生徒が今の自分のできていくこと、できていないことを把握すること、×や△を○に変えていくための見通しを持ち、主体的な学びを実現するためです。

コロナ禍における気づき

豊かな人間関係を築く  
対面授業の価値を実感

新型コロナウイルスの感染拡大を受けた臨時休業中、私の授業は、動画や課題の配信を中心とした一方向型のオンライン授業が主となりました。それまでの反転授業で家庭学習として位置づけていた部分が授業の中心となり、生徒同士の教え合いな

写真1 1年生の授業では、2人の生徒が教室の前後で教師役を務め、宿題の中で生徒の理解度が低かった2問を題材に授業を進める。芝池先生は教師役の生徒に、「一方的に説明するだけではなく、重要な部分を考えてもらえるような問いかけをしてください」と声をかける。教師役の生徒は、「この場合の考え方を説明してください」「皆さん、今の説明を踏まえると、次の問題はどんな解き方になるか、近くの人と話し合ってみてください」と、生徒に問いかけながら授業を進める。



どができなくなったのです。一部の授業では双方向型のオンライン授業を行いました。生徒が熟考する環境をオンライン上につくることは難しいと感じました。特に、入学したばかりで人間関係が十分に構築できていない1年生については、オンラインで真に双方向型の授業をつくることは困難でした。オンライン授業

は、知識の伝達という授業の目的の一部分を補完することはできて、対面授業の代わりにはならないことを改めて実感しました。

6月第2週に登校再開となり、授業の様子は以前の形に戻りつつあります。ただ、3人で向かい合って話し合っていたところを、ペアで隣り合ったまま話し合うようにするな

り合っていたまま話し合うようにするな



写真2 芝池先生の授業には、ペア活動が頻繁に取り入れられている。授業の冒頭で宿題の答え合わせ、分からなかったところの説明などをペアで行った後、芝池先生の「円順列を考える時のポイントは？」という問いを受けて、2人で話し合う。宿題で多くの生徒の理解度が低かった2問を使った場面（写真1）では、ペアでどちらの問題の授業に参加するの半分を決め、席を移動してそれぞれの授業に参加。再び元の席に戻って理解した内容を説明し合う。ペアを組む相手の学びを保証する責任感がおのずと高まる。

授業に取り組む同僚の中西洋介先生との対話を通じてです。私たち教師は、生徒が主体的な学習者、アクティブラーナーになることを願っていますが、「主体的な学習者」とは具体的にどのような状態の人を指すのか、中西先生は「reactive（反応的）」「inactive（不活発）」「proactive（積極的な、主体的な）」という言葉で整理しました。朝の挨拶で例えるならば、私が生徒に「おはよう」と挨拶し、返事があるのが「reactive」、返事がないのが「inactive」な状態で、私の挨拶を待たずに自ら挨拶するのが「proactive」な状態です。学習ならば、教師の指示を待たず、自ら学ぶのが「主体的な学習者」です。

教師の働きかけがなくても、目標と見通しを持って学び続ける生徒を育てるにはどうすればよいのか、模索を続けていますが、手応えも感じています。先日、担任をしている1年生の教室の後ろの黒板に、「やってみて！」と数学の問題が書かれました。よい問題を思いついたからみんなに共有したくなった生徒がいたのでしよう。生徒が問いを立てて、クラスメートがその問いに取り組みむという、「級友との錬磨」につ

ながる雰囲気醸成されてきているのを感じました。



写真3 ペア活動が終わった生徒に、「もう1問新たな例題を作るなら、どんな問題にしますか」と芝池先生は問いかける。生徒に自ら問いを立てさせ、学びを深めるきっかけをつくっている。

ど、人数やソーシャルディスタンスの確保に対する配慮は続いています。また、1年生は、1学期に授業が十分にできなかった分、2学期になった今も、生徒間の関係づくりを重視している段階です。協働や切磋琢磨は豊かな人間関係がないと実現しませんから、決して焦ってはいけないと思っています。

私の「これから」の授業、越えるべき壁

## 教師の働きかけを待たず自ら学ぶ生徒を育てる

教師の指示を待たず、生徒が他者と協働して学習に取り組む——目標とする生徒像を具体的にイメージできるようになったのは、ともに反転

# 生徒が疑問や質問を出し合う対話を軸にした学びで、自律的学習者を育てる

熊本県立熊本北高校  
溝上<sup>みぞかみ</sup>広樹

## 私が考える「主体的・対話的で深い学び」

### 私が育成を目指す資質・能力

〔興味・関心〕 学習内容を自分事として捉え、自然環境の課題について探究し、生命を尊重する態度。〔協働性〕 相手の説明を傾聴し、気づきや疑問を基に、自らの意見を発展させ、周囲により影響を与えることができる。〔科学的思考力〕 重要語句同士を関連づけながら、自らの言葉で生命現象を説明でき、自分で情報を集め、分析する力。(2年生「生物」のルーブリックより)



### 資質・能力を育む主体的な学び

楽しいと感じ、自分に必要な事柄として知りたいという思いを強く持って進める学び。自ら目標を設定し、その到達に必要なことを見いだして取り組む、自律した学び。

### 資質・能力を育む対話的な学び

自分にはない視点・気づきを得て、それらを基に理解を深め、考えを広げる学び。クラスメートとの対話が、その学びに最適な場だと考える。生徒の質問には生徒が気づきを得られるよう対応し、資料も生徒が気づきを得られる内容を厳選する。

### 資質・能力を育む深い学び

学習内容を、日常生活や他教科の学習などに関連づけたり、比較したりして、情報を整理しながら自分事として捉え、自分の言葉で説明できるようになる学び。自身の中で生物学を体系化する学びでもある。



#### みぞかみ・ひろき

教職歴 11 年。同校に赴任して 4 年目。SSH 研究部長。理科 (生物) 担当。アクティブ・ラーニングの実践は 8 年目。本誌 2017 年 8 月号「実践 アクティブ・ラーニング」に登場。

熊本県立熊本北高校 「敬愛」「向学」「進取」の校訓の下、「師弟一如」の教育活動を展開。米国モンタナ州の姉妹校との交流や海外研修などを柱とした、グローバル人材の育成、スーパーサイエンスハイスクール (SSH) としての最先端の理数教育など、特色ある教育活動に取り組む。

設立 1982 (昭和 57) 年 形態 全日制/普通科・理数科・英語科/共学 生徒数 1 学年約 360 人 2020 年度入試合格実績 (現役のみ) 国公立大は、北海道大、広島大、九州大、熊本大、鹿児島大などに 124 人が合格。私立大は、同志社大、立命館大、西南学院大などに延べ 457 人が合格。

URL <https://sh.higo.ed.jp/kitash/>

私が実践してきた「これまで」の授業

対話から自分にはない気づきを得てこそ、理解は深まる

生徒が生物のすごさを感じるとともに、人間的に成長する学びを目指して、授業改善を図ってきました。

現在は、育成を目指す資質・能力をルーブリックの形で、年度初めに生徒に提示しています。各学期の初めには前学期の学びを振り返り、本学期の目標を立てさせています。生徒と面談し、「なぜ、目標に到達できたと思うのか」「どんな場面で力を発揮できたのか」「どこができていないのか」など、私との対話の中で生徒が自分の状況を認識し、目標に向けて行動できるよう支援しています。

日々の授業は、①目標確認、②前時の復習 (ペア活動)、③解説 (K P 法「\*」、写真1)、④内容理解 (グループ活動)、⑤本時の振り返りという構成にしています。軽重はありますが、「主体的」「対話的」「深い」学びが連動するように年間計画を立て、授業をデザインしています。

例えば、2年生の「生物」では、教



写真1 協働学習の時間を十分確保するため、教師の解説は、キーワードを書いたシートを貼りながら説明するKP法を利用し、効率的に進める。

教科書の単元の順序を変えて、「進化」の単元を最初に取り上げました。すべての生物は、膨大な時間をかけた進化によって現在の形になり、今後とも変化し続けます。人間もその営みの結果の1つだという感動が、生物の学習への興味を喚起すると思いますし、進化の視点からその後学習する生命現象を捉えられるようになることが、知識の体系化に有効だからです。

また、生徒の状況に応じて問いを変えています。私の授業を受け始めてから1〜2か月は、教科書の内容の理解を促すような問いが大部分ですが、生徒同士で意見や疑問を率直に出し合えるようになってきたら、意見が分かれたり、視点の違いが出

たりするような問いを増やします。

直近の2年生で行った「代謝とエネルギー」の授業では、ATPが「エネルギーの通貨」に例えられることを示し、ATPと通貨の類似点と相違点を考えるグループ活動を行いました。類似点は一般的な性質が分かれば挙げられますが、相違点は情報を体系的に整理できていないと出せません。頭を悩ませている時に他者の視点があれば、自分にはない気づきを得て、深い学びにつながることを期待できます。実際、ある生徒から「お釣りが出ない」という相違点が挙がると、多くの生徒がはっとした表情を見せました。それは、私にもなかった発想でした。

グループ活動では、生徒の声を丁寧に聞き（写真2）、よい気づきを促す疑問や教科書の内容を超えた質問などは、その場で全体に共有するようにしています。他者との対話は自身の学びを深めるものと、対話の意義が理解できれば、生徒同士の学び合いは促進され、やがて自分たちだけで学ぶようになる状態を、これまで何度も見てきました。そうした自律的な学びに導くことも、私の目標の1つです。

### コロナ禍における気づき

## 生徒からの質問に答える動画で、他者の視点を共有

臨時休業中は、50分間の授業動画を配信しました。通常授業にできるだけ近づけたいと考え、普段はペーパー活動やグループ活動を行う場面で



写真2 内容理解のグループ活動において、「多くのグループが同じような疑問を抱いているので、補足説明をします」と溝上先生が言うと、生徒はぱっと顔を上げ、一斉に先生に注目した。「生徒の状況を見極め、支援することこそ、協働学習における教師の役割」と、溝上先生は語る。

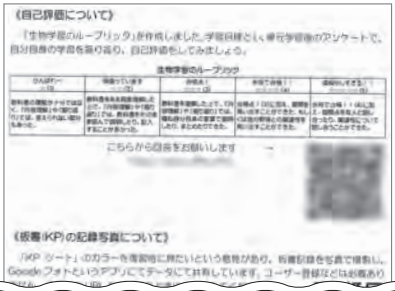
は、私が発問した後、生徒が考えて説明する時間として数分間置いてから、「このポイントが含まれていたら合格です」と、解答の基準を示し、自己評価できるようにしました。加えて、生徒が本時に学習した重要語句を3つ選び、それらを用いて本時の学習内容の要点を記述する「本時の重要語句と振り返り」を授業プリ

\* 紙芝居プレゼンテーション法。公益社団法人日本環境教育フォーラムの川嶋直氏が開発した思考整理とプレゼンテーションの手法。

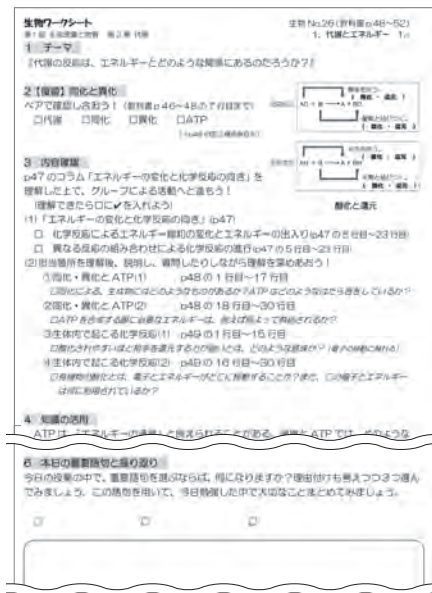
図 2年生「生物」の授業プリント



単元ごとに配布する授業プリントの表紙には、学習内容への期待や見通しを持てるようなコラムを掲載。



表紙裏には、生物の学習におけるルーブリックを掲載。単元終了後に自己評価を先生に提出する。生徒が復習しやすいよう、毎授業の板書を写真に撮り、写真共有アプリにアップしている。  
\*学校資料を抜粋して掲載。



学びの成果を可視化できるよう、本時のテーマの確認から振り返りまでを、授業ごとにA4判1枚にまとめている。授業の最後に行く「本時の重要語句と振り返り」では、重要語句を3つ選ばせて、本時の学習内容をまとめ、最初にまとめを書いて、その中の重要語句に線を引く生徒、重要語句を書き出し、それを組み合わせてまとめを書く生徒など、様々だ。

ント内に設けました(図)。配信動画であっても、学習内容をそれぞれ関連づけながら整理し、自分の言葉で説明できるようになる深い学びに少しでも導くための試みでした。動画は授業を担当する2・3年生に配信し、生徒に質問や要望を聞きました。すると、3年生からは、「クラスメートや先生と質問し合える場

がほしい」といった要望が上がりました。3年生は私が1・2年次も担当しており、他者との対話によって自身の学びが深まると実感していたからでしょう。すぐに、オンライン会議ツールを利用した質疑応答を実施しました。一方、私が初めて受け持つ2年生からは、「具体的な解答例がほしい」

といった声が上がりました。解答の基準と照らし合わせた自己評価では不安だったからだと思えます。答えを知りたいと言う2年生と、自分で考えようとする3年生との違いから、改めて他者との対話の重要性を実感しました。そこで、2年生には、解答の基準の後に解答例を示すとともに、授業動画とは別に、他の生徒がどんな質問をしたのかを知ることができるよう、生徒からの様々な質問に私が答える動画を作成しました。学校再開後の授業ですぐに協働学習を行えるよう、人によって視点や考えは異なることに少しでも気づいてほしかったからです。授業プリントも工夫しました。それまでは、その日の授業のプリントのみを配布していましたが、臨時休業中は登校日に単元分のプリントをまとめて配布することになったため、表紙をつけ、そこに単元の学習の目的が分かり、学習に見通しを持てるようなコラムを作成し、掲載しました。生徒の興味・関心を喚起する導入を強化したいと以前から考えていたところに、臨時休業がきっかけとなって、アイデアを形にすることができました。

私の「これから」の授業、越えるべき壁

生徒の思考が深まる問いを目指し、自身の専門性を高める

授業プリントの工夫は学校再開後も継続し、以前より予習・復習や自己評価がしやすい形になりました(図)。今後の課題は、自身の生物の専門性をさらに高めていくことです。1つの重要語句を多くの切り口で説明できるようにしたり、その語句と社会課題との関連性がかめるようにしたりすることで、生徒の対話がより活性化し、思考がさらに深まるようにしたいと考えています。本校には、新学習指導要領の「深い学び」で示された「思いや考えを基に創造したりすること」に向かえる場があります。それは、探究学習です。今年度の2年生にも探究学習に意欲的な生徒が多く、人間の肌や消毒の有効性などをテーマに掲げ、早々と計画を立て、研究を進めようとしている生徒もいます。生徒が自身の興味・関心を思う存分追究していけるよう、SSH研究部長として、教科学習と探究学習の連携を一層図ることも目指していきます。

## 私が考える「主体的・対話的で深い学び」

## 私が育成を目指す資質・能力

自分の考えや思いを一生懸命相手に伝え、相手の言葉にも真摯に耳を傾けることができる力。そうした力の土台として、伝え合い、聞き合うことで、自分や相手の困り事を解決しようとする、対話の必要性を察知する感性が不可欠だと考えている。



## 資質・能力を育む主体的な学び

「話さなければいけない」ではなく、思わず前のめりに話したくなるような学び。そのためには、「みんなはどう考えているのだろうか」「本当はどうなのだろうか」と他者の考えを聞き、自分の考えを言いたくなる題材やペアワークの仕組みで、生徒の感情を動かすことが授業において必要。

## 資質・能力を育む対話的な学び

英語表現において、そして英語を通して学んでいる題材について、自分と異なる意見を前にした時に、「なぜ、自分とは違うのか」と、他者とともに考えられるような学び。そのためには、生徒が安心感を持って授業に臨めることが大切。

## 資質・能力を育む深い学び

「どうして?」「なるほど!」といった声上がる学び。そのためには、生徒が自分なりの疑問や仮説を持つことが必要である。疑問や仮説を持つためには、教師が話し過ぎないようにすると同時に、発問の質を高める必要がある。教師の遊び心も重要。



## もり・かずま

教職歴9年。同校に赴任して3年目。アクティブ・ラーニングの実践は8年目。本誌2018年2月号「実践 アクティブ・ラーニング」に登場。

**大阪府立今宮高校** 旧制大阪府立今宮中学として設立。進学校型の総合学科として1996年に普通科から改編。総合学科の特色を生かして幅広い知識を得ながら自主自立の精神を育む教育を実践し、社会をリードする多くの人材を育成してきた。

設立 1906(明治39)年 形態 全日制/総合学科/共学 生徒数 1学年約240人

2020年度入試合格実績(現役のみ) 国公立大は、大阪教育大、神戸大、大阪市立大などに36人が合格。私立大は、同志社大、立命館大、関西大、近畿大、関西学院大などに延べ136人が合格。

URL <http://www.osaka-c.ed.jp/imamiya/>

主体的・対話的で深い学び

実践事例

5

「知りたい」「伝えたい」「思いを、  
題材、人間関係、授業の仕組みで刺激する

大阪府立今宮高校 森 一真

かずま

私が実践してきた「これまで」の授業

英語を使う必要性を  
授業の中で醸成する

授業がより実践的な英語力を身につける場となるように、「英語を使いたい」という気持ちを生徒に抱かせることに力を注いだ授業改善に取り組んできました。「この話をしたい、聞きたい」「この人の考えを知りたい、この人に考えを伝えたい」「みんなで話し合ってこの問題を解決したい」といった気持ちが生まれた時、生徒は言語活動として英語の授業に没頭していきます。そうした気持ちが生徒の中に生まれるように、授業が生徒にとっても自分にとっても学びたいと思える内容になっているか、常に意識してきました。

例えば、2年生の授業では、阪神・淡路大震災での被災経験がきっかけとなって、泥水を飲み水に変える水質浄化剤の開発に成功した日本の中小企業経営者を取り上げた英文が教材となります。浄化剤の開発には納豆菌を利用するなど、紹介されている内容は十分興味深いものですが、生徒の興味・関心をさらに高めるに



写真1 「コミュニケーション英語Ⅱ」の授業。スライドを用い、前時までの語いや内容の確認、音読とリスニング、空所補充を用いた内容の読解を、ペア活動を主体に進めていく。

は、私からの適度な情報提供と生徒への問いが欠かせません。震災もたらした被害について伝え、「震災は、今の私たちの生活をどのように変えたと思いますか」と、意見が分かればよい問いを投げかけます。すると、生徒に「みんなはどう思っているのだろう」「自分の考えを聞いてほしい」と疑問や仮説が生まれ、他者と話したいと心から願うようになるのです。話し合いの途中には、私が「みんなはこう思っているだろうけど、実は……」と、生徒の疑問や仮説を超える事実や視点を与え、生徒の思考を活性化させていきます。私の授業ではペア活動に多くの時間を割くため、英語を「言葉」とし

て気軽に使いながら、脳を活性化させる場づくりの工夫を重ねてきました。例えば、私からの問いにペアで意見を述べ合う際、意見を述べる順番が決まった後に私が問いを与えるよりも、順番が決まる前に私が問いを与えた方が、ペアの生徒はどちらも当事者意識を持って頭を働かせます。プリントを使って、文法事項の中で分からないところをペアで説明し合う場合にも、いきなり「分からないことを話し合ってください」と促すことはしません。分からないところを打ち明けやすくするよう、まず個人で理解があいまいなところに下線を引かせてから、それをペアで交換し、自分が線を引いた部分について話し合えます。そうした工夫や配慮を徹底した授業を重ねていく中で、つたない英語であっても自分の話したい内容を話し合える雰囲気を作成してきました。

### コロナ禍における気づき

## 家庭学習課題は成長を自覚させるものにした

新型コロナウイルスの感染拡大を

受けた臨時休業中は、授業動画の配信による一方向型のオンライン授業と、課題配信によって授業を進める期間がありました。ただし、プリントの問題を順番に解いていく課題は、生徒にとっては意欲的に取り組みにくいのですし、そうした課題が生徒の英語力をねらい通りに高めているのか、英語という教科特性に見合っ



写真2 森先生の授業には、生徒による様々な活動が盛り込まれるが、先生が心がけるのは、生徒の学びのリズムを乱さないよう、指示を短くすること。もちろん、「聞く」活動も大切だが、聞かせたいのは手順の説明ではなく、テーマに対する他者の考えだ。

たものなのか、私は常々疑問を感じていました。そこで私は休業中、次の2つの課題を生徒に与えました。1つは、私が英語で話している動画を生徒が動画投稿サイトで視聴し、その内容の要旨やそれに対する自分の意見を英語で述べるといった思考型課題です。もう1つは、スライドを使ったトレーニング型の課題です。

日本語が書かれている複数のスライドを動画の中で次々に投影し、生徒はそれを英語に直して発音していきます。そして、最後に、発音してきた単語を使えば説明できる絵を投影し、その説明の英文を作るという課題です。

これまで私は、生徒に予習などの家庭学習に取り組ませることはありませんでした。臨時休業は、身につけた英語を使って実際に表現する達成感を、生徒に味わってもらう家庭学習のあり方を考えるきっかけになりました。そして、英語という教科では、ICTを活用することで、そうした家庭学習の実現の可能性が高まってくるように思います。

私の「これから」の授業、越えるべき壁

### ICTの活用によっても 教育活動の質向上を図りたい

私がこれからも大切にしたいと考えているのは、授業で英語を使いながら生徒が、「この人のことを知りたい」とクラスメートに知的好奇心を抱いたり、「この人のように英語を使えるようになりたい」と目標とする憧れの存在を見つけたりして、

英語に対するモチベーションを高めることです。そして、「このようなステップでトレーニングを積み重ねば英語が上達するよ」などと、生徒一人ひとりに見通しを持たせ、主体的な学習をサポートしたいのです。そのため、生徒が自分の英語力を自覚し、今後の見通しを教師である私と共有する場として、パフォーマンステスト



写真3 新たに学んだ語いや文法事項は、プリントを見て覚えたからといってすぐに使えるものではない。覚えたことを書いたり、話したり、聞いたり、ペアやグループの活動の中で実際に繰り返し使いつつ、真の英語力として定着させていくことが求められる。

トのさらなる充実が不可欠です。しかし、現状のパフォーマンステストには課題もあります。私は、スピーキングなどのパフォーマンステストを実施する際、授業2コマ分を使っていきます。生徒たちはプリントの課題などに取り組みながらパフォーマンステストの順番を待つのですが、2コマで40人の評価をする

ためには、生徒がパフォーマンスに没頭していても、短い時間で切り上げているのが実情です。

パフォーマンステストを充実させるために、私が期待しているのが、ICTの活用です。生徒が自らのパフォーマンスを撮影し、それを提出させることができれば、パフォーマンステストに必要なスキルの下支えとなります。生徒にとっても、自分の成長を可視化することができ、今後の学習の見通しを立てやすくなりますし、生徒同士でお互いのパフォーマンスを見合えるようにすれば、身近に憧れの存在ができることにもつながるはずです。ICTの活用は、教育活動の質向上に大きく寄与するものだと思います。

英語を使いたいという思いは、新たな価値観に出合いたいという欲求であり、その欲求を満たす機会が留学であり、そして言語活動です。英語や国語はもちろん、高校のすべての授業で、新たな価値観との出会いを生徒に体感させることができたら、生徒の学びはもっと豊かになります。業務の削減をしながら、教科や学年を超えた指導ノウハウの共有も私たちの課題です。

解説 「主体的・対話的で深い学び」 5人の教師の実践を交えて

# 「深い学び」の構造を理解して、 知識を「駆動」させる学びを実現

國學院大學 人間開発学部 初等教育学科 教授 田村 学

P.9～23では、5人の教師それぞれが考える「主体的・対話的で深い学び」と、その実現を目指す具体的な実践を見てきた。本記事では、文部科学省で新学習指導要領の作成に携わった國學院大學の田村学教授が、5人の実践にも触れながら、改めて「主体的・対話的で深い学び」とは、どのような学びなのか、それをいかにして授業で実現していくのかについて、整理・解説する。



たむら・まなぶ 新潟大学教育学部卒業。専門はカリキュラム論など。新潟県公立学校教諭、同県柏崎市教育委員会指導主事、文部科学省初等中等教育局教育課程課教科調査官、同省同局視学官などを歴任。同省で新学習指導要領の作成に携わる。2017年度から現職。著書に『深い学び』（東洋館出版社）などがある。

## 背景

### 資質・能力を確かに育む 3つの学びのある授業を

新学習指導要領では、社会の変化や生徒の実態を踏まえて、育成を目指す資質・能力の3つの柱が示されました。それらの資質・能力を一人ひとりの生徒に確かに育むための学びが、「主体的・対話的で深い学び」です(図1)。それが実現しているかどうかは、授業そのものを評価するのではなく、設定した資質・能

力が生徒に育成されているかどうかを、注意深く見なければなりません。「活動あつて学びなし」と言われるような、形式的な学びにならないようにするためにも、常に心に留めておきたい点です。

「主体的・対話的で深い学び」は、「授業改善」と「カリキュラム・マネジメント」が両輪となって実現されるものですが、ここでは、主に授業改善の面から、「主体的・対話的で深い学び」が、どのような学びで、それをいかにして授業で実現していくのかについて、P.9～23の実践事例にも触れながらお話ししていきます。

## 主体的な学び

### 生徒が自覚と目的を持ち、 自分の学びをコントロールする

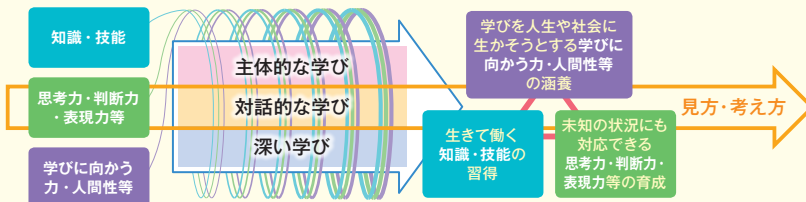
まずは、「主体的な学び」について考えていきましょう。「主体的な学び」を分かりやすく表現すると、「自分で自分の学びをコントロールできること」と言えます。意欲が前面に出ている様子を「主体的な学び」が実現されている状態としてイメージするかもしれません

「主体的・対話的で深い学び」を問う

図1 教科等固有の学びの有り様(教科の本質)

見方: どのように対象を捉えるか(教科等固有の対象を捉える視点)

考え方: どのように対象とかわかり、対象に迫るか(教科等固有のアプローチの仕方、プロセス)



\*田村学『深い学び』(東洋館出版社、2018年) P.33 掲載の資料を基に編集部で作成。

が、それは「主体的な学び」の1つの側面に過ぎません。学習内容について興味・関心を持つことは大切ですが、「主体的な学び」では、「このことについてもっと知りたい」「こんなことを学びたい」「難しそうだけれど乗り越えたい」といった自らの意志の下、一人ひとりが学習内容を自分の課題として捉え、自分の力で

それに取り組む姿が求められます。

「主体的な学び」の実現には、現実味のある質の高い課題の設定が欠かせません。「実践事例4」熊本県

立熊本北高校の溝上広樹先生(P.

18〜20)は、生徒間で意見が分か

たり、視点の違いが出たりする課題を設定していました。生徒は、自

分の知識や考えとの違いに接し、「あれ?」「おや?」といった疑問を持

つと、それを「解決したい」という思いを強めて、課題に真剣に向き合

い、主体的に学びを進めます。そのように、一人ひとりの学習者の考

えなどの違いから疑問を生み出す仕かけは、課題を「自分事」として捉えさせるために有効です。

課題設定では、学習の2つの見通しを持たせることも大切です。1つ

は、「これを達成しよう」といったゴールについての見通し、もう1つ

は、「この方法で進めると解決できる」といった過程についての見通し

です。それら2つの見通しを持てる

と、生徒は「自分の力で解決できそうだ」と感じ、一層主体的な学びに取り組みやすくなります。

授業では、生徒に学習内容への興味・関心を持たせようと、導入に時

間をかける工夫も見られますが、「主体的・対話的で深い学び」の実現のためには、協働学習や振り返りにも重点を置くので、導入をコンパクトにすることも大切です。どれだけ教科・科目の本質に迫れる問い(課題)を設定できるかが重要です。

対話的な学び

多様な他者との学び合いで知識や情報を再構成する

「対話的な学び」は、多様な他者との学び合いを通して、学習の質を高めるとともに、問題を解決したり、新たなアイデアを創造したりする学びです。「自分」「他者」「外部リソース」の三方からの情報を比べたり、関連づけたりすることで、知識や情報を再構成していくのです。

【実践事例3】大阪府・私立近畿大学附属高校・中学校の芝池宗克先生(P.15〜17)が行う「級友との錬磨」は、「対話的な学び」の好例です。生徒が作った問題をほかの生徒が解き、その後の対話を通して他者の視点を取り入れて、互いの思考を深めていました。対話の質を高めるため

には、生徒が真剣に問い続ける姿勢が不可欠です。「級友との錬磨」は、対話を通じて「なぜ、間違えたのか」「もっとよい考え方はないのか」といった自問自答を生み出し、知識を再構成させる素晴らしい実践です。

生徒に話し合いを委ねるだけでは、「対話的な学び」は深まりません。生徒間の相互作用は、教師が生徒が持っている知識や情報を把握し、それらをどう処理させて、どういった成果に結びつけるのかを戦略的に考えなければ生まれません。

【実践事例1】宮崎県立高鍋高校の三浦章子先生(P.9〜11)は、思考ツールを用いて学び合いの効果を高めていました。知識や情報の整理や分析、関連づけなどを補助する思考ツールを適切に活用できると、対話の過程やその成果が可視化されま

す。それによって理解が深まり、話し合いが方向づけられて、生徒が見出しやすくなります。高校の授業でもグループ活動が浸透した今、次に実践が期待されるのは、クラス全体でのディスカッションです。日本人が苦手とする大勢の前で堂々と意見を述べる力は、今後ますます必要になります。意見が拡



の森一真先生（P. 21～23）は、授業中のペア活動やグループ活動に加え、生徒が家庭学習でも身につけた英語を使って実際に表現する活動を取り入れていました。様々な場面や状況を想定し、知識をどう活用するによりよいコミュニケーションができるのかを、生徒が自覚的に試行錯誤する中で、**② 手続き的な知識**がつながるタイプのように、知識は身体化・自動化されると考えられます。

「深い学び」は、様々な知識を活用し、それらに関連づけることなどで実現します。つまり、学習内容を自分の課題として捉える「主体的な学び」と、知識を整理して再構成する「対話的な学び」は、「深い学び」に関連しています。3つの学びはそれぞれに意味や価値がありますが、「知識が『駆動』する状態に向かう」という「深い学び」の実現を意識したものに、ほかの2つの学びがなっているかといった視点が重要なのです。

「主体的・対話的で深い学び」では、授業ごとや単元末に振り返りを行う

ことも大切です。「実践事例4」の溝上先生（P. 18～20）は、学習内容を文章にして書く振り返りを毎授業行っていました。文章を書いて振り返ると、より深く考える機会となるだけでなく、それぞれの気づきが生徒間で共有しやすくなります。他者の視点を取り入れることで、振り返りの効果がさらに高まるでしょう。

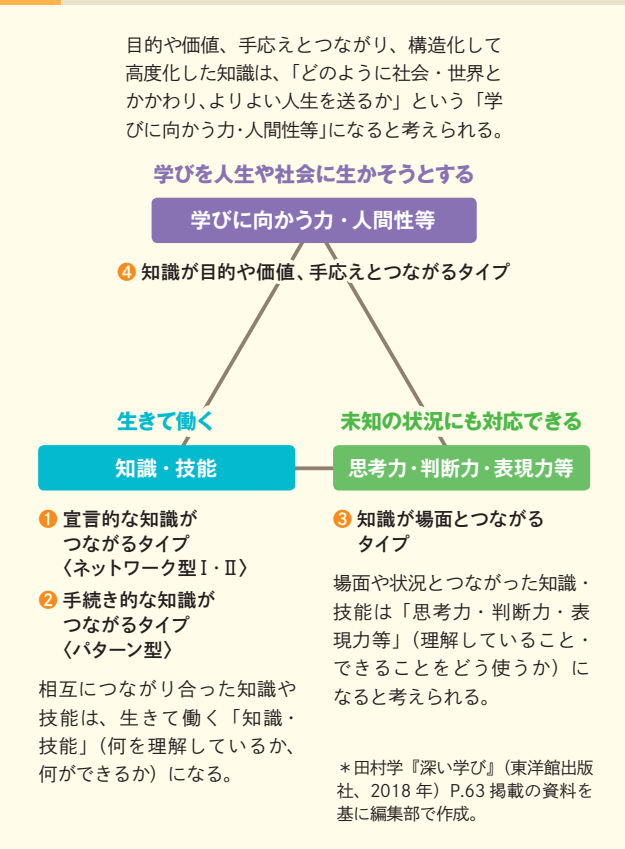
振り返りには、**① 学習内容を確認する**、**② 直近の学習内容を過去の学習内容と関係づけたり、一般化した**りする、**③ 学習内容を自分と結びつけ、自己変容を自覚する**といった機能があります。**①**と**②**は、知識・技能や思考力・判断力・表現力等の育成に重要です。さらに**③**によって、充実感や達成感、自己有能感といったポジティブな感情としての手応えを生徒が感じることで、学びは一層深まります。

今後の実践に向けて

これまでの実践を土台に  
学習者本位の授業改善を

知識を構造化させ、駆動する状態へと向かう学びの過程は、複雑に見

図3 資質・能力の3つの柱と「知識の構造化」の関係



えるかもしれません。しかし、各教科・科目の専門知識が豊富な高校の先生方は、学びの構造さえ押さえれば、スムーズに実践できるでしょう。いわゆる「チョーク&トーク」で授業づくりをしてきた先生方であれば、教科・科目の専門知識が整理された状態で自身の中に蓄積されており、それは授業改善の土台となります。

今後は新学習指導要領に基づき、すべての生徒に資質・能力を育成する授業づくりが求められます。人間の認知特性は様々で、例えば、音声言語による説明よりも、視覚的な説

明や活動を取り入れた方が、学びが深まりやすい生徒もいます。そうした多様な生徒の視点に立ち、学習者本位の授業改善に取り組んでいただきたいと思えます。

「深い学び」によって構造化された知識は、はがれ落ちにくく、しっかりと定着します。まずは「主体的・対話的で深い学び」の考え方に改めて触れ、少しずつ実践してみてください。生徒の学ぶ姿勢や表情の変化に手応えを感じて、一人ひとりの資質・能力を育む学びを一層追究したいと感じるに違いありません。

## 第1回レポート

# 自校の教師同士の対話を通じて、 教育の「これから」を考える

新学習指導要領の実施まで2年を切った今、自校の教育の「これから」について、教師同士がそれぞれの考えや思いを率直に語り合う場が求められている。そこで、VIEW21編集部は、自校の教師同士で自校の教育の「これから」について考え、語り合うオンライン・ワークショップを企画。その第1回目を9月18日に実施した。

## 第1回オンライン・ワークショップ の概要

**日時** 2020年9月18日(金)  
15時00分～17時00分  
**形式** オンライン(ライブ配信)

### 主な内容

- VIEW21編集部と講師の長野県蘇南高校・小川幸司校長による本誌8月号の特集記事についての解説
- 本誌8月号の特集の末尾に掲載のワークシート(P.32～33)を活用し、校内での対話「自校で育成を目指す資質・能力」「臨時休業を始めとする想定外の事態の中で の気づき」「教育活動の見直し」の3点について、それぞれ自校の教師同士で語り合い、その内容をオンライン上のシートに書き込むことで、参加校がお互いの状況や課題を共有。さらに、講師の小川校長が助言を行った。

## 本誌8月号の特集に登場した 実践者の講話を基に対話

本誌は、今号より、コロナ禍における教師や生徒の気づきや学びを踏まえて新学習指導要領を捉え直し、教育の「これから」を考えるシリーズ特集を開始した。その起点となった前号の8月号では、育成を目指す「資質・能力」とは何か、それはどういった場面で発揮されたり、育まれたりするかを、高校生や社会人、そして現場の教師たちの気づきや学びを通して改めて捉え直した。予測困難な社会を「生きる力」を育む教育を、どのようにして実現するのかを考える特集であったが、そうした「まだ誰も明確な『答え』を持っていない課題」に学校現場が取り組む際には、すべての教師が立場や職歴を超えてそれぞれの考えや思いを共有する「対話」が必要となる。そこで、自校に対話の文化を醸成するきっかけにしようべく、本誌の特集を踏まえて、自校の教師が教育の「これから」について語り合うオンライン・ワークショップを企画した。

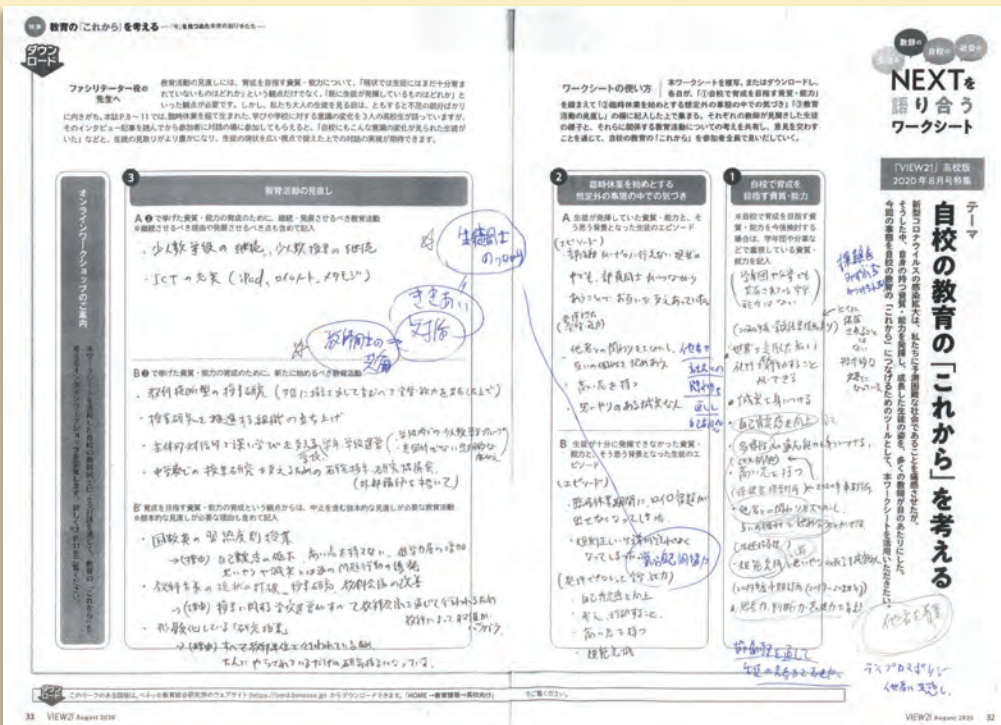
その第1回目が、9月18日に実施された。まず、本誌編集部が8月号



写真1 教師同士の対話を重視して、コロナ禍による想定外の事態に向き合った経験を語る小川校長。定期的な職員会議以外にも、教師を小ブロックに分けて毎日語り合う場を設けるなど、「動的な対話の集団」づくりに挑んだ。

の特集の概要を説明。次に、講師・ファシリテーターを務めた長野県蘇南高校の小川幸司校長が、コロナ禍での気づきを踏まえ、これからの社会で求められる「資質・能力」の視点から、自校の教育活動の再構築を行った取り組み(8月号・特集P.26～29に掲載)を紹介した(写真1)。その後、臨時休業下での生徒の成長についてお互いの気づきを共有し、資質・能力のさらなる育成のための教育活動のあり方について語り合う、自校の教師同士による対話が行

参加した教師のワークシート



本ワークショップに参加した教師のワークシート。「教科や分掌に一任していた事柄の中には、学校や学年団としてもっと対話を重ね、改善を図るべきことがあると、自校の教師と共有できたのが最大の収穫」と感想を語った。

われた。2020年度の本誌の特集の末尾には、その号のテーマについて自校の教師同士で語り合い、実践につなげるためのワークシートが掲

載されているが、今回のオンラインワークシヨップでは、そのワークシートを使った対話が展開された。対話の具体的な流れは次の通り

だ。まず、参加者各自が事前にワークシートに記入した、①「自校で育成を目指す資質・能力（自校で育成を目指す資質・能力を今後検討している場合は、学年団や分掌などで重視している資質・能力）」と、②「臨時休業を始めとする想定外の事態の中で、生徒が発揮していた資質・能力と、生徒が十分に発揮できなかった資質・能力」、それぞれ思う背景となった生徒のエピソードについて、自校の教師同士で共有した上で、特に印象に残ったエピソードをオンライン上のシートに書き込み、それを参加校間で共有した。小川校長は、各校に見られる共通点や特徴に言及し、課題については助言を行った。

そして、③「資質・能力のさらなる育成のために、継続・発展させるべき教育活動、新たに始めるべき教育活動、中止を含む抜本的な見直しが必要な教育活動」について、①・②と同様の流れで対話を行った。そうして、各教師が見聞きした生徒の様子と、それらに関係する教育活動についての考えを共有し、意見を交わすことを通じて、自校の教育の「これから」を見いだしていった。

対話を通じて、自校の「これから」が見えてきた

オンライン・ワークショップの参加校の中から、2校の様子を紹介する。

石川県・私立星稜中学校・高校は、主体的に学ぶ力や思考力、判断力などを生徒が身につけていけるように、様々な教育プログラムを設計している。そうした中で、校内の教育



写真2 星稜中学校・高校からは、3人の教師が参加。同校は、中高一貫校としてのランドデザインの策定に向けて動き始めている。

写真3 若狭高校からは4人の教師が参加。同校は、「責任を持って、主体的に社会を変えていこうとする意志」を生徒に育むため、教科の授業や探究学習の改善などに取り組んでいる。



活動を統合する大きな目標の設定の必要性を感じ、教師間の目線合わせの方法を学ぶ機会として、今回のオンライン・ワークショップに参加した(P.29写真2)。同校の生徒の多くが、臨時休業中でもICTを活用して教師に積極的に質問や相談をできたことから、向上心を持って学びに向かう力が身につけていることを、教師たちは実感したという。そ

### VIEW21 編集部 ファシリテーターより

#### 自校の教師同士での対話を楽しめるよう配慮

VIEW21編集部では、2019年3月に開催した「カリキュラム・マネジメント」に関するワークショップ(\*)などを通じて、ファシリテーションの経験とノウハウを積み重ねてきました。オンライン・ワークショップの実施は初めてでしたが、当日は、「自分(自校)の問題意識や考えは自分(自校)だけが持っていたわけではなかった」「自分(自校)にはない問題意識や考えだ」といった気づきを参加者に持っていただけのような心がけ、そして何より、「対話を楽しんでもらいたい」という思いで、丁寧に会を進行しました。画面を通じてうかがい知ることができた、熱を帯びた対話の様子や、事後アンケートの声からも、参加者が対話を楽しまれた様子が伝わってきました。積極的に参加をいただいたことに、改めて感謝申し上げます。

うした生徒の成長を、今回の対話を通して確認したことで、カリキュラム・デザインに生徒も参画させ、到達目標を生徒自身が設定して、教師とともにアクセスメントを行う仕組みづくりを模索していきたいと、今後の教育活動のあり方を大胆に展望した。同校の教師の1人は、「今回の対話によって、個人で考えていたことに一本筋が通り、方針ができたように感じた」と、手応えを語った。

福井県立若狭高校は、全国の高校教師がコロナ禍でどのような課題に直面し、コロナ禍を教育的転機としてどのように生かしているのかを知ること、自校の現状を俯瞰的に捉え直したいと思い、参加(写真3)。

同校の教師たちは、蘇南高校の小川校長の、従来の学校観にとらわれな

#### 参加者の声(事後アンケートより)

同じ高校の生徒に対して、それぞれの教科でどのような授業を行っているのか、その一端を共有できました。今回の対話で、生徒観を深めたり、具体的な授業改善につながったりするきっかけになりそうです。こうした対話の機会を校内でさらに設けることで、例えば、生徒が苦手としている数学の内容を、理科の授業で扱う際に留意して指導するなど、教科間連携が進むと思います。

今回のオンライン・ワークショップに参加した教師から、「本校はこうした対話の場が少ない。もっと必要だ」という意見が出ました。これを機会に、対話の場をぜひ設けていこうと思いました。

同僚と対話する中で、校内における情報や目標の共有がまだ十分ではないということが明らかになりました。そして、自分が常々感じている課題意識は決して個人的なものではなく、学校共通の課題であるということも、改めて確認することができました。

教師によって表現は異なっていますが、「原点となる考え」が共通していることが見えてきました。迷った時には、今回のワークショップで見た原点に戻ればよいのだと思いました。

い取り組みを聞く中で、福井県立中学校・高校計28校の全生徒に貸与されるタブレット端末の活用に注目。「ICT環境が整備され、教育手段が増えた時、生徒が主体的に学ぶ機会をどのように設計していくか」「I

CTを十分に活用しながらも、学校という場でしかできない教育活動を模索する重要性」を語り合った。同校の教師の1人は、「社会が激変する中で、臨機応変に対応できる力が今まで以上に私たちに求められる」と、教師としての課題を語った。

本誌では、今後も授業のあり方や学習評価、特別活動をテーマとした教育の「これから」を考える特集と、自校の教師同士の対話を通じて、各特集のテーマに対する考えを深めるオンライン・ワークショップを展開していく。各校の「これから」の学校づくりに役立てていただきたい。

\* カリキュラム・マネジメントに関するワークショップの詳細は、本誌2019年6月号の特集(P.2~23)に掲載しています。

イベントのご案内

## VIEW21 PRESENTS

## 第2回オンライン・ワークショップ

# 自校の教師同士の対話を通じて、 「主体的・対話的で深い学び」 を考える

2020年  
11月25日(水)  
オンラインで  
開催!

新学習指導要領の実施まで2年を切った中で学校現場が直面した臨時休業を始めとする想定外の事態は、予測困難な社会を生きるために必要な資質・能力とはどのようなものか、そして、その資質・能力を育むための「主体的・対話的で深い学び」を実現する授業とはどのような授業なのかを、改めて先生方に問うものでした。今こそ、「主体的・対話的で深い学び」について問い直し、具体的な授業改善へとつなげていく好機と捉え、VIEW21編集部では、自校の教師同士で「主体的・対話的で深い学び」について考え、語り合うオンライン・ワークショップを企画。新学習指導要領の作成に携わった、國學院大学の田村学教授(本号P.24~27)の協力を得て開催します。資質・能力を育む授業の「これから」を自校の教師同士で考える機会として、多くの先生方の参加をお待ちしています。

本号 P.32~33 のワークシートを用いながら、  
自校の教師同士の対話を通じて、自校の教育の「これから」を考えます

## 講師・ファシリテーター

國學院大学  
人間開発学部  
初等教育学科 教授  
**田村 学**



◎専門はカリキュラム論など。新潟県公立学校教諭、同県柏崎市教育委員会指導主事、文部科学省初等中等教育局教育課程課教科調査官、同省同局視学官などを歴任。同省で新学習指導要領の作成に携わる。2017年度から現職。著書に『深い学び』(東洋館出版社)など。

## ワークショップの主な内容

## ① 10月号の特集について解説

10月号の特集について、田村教授と編集部が解説

## ② 自校の教師同士で対話

田村教授と編集部のファシリテーションの下、本号 P.32~33 掲載のワークシートを用いた、自校の教師同士による対話を通じて、「主体的・対話的で深い学び」と、その実現に向けた授業改善について考える

## ③ 質疑応答、議論内容共有

記事についての質疑応答と、各校の対話の内容の共有を行う

日時	2020年11月25日(水) 15時30分 ~ 17時30分 * 15時10分からベネッセ教育情報センターによる新学習指導要領に関する情報提供を予定しています。	
形式	オンライン(ライブ配信) 申し込みいただいた方に、詳しい参加方法をご案内します	
参加申し込み方法・締め切り	QRコード、またはURLから登録してください 参加申し込みは 2020年11月19日(木) まで	<a href="https://enquete.benesse.ne.jp/forms/o/we7767ef96/form.php">https://enquete.benesse.ne.jp/forms/o/we7767ef96/form.php</a>
参加費	無料	



本号 P.32~33 のワークシートにお取り組みの上、  
自校の先生方と一緒に(2人以上)ご参加ください

# NEXTを 語り合う ワークシート

『VIEW21』 高校版  
2020年10月号特集

テーマ

## 私が考える「主体的・対話的で深い学び」

「主体的・対話的で深い学び」は、これからの社会を生きる上で求められる資質・能力を生徒に育むために必要なものである。だが、その学びを実現する授業のあり方は、学校や生徒の状況、そして教師の教育観によって多様である。「主体的・対話的で深い学び」について校内で対話し、具体的な授業改善へとつなげていくために、本ワークシートを活用いただきたい。

### ワークシートの使い方

本ワークシートを複写、またはダウンロードし、各自が、下記①～③の上段部分を記入した上で集まる。各教師の記入内容を共有しながら、参考にしたいと思ったことや質問したいことを、①～③の下段にある囲みに、それぞれ記入する。自校の教師と意見を交わすことを通じて、目指すべき「主体的・対話的で深い学び」を、参加者個々が深めていく。

1

私が育成を目指す資質・能力

自校の教師の話聞いて、つけ加えたいと思った資質・能力や、自分が表現したものよりもフィットすると思った資質・能力を記入する。また、質問したいことなどがあれば記入。

2

①の資質・能力を育む、私が考える「主体的・対話的で深い学び」

※コロナ禍の中での授業実践を通じて新たに気づいたことがあれば、その点も踏まえて書く。  
「主体的な学び」とは



### ファシリテーター役の先生へ

「主体的・対話的で深い学び」を自分なりの言葉で表現できる先生は少ないかもしれません。そのため、ファシリテーター役の先生は、対話への参加を自校の先生に呼びかける際に、「ワークシートの中に答えられない項目があったのなら、それは授業改善のチャンスということです」といった言葉を添えることで、対話の場への参加に対する心理的なハードルを下げられるでしょう。また、参加者が対話を重ねても「主体的・対話的で深い学び」についての理解に深まりが見られない時は、対話の途中に今号の特集の「実践事例 (P.9～23)」「解説 (P.24～27)」を読む時間を設けることで、新たな視座を得ることができ、対話が活性化するかもしれません。

### オンライン・ワークショップのご案内

本ワークシートを活用した自校の教師同士による対話を通じて、「教育の「これから」」を考えるオンライン・ワークショップを開催します。詳しくはP.31をご覧ください。

### 3

#### ②を実現するために、これから(あるいは、引き続き)取り組みたい授業の具体的な改善内容

※コロナ禍の中での授業実践を通じて新たに気づいたことがあれば、その点も踏まえて書く。

自校の教師の話聞いて、自分も取り入れたいと思った改善内容や、質問したいことなどを記入。

### 「深い学び」とは

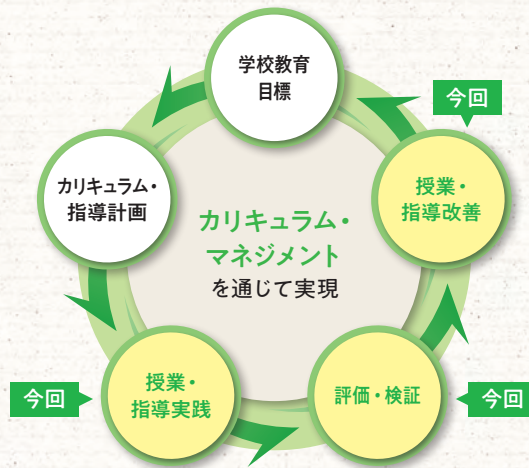
### 「対話的な学び」とは

自校の教師の話聞いて、つけ加えたいと思った要素や、自分が表現したものよりもフィットすると思った要素を記入する。また、質問したいことなどがあれば記入。



# 学校生活の場面ごとに行動目標を設け、 その達成状況をデータで示すことで 自己肯定感を高め、前向きな行動を促す

## 宮崎県立高鍋農業高校



◎校訓は「研学修技」「勤労興産」「礼節敬愛」「感恩報謝」。旧高鍋藩の舞鶴城跡にあり、藩校「明倫堂」の教えを引き継ぐ。実習農場は、大規模農家を想定した規模と設備を備える。2017年度、文部科学省「スーパー・プロフェッショナル・ハイスクール（SPH）」の指定を受け、専門性の高い人材育成に取り組む。



◎設立 1903(明治36)年

◎形態 全日制/園芸科学科・畜産科学科・食品科学科・フードビジネス科/共学

◎生徒数 1学年約110人

◎2020年度進路実績(現役のみ) 4年制大は、別府大、南九州大、宮崎産業経営大などに5人が合格。農業大学校進学23人。短大、専門学校進学35人。就職63人。

◎URL <http://www.takanabe-ah.ed.jp/>

生徒を褒めて前向きにし、  
学校の雰囲気をよくしたい

宮崎県立高鍋農業高校は、地域の農業を支える人材の育成を担ってきた伝統校だ。だが、農業就業人口の減少を背景に定員割れが生じ、生徒の学力の多層化などが起きていた。そのような課題を抱えていた同校は、2018年度、宮崎県教育委員会「高等学校における『通級による指導』」の拠点校となったことをきっかけに学校改革に踏み出した。

教育相談部の市原洋平先生は、通級による指導を、特別な指導を限定的な場で行う個別支援にとどめず、学校全体の指導改善に結びつけられると考え、宮崎大学教育学部の半田健講師に相談。半田講師からは、行動目標を提示した上で、その達成に向けた指導を行い、望ましい行動を見せた生徒を認めるといふ、学校全体で取り組むポジティブな行動支援「スクールワイドPBS (Positive Behavior Support)」を紹介された。

「当時の生徒には、学習や生活の面で課題が見られ、退学者も少なくありませんでした。多くの教師が問題意識を持ちつつも、指導の足並み

がそろっていなかったため、指導の目標を共有し、教師が生徒のよさを積極的に褒める取り組みを行うことで、学校全体に前向きな雰囲気を醸成したいと考えました」

「スクールワイドPBS」が通級による指導をしやすくすると考えたことも、導入の大きな理由だ。

「目標とする資質・能力の育成につながる望ましい行動を明確にし、まず、全体を対象とした支援体制を構築することで、個別の支援の方が有効な生徒が浮かび上がるといった流れを想定しました。『スクールワイドPBS』の延長線上に『通級による指導』を位置づければ、対象者が周囲から特別視されることもなく、支援を受けやすくなります。また、教室を始めとした日常生活の場で、個別の支援で学んだ内容が生かしやすいとなると考えました」(市原先生)

市原先生は、新たな取り組みを職員会議で提案。全教師の賛同が得られたため、導入準備を始めた。

資質・能力の育成の3つの  
観点から行動目標を設定

まずは、18年11月に全教師を対象



SPH 研究部  
横田 雅人  
よこた・まさひと  
教職歴11年。同校に赴任して  
3年目。農業・畜産科。



教育相談部  
市原 洋平  
いちばら・ようへい  
教職歴19年。同校に赴任して  
9年目。地理歴史・公民科。



校長  
奥平 博徳  
おくひら・ひろのり  
教職歴33年。同校に赴任して  
1年目。

に、生徒に身につけさせたい資質・能力を調査。教育相談部は、その結果を基に、育成を目指す資質・能力を、「じぶんを育てよう(自分の内面、行動など)」「なかまになろう(他者への尊敬、親しみなど)」「まなびに親しまおう(教養、情報活用、表現力など)」の3観点に整理した。ポイントは、育成を目指す資質・能力を「○○力」と定義するだけにとどめず、具体的な「行動」にまで落とし込んだことだ。それにより、生徒が何をすればよいか理解できるようにした。そして、最も多くの教師が身につけさせたい資質・能力に挙げた「コミュニケーション能力」を校訓の「礼節敬愛」の一要素と位置づけ、

図1 「礼節敬愛の取り組み」行動目標(抜粋)

◎ 2019年度

	じぶんを育てよう	なかまになろう	まなびに親しまおう
教室授業	<ul style="list-style-type: none"> <li>高農の授業を全部好きになろう</li> <li>先生の話をも素直に聞く姿勢を持とう</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>思いやりのある言葉と行動で、よい授業の雰囲気をつくらう</li> <li>教え合いで、互いに理解を深めよう</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>自分の教材を大切に管理しよう(教科書・ノート・ファイル等)</li> <li>得意分野をより高レベルに伸ばそう</li> </ul>
実習	<ul style="list-style-type: none"> <li>新しいこと・苦手なことにも「挑戦」をしよう</li> <li>実習の中で「気づき」を持とう</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>力を合わせる→作業効率が高くなる→楽しくなる!を実感しよう</li> <li>先生の「最初の説明」</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>実習で使う道具・施設を大切に扱おう</li> <li>分からないことは、その場で聞こう</li> </ul>

◎ 2020年度

	じぶんを育てよう	なかまになろう	まなびに親しまおう
授業	<ul style="list-style-type: none"> <li>礼儀正しい挨拶と敬語を心がけよう</li> <li>授業中「気づいたこと」や「疑問」には積極的に質問しよう</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>授業のルールを守り、落ち着いた雰囲気を作らう</li> <li>協力する→学習効率がよくなる→楽しくなる!を実感しよう</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>得意分野をより伸ばし、苦手分野には「挑戦」をしよう</li> <li>教材・道具・施設を大切に使う</li> </ul>
そうじ	<ul style="list-style-type: none"> <li>段取りを確認し、自分から進んで取り組もう</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>自分たちの担当場所に責任を持ち、協力してキレイにしよう</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>「ゴミを減らす」「汚さない」で学びの環境を守らう</li> </ul>
集会	<ul style="list-style-type: none"> <li>顔を上げ、話している人を見よう</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>遅刻・私語といったマナー違反を注意し合える仲間になろう</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>ポートフォリオに記録を残そう</li> </ul>

2019年度は、「教室授業」「実習」「休み時間」「そうじ」「集会」「寮」の6場面を設定していたが、20年度は、「授業」「そうじ」「集会」の3場面に精選した。

\*学校資料を基に編集部で作成。

図2 「礼節敬愛の取り組み」行動評価表(抜粋)

	じぶんを育てよう	なかまになろう	まなびに親しまおう
授業	<ul style="list-style-type: none"> <li>職員アンケート</li> <li>礼法キャンペーン</li> <li>容儀検査</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>遅刻・早退数</li> <li>いじめアンケート</li> <li>社会スキルアンケート</li> <li>提出物状況</li> <li>授業・実習中のケガによる保健室入室</li> <li>授業中の指導回数</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>資格取得数</li> <li>定期考査</li> <li>基礎力診断テスト伸び率</li> </ul>
	<ul style="list-style-type: none"> <li>SPHアンケート</li> <li>基礎力診断テスト(*1)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>SPHアンケート</li> <li>いじめアンケート</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>SPHアンケート</li> <li>学習環境調査</li> </ul>

SPHアンケートは、文部科学省「スーパー・プロフェッショナル・ハイスクール」に関連した意識調査のこと。社会スキルアンケートは、P.36 図3を参照。

\*学校資料を基に編集部で作成。

「礼節敬愛の取り組み」と名づけた。次に、全教師参加のワークショップで、3観点ごとに学校生活の各場面での望ましい行動、すなわち、行動目標を検討した。各目標は、生徒の力を信じ、達成のハードルが高いレベルに設定。各目標の達成状況の評価方法は、新たな取り組みを導入するのではなく、既に行っている遅刻・早退数などの調査から設定し、教師の負担が増えないようにした。最終的には、「教室授業」「実習」「休み時間」などの6場面の行動目標を

示した「礼節敬愛の取り組み」(図1)と、各目標の評価方法を示す「行動評価表」(図2)を作成。19年度の新入生から適用することにした。ところが、市原先生が在校生にその計画を伝えたところ、「取り組みはよいけれど、うまくいかないと思う」という意見が出された。「その生徒には、『1年生は先輩の行動を参考にするから、2・3年生が変わらなと浸透しない』と言われました。確かにその通りだと思えます。そこで、18年度の3学期、翌

年度に新1年生の先輩となる1・2年生に、「集会」の場面で指導を実施することにしました(市原先生) 集会の度に、クラス全員が集合するまでの時間を測ってその結果を伝えたり、教師が整列の指導をしたりすると、驚くほどの効果が表れた。「以前は遅刻者が多く、雑然としていましたが、指導を繰り返すうちに、生徒は開始時刻までに集まり、静かに整列するようになりました。この状況は現在も続いています。そうした生徒の姿から、粘り強く指導

\*1 ベネッセのアセスメント「進路マップ」の1つで、義務教育範囲も含めた基礎学力を測るマーク式テスト。

図3 社会スキルアンケートの質問項目(抜粋)

- 1 困っている友だちを助けてあげる。
- 2 友だちの話を面白そうに聞く。
- 3 自分に親切にしてくれる友だちには親切にしてあげる。
- 4 友だちに話しかけられない。
- 5 友だちを脅かしたり、友だちに威張ったりする。
- 6 友だちが失敗したら、励ましてあげる。
- 7 友だちの頼みを聞く。
- 8 自分から友だちの仲間に入れない。
- 9 何でも友だちのせいにする。
- 10 友だちのけんかをうまくやめさせる。

全部で25項目。回答は、「全然あてはまらない」から「よくあてはまる」の4段階で行う。\*学校資料を基に編集部で作成。

19年度が始まると、新入生に向け「礼節敬愛の取り組み」を実践した。教師は、集会やクラスで取り組みの目的や目標達成を目指してすべきことなどを繰り返し説明するとともに、生徒が目標に応じた行動を起こせるよう環境も整えた。

その1つが、行動目標に関連する講演やワークショップを実施し、生徒の変容を促すことを目的とした、

### 目標達成に向けた行動を促す 学校設定科目を設置

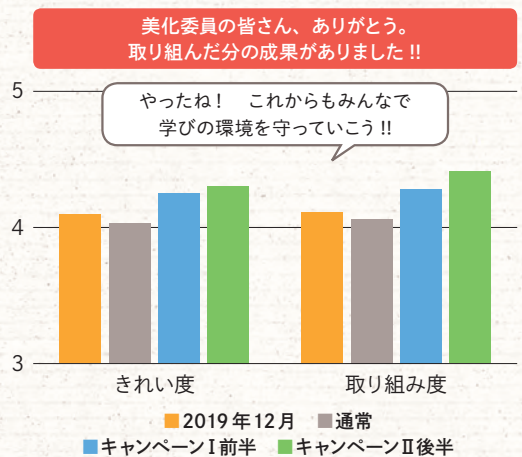
を続ければ、生徒は必ず変わるとい  
う確信を持ちました」(市原先生)

学校設定科目「ライフスキルⅠ」の設置だ。例えば、人権に関する講演を行い、生徒に講演の感想やいじめの実体験について無記名の作文を書かせて、それをクラス内で共有する。いじめを受けたり見たりしたクラスメートの体験を知ったことで、「このクラスでは、いじめを起こさせない」という共通意識が生まれたという。

「ライフスキルⅠ」では、社会スキルアンケートを用いて年3回、自己評価を実施し(図3)、その結果は、行動目標の達成状況を評価するデータの1つとして、教師が注意深く推移を観察している。

2・3年次には、「ライフスキルⅡ・Ⅲ」を選択科目として設置した。1年次の行動評価表の結果に基づき、個別指導が効果的であると判断された生徒に履修を推奨し、同意した生徒には通級による指導を行う。20年度の2年生では、8人が「ライフスキルⅡ」を履修している。

図4 「礼節敬愛 そうじキャンペーン」の1学期の結果



20年度1学期の「そうじキャンペーン」の成果を示したグラフ(掲示板に掲示)。19年度から徐々に成果が出ているのが分かる。

\*学校資料を基に編集部で作成。

「挨拶」「そうじ」などのキャンペーンも、生徒に目標に応じた行動を促す環境整備の1つだ。キャンペーン期間を通じて行動目標を改めて周知し、集中的に改善を図る。キャンペーン終了後には、キャンペーンの結果(図4)を示した掲示物を貼ったり、集会で報告したりして、生徒に必ず成果を伝えるようにしている。

「単に褒めるだけではなく、具体的な根拠を示して生徒を褒めるようにしています。それにより、自分の行動の意義を実感し、『次はここまで到達したい』と目標を引き上げ、よりポジティブな行動を起こせるようになります。それはまさに、『ス

クールワイドPBS』で重要視されていることの1つです」(市原先生)

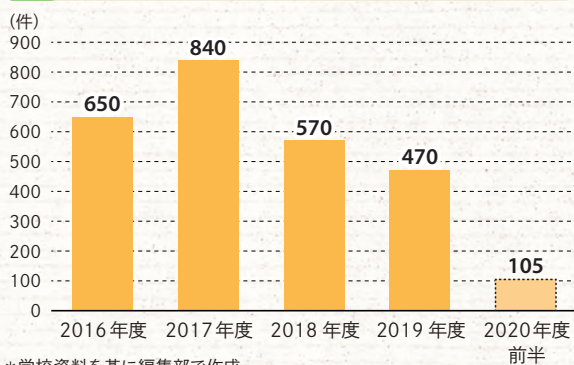
### 学校全体が落ち着き、 生徒も教師も前向きに

19年度の1年生への取り組みの結果、生徒と教師の双方に大きな変化が表れた。生徒には、例年の1年生に比べて、前向きな姿勢で授業を受けて、集会や掃除などでも落ち着いて行動する姿が見られた。その取り組みの好影響は全校に広がり、遅刻者総数も減少している(図5)。奥平博徳校長は、次のように述べる。

「学校全体の雰囲気明るくなり、活性化してきています。本校で多数を占める学力中位層の生徒が、前向きな気持ちで学校生活に臨めるようになったからだと思います。『ライフスキルⅠ』では自己分析をする機会が多いため、自分を客観的に見る力も育っていると感じます。その結果、学校が自分にとって意味のある場所だと実感して行動することができています。『礼節敬愛の取り組み』は当初、教育相談部が主導していたが、その重要性は徐々に全教師に広がった。

「礼節敬愛の取り組み」は当初、教育相談部が主導していたが、その重要性は徐々に全教師に広がった。

図5 全学年の遅刻者数の年間推移



\*学校資料を基に編集部で作成。

保健体育科の教師が、集会時の指導につながる整列の仕方を授業に取り入れるなど、各教師が生徒の行動を変えようとする取り組みが試みられている。19年度に1年生を担当した横田雅人先生は、次のように振り返る。

「丁寧に掃除に取り組む様子など、一つひとつの行動を言葉にして褒めると、生徒はうれしそうに表情をします。さらによい行動をするようになりました。そうした生徒の姿から、教師は自分の指導に自信が持てるようになり、授業やホームルームなどの様々な場面で、行動目標を意識した指導を行うようになりました」

個別の評価を充実させ、一人ひとりの意識を高める。生徒と教師の意識と行動が相乗的に変化していく一方で、課題も明らかとなる。教育相談部での検討や職員研修での協議の結果、20年度は取り組みの枠組みを再編した。大きな変更点は、評価の「場面」を6つから3つに精選したことだ。(P.35図1)

「場面が6つもあるとキャンペーンの回数も増え、生徒も教師も取り組みに集中しづらかったため、全教師がかかわる『授業』『そうじ』『集会』の3つの場面に絞り、行動目標も見直しました」(市原先生)

また、19年度1年生の「基礎力診断テスト」の結果を分析すると、学力下位層においては底上げが図られていたが、学力上位層は伸び悩んでいた。そこで20年度は、教務部が中心となり、「学びの姿勢を高める授業づくり」をテーマに授業改善の研修を行っていくことにした。教務主任の成合理恵子先生は、取り組みのねらいを次のように述べる。

「授業の行動目標の1つに、『得意分野をより伸ばし、苦手分野には』挑

戦』することが挙げられています。私が担当する数学でも、上位層を伸ばし切れていないことが課題でした。基礎学力の定着と、生徒の得意分野をさらに伸ばすという2つの方向から、授業改善に取り組みます」

フィードバックの方法も見直した。19年度は、全体に向けて取り組みの成果と課題を報告したが、20年度は、行動目標の到達状況を整理した個票を作成するなど、個人に向けた評価を充実させていく。

「学校全体の雰囲気は落ち着きましたが、行動目標の達成状況には個人差があります。『先生は自分を見てくれている』という気持ちを生徒一人ひとりに持たせることは、生徒と教師の信頼関係を深め、望ましい行動を増やす上でも重要です。今後は、個別のフィードバックに力を入れ、さらに生徒の行動変容につなげていきます」(横田先生)

**改善された今をあたり前とせず、生徒を褒め続けたい**

20年度は、新型コロナウイルスの感染拡大による臨時休業を経て、通常登校再開と同時に「礼節敬愛の取り組み」を実施している。期待するのは、2・3年生が昨年1年間で見せた行動を今年度も継続し、1年生はそれを手本として学ぶことで、学校全体が成長していくことだ。

学校が抱えていた問題が解決されていく中で、この状況をあたり前として捉えないように留意していると、市原先生は語る。

「生徒への期待が高まるのはよいことですが、目標のハードルを上げ過ぎると、生徒を褒める機会が減ったり、『昨年の生徒はできたのに』と捉えて、生徒に不満を抱いたりしかねません。多くの生徒がたくさん褒められる環境づくりを続け、ポジティブな行動支援をしていきたいと思えます」

教師の異動があっても取り組みを継続できる体制づくりも課題だが、教師に前向きな気持ちをもたらしてくれる取り組みであるという点は、継承のしやすさにつながっていると、市原先生は語る。

「生徒を叱るのではなく、褒めて前向きにする指導に、全教師がやりがいを感じています。教師も指導を楽しみながら、生徒が笑顔で成長できる環境を提供し続けていきます」



冒頭、清水先生から、本時は単元のまとめとなるラーニングマップを作成し、その内容を確認する口頭試験を行うことが説明された。次に、事前に指名されていた生徒が、生物多様性をテーマに調べた内容を発表する1分間スピーチを行った。担当の生徒は、虫に寄生し、それを栄養素にして成長する冬虫夏草について発表した。

●3年生「生物」の「生態と環境」の全18時間のうちの17・18時間目。生徒各自で、単元のまとめとなるラーニングマップを作成。まとめた内容をペアで説明し合った後、1人ずつ口頭試験が行われた。(P.41に単元の指導計画を掲載)

# ラーニングマップの作成と 生徒同士の相互説明・評価を通じて、 知識を体系化させ、伝える力を育む

面白いだけの授業から脱却し、  
育成したい資質・能力を考え直した

初任校でもある前任の商業高校時代に、清水  
絢子先生は、アクティブ・ラーニング(以下、  
AL)の視点を授業に取り入れ始めた。当初は、  
生徒の興味をかき立てようと面白い生物の話題  
を盛り込んだ授業を行ったが、関心を示したの  
は一部の進学希望者のみだった。また、多くの

清水先生のアクティブ・ラーニング



宮城県村田高校  
清水絢子 しみず・あやこ

教職歴7年。同校に赴任して3年目。  
進路指導部。理科(生物)担当。  
前任校の2年目から本格的に  
アクティブ・ラーニングの視点を  
取り入れた授業を実践。

## 宮城県村田高校

◎宮城県村田実科高等学校として開校。  
1995年、県内初の単位制の総合学科に改編した。「誠意、勤労、識見、気魄、協和」を校訓として、学力・体力・志と心の教育を目指す。普通教科の科目に、福祉・商業・工業の専門科目を加えた教育課程を編成し、生徒の幅広い希望進路に対応している。

◎設立 1924(大正13)年

◎形態 全日制/総合学科/共学

◎生徒数 1学年約120人

◎2020年度進路実績(現役のみ)

4年制大は、石巻専修大、尚絅学院大、仙台大、東北学院大、東北工業大、東北福祉大、福島学院大に延べ9人が合格。短大、専門学校進学31人。就職60人。

◎URL <https://murata-h.myswan.ed.jp/>

## 14:10 ペアで相互説明・評価①



隣席の生徒に、自分が作成したラーニングマップを用いて、「生態と環境」について4分間で説明した。聞き手役の生徒は、「生態系について自分の言葉で説明できる」「生物と環境の関連性について生物名を出して説明している」など、内容や発表に関する5項目について、できていれば1点(5点満点)として発表者の生徒を評価し、シートに記入していった。

## 13:40 ラーニングマップを作成



「生態と環境」を表すラーニングマップの作成を開始。生徒は教科書やノートを見ながら単元の内容を振り返るとともに、重要語句を付箋に書き、それらを関連づけて貼り、図式化していった。清水先生は、重要語句の関連性を的確に表現できるよう、「プランクトンは何を食べる?」「身近な生態系を例に挙げたら?」などと、生徒に気づきを促す声かけをした。

生徒が、自分の考えを筋道を立てて表現することや、相手の考えをしっかりと聞くといった、社会を生きる上で必要な資質・能力に乏しいことにも、課題を感じていた。

「授業を通じて、卒業後にも生きる力を身につけさせたいと考えましたが、私自身にそれらの力を伸ばす指導力がありませんでした。授業改善のヒントを得ようと外部の研修会や学会に参加し、そこで出合ったのがALでした」

生徒には、授業は、教科・科目の知識だけでなく、表現力なども身につける場であると折に触れて説明し、ペアワークなどを取り入れた。実践を重ねるうちに、「他者に説明することで、自分の理解が浅いところが分かった」と語る生徒が現れるなど、メタ認知能力の向上にも有効であることに気づいた。一定の手応えを感じた清水先生だったが、現任校に着任後、すぐに担当した3年生の授業では、教科書の内容を生徒同士で説明し合うといった形態に生徒は戸惑った。

「自分の考えを、他者に伝える活動に慣れておらず、不安を感じたのでしよう。前任校で感じた生徒の課題は現任校でも同じで、ALの有用性を感じましたが、まずは生徒との信頼関係の構築に時間をかけるべきでした。実践の意図を丁寧に語るとともに、私自身が試行錯誤を重ねていることを開示すべきだったと思います」

赴任1年目に受け持った1年生(現3年生)には、社会で必要な資質・能力を育成すべく、授業形態を模索し続けてきた中で、生徒同士で説明

する機会を重視していることなどを入学時から伝えた。そして、ALの視点を取り入れた授業を行うことで、生徒は、自分で考えたり、他者と協働したりしながら学ぶ姿勢を身につけていった。

### 思考の活性化・深化への配慮

#### 実験・観察を基に生徒自身が仮説を立て、生徒同士で議論

実験や観察を重視する清水先生は、授業を2時間連続とし、教科書の順序を変えて単元計画を立て、ほぼ毎回、実験や観察を行っている。

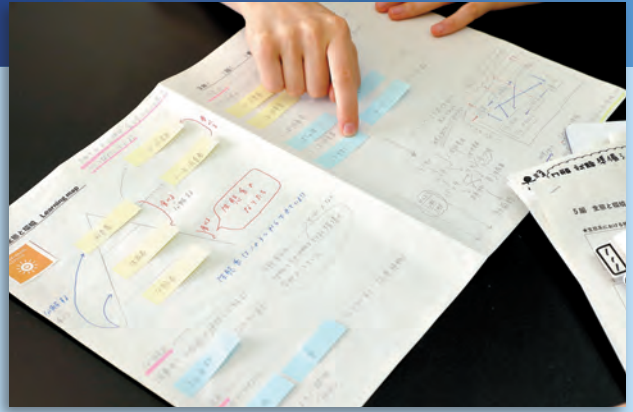
「実験や観察で得た気づきや生じた疑問を基に、生徒が仮説を立て、他者と議論して仮説に対する考えを深め、教科書に戻って仮説を理論的に裏づける展開にしています。体験に基づいて考え、より深く理解することで、教科書の内容を超える発想が出てくると期待しています」

例えば、野外で生き物を観察してタブレット端末で撮影し、その生き物の生態系における役割や食物連鎖について考えたり、生徒同士で話し合ったりする。その過程で生徒から出てきた疑問に対して、教科書を用いて清水先生が説明する。

そうして身につけた知識や考えを体系化する機会が、本時のラーニングマップの作成だ。それは、単元の最後に行く活動で、学習内容を振り返って自分が重要だと思う語句を付箋に書き、それらを矢印などで関連づけて図式化する。



清水先生は、生徒を1人ずつ呼び、口頭試験を実施した。生徒が説明を終えると、「地衣類は植物ですか」「人間はどこに入りますか」といった質問をして理解度を確認。「具体例から入るのはよいですね」などと、説明の工夫点を評価した。受験者以外の生徒は、引き続きラーニングマップを修正。全員の試験が終わると、生徒は振り返りシートを記入し、提出した。



ペアワークでの気づきを踏まえて、ラーニングマップを修正。休み時間を挟んだ後、聞き手役と発表者を変えて相互説明と評価を行った。「指摘を踏まえて知識を整理し、相手に伝わるように表現を工夫する活動は、疲れるけれど楽しい」といった感想を述べる生徒もいた。相互説明を終えた後は、ペアの相手からの評価を基に、再度ラーニングマップを修正した。

**活動の相手をランダムに変え、  
どんな相手とも対話できる力を育む**

清水先生は、事前に席割を決めたり、くじ引きをしたりして、ペアの相手やグループのメンバーが毎回変わるようにしている。

「社会では、多様な人と仕事をします。どんな相手でも、その発言に耳を傾け、自分の考えを伝える力を身につけてほしいと考えています」

また、1年次の最初の授業では、生徒全員が自分を表現する立体作品を作り、その作品についてプレゼンテーションして、感想を述べ合う活動を行い、生徒が互いの人となりを理解するための場を設けた。

場づくりへの配慮

学習内容と世界の課題とのつながりを意識させるため、SDGs（\*）の中で関連があると思う目標のアイコンを該当部分に貼らせている。

「生徒からは、『ラーニングマップを何度か作るうちに、生物以外にも物事を関連づけて考えるようになりました』といった声が上がっています。情報を整理する編集力や論理的思考力も身につけると感じています」

そして、作成したラーニングマップを基に、単元で学んだことを生徒同士で説明し合って相互評価を行い、口頭試験も実施する。相手に伝える力を育成するとともに、他者の考えを知り、自身の学びをさらに深める機会としている。

**振り返りシートの問いを工夫し、  
より深い思考へと導きたい**

清水先生の授業を2年間受けて3年生となった生徒は、自分の意見を明確に発言するようになり、うまく発言できなくても、諦めずに考え、発言しようとする姿勢を見せるようになった。定期考査の得点も上昇傾向にある。

今後の課題は、振り返りシートの改善だ。現在は記入時間が短いこともあり、授業の感想など、表面的な記述にとどまっている。

「授業で学んだことを自分のこれからの学校生活、ひいては人生にどう生かすか、今後の展望までを考えられるよう、振り返りシートでの問いかけを工夫し、生徒の学びをさらに深めていきたいと考えています」

成果と課題

「生徒が互いに認め合っている雰囲気をつくっておくと、ペアワークで議論しやすくなります。授業時間を充ててでも、他者を理解する経験させる利点は大きいと思います」

新型コロナウイルスの感染拡大による臨時休業明けの最初の授業では、「学校で学ぶ意義」について生徒同士で議論させた。すると、「価値観や考えを共有できる」「他者の意見を聞くことで視野が広がる」といった意見が出された。長期間、学校に來られない経験をして、多くの生徒が仲間と学ぶことの意義を再確認していた。

\* Sustainable Development Goals の略。2015年に国連が掲げた、持続可能な開発目標のこと。「貧困をなくそう」「飢餓をゼロに」など、17の目標と169のターゲットから成る。

## 単元の指導計画

【教科・科目】理科・生物 【分野・単元】生態と環境 【テーマ・作品】生態と環境に関する口頭試験 【設定時数】全18時間の中の17・18時間目 【単元目標】生態と環境について、観察、実験などを通して探究し、生態系における生物間の関係性、及び生物と環境との関連性を見いだして表現することができる。

時数	学習内容	身につけさせたい資質・能力	授業の流れ	教師の配慮	評価方法
1・2	授業開き(臨時休業明けの最初の授業)、私たちが取る身近な行動と世界の生態系とのつながりを考える	世界で起こっていることと、私たちが取る身近な行動とのつながりについて考え、当事者意識を持つことができる。 【思考力、主体性】	①臨時休業を踏まえて、「学校で学ぶ意義」についてグループで議論する。 ②ボルネオ島の森林生態系とチョコレートとの関係についての講義を聴く。 ③ボルネオ島のアブラヤシ農園の労働者や森林伐採業者など、様々な立場の人の意見を考え、4人グループで意見交換をする。 ④振り返りシートに記入。本時の学びを言語化し、自己評価を行う。	【主体的な学び】・世界と自分たちとのつながりについて考え、発信する。・振り返りシートを活用し、気づいたことや感じたことを言語化する機会を設ける。 【対話的な学び】・生徒全員が発言し、その意見を尊重し合っているか。・他者の意見から気づきを得て、学ぼうとしているか。【深い学び】・生徒から出てこなかった視点を適宜提供し、さらなる思考の深化を促す。	・観察 ・授業プリントの提出 ・振り返りシート
3・4	身近な生態系における食物連鎖の関係	生態系に関する基本的な知識を理解し、身の回りの生態系と結びつけて表現できる。 【知識、技能、表現力】	①アイスブレイク～人の多様性に触れる～互いの価値観を共有する。 ②野外に出て、気になった生き物をタブレット端末のカメラで撮影する。 ③撮影した生き物が生態系で果たす役割や食物連鎖の関係について、4人グループで考え、代表者が発表する。 ④振り返りシートに記入。本時の学びを言語化し、自己評価を行う。	【主体的な学び】・野外で、生徒自ら興味のある生物を扱う。・振り返りシートを活用し、気づいたことや感じたことを言語化する機会を設ける。【対話的な学び】・生徒全員が発言し、その意見を尊重し合っているか。・他者の意見から気づきを得て、学ぼうとしているか。【深い学び】・生徒から出てこなかった視点を適宜提供し、さらなる思考の深化を促す。	
15・16	水中の生態系の観察、生態系における生き物の相互作用	観察した事象や自身の経験を知識と結びつけ、他者に説明することができる。 【知識、技能、表現力】	①あらかじめ指名された生徒が、生物に関する1分間スピーチを行う。 ②水中生物を顕微鏡で観察し(生態系の移り変わり)、考察する(観察継続③)。 ③生態系に関する知識について、教科書を読んで相互説明を行う。 ④生態系に関する補足講義を聴く。 ⑤振り返りシートに記入。本時の学びを言語化し、自己評価を行う。	【主体的な学び】・振り返りシートを活用し、気づいたことや感じたことを言語化する機会を設ける。【対話的な学び】・生徒全員が発言し、その意見を尊重し合っているか。・他者の意見から気づきを得て、学ぼうとしているか。【深い学び】・生徒から出てこなかった視点を適宜提供し、さらなる思考の深化を促す。	・観察 ・授業プリントの提出 ・振り返りシート
17・18	生態と環境に関する口頭試験	習得した複数の知識を結びつけながら、単元の学習内容を自分の言葉で表現することができる。 【表現力、主体性】	①あらかじめ指名された生徒が、生物に関する1分間スピーチを行う。 ②ラーニングマップを作成し、実験をレポートにまとめる。 ③ペアで、自分が書いたラーニングマップを説明する。気づきを踏まえて修正をしたら、聞き手役と発表者を変えて、同じように説明を行う。 ④生徒1人ずつに口頭試験を実施。 ⑤振り返りシートに記入。本時の学びを言語化し、自己評価を行う。	【主体的な学び】・自分が学んだことをどのように表現すれば、他者が理解できるように説明できるかを考える。【対話的な学び】・経験を自分の言葉で伝えることができているか。・他者の立場になって伝える視点を持っているか。・他者の意見から気づきを得て、学ぼうとしているか。【深い学び】・生徒の意見を基に、さらなる思考を促すための問いかけをする。	・観察 ・ラーニングマップ ・グループブリックを用いた口頭試験

\*清水先生作成の単元の指導計画を基に編集部で作成。単元の指導計画の全18時間分は、ベネッセ教育総合研究所のウェブサイト(https://berd.benesse.jp)からダウンロードできます。「HOME→教育情報→高校向け」をご覧ください。

### 同僚の声



堀川 典憲  
物理・化学担当



佐藤 愛湖  
実験助手

佐藤 清水先生は、実験や観察を重視した授業を行い、教科書にない実験を取り上げられることもよくありますよね。

清水 教科書の内容を確認するだけの実験では、実験の内容ではなく、正確に再現できるかといった手順に生徒はこだわりがちです。教科書に載っていない実験も行いますが、教科書の実験と本質的には同じことに気づく生徒もいます。ただ、例えば、人間と似た構造を持つ豚の解剖などは、実際に見ることが大切だと考え、教科書通りに行うようにしています。さらに、実際に見ることと、右心室と左心室の場所を確認するだけでなく、どちらの壁が厚いか、なぜこの壁は薄いかといったことに着目させるなど、学びを深める意図があります。

堀川 清水先生が本校に赴任されてから、理科室には魚や植物などの標本が並び、理科室とその廊下には掲示物が増えました。こういったねらいがあるのですか。

清水 理科室に来るだけで、生徒が刺激を受けられるような環境にしようと考えました。生徒が採取した生物など、展示を少し変えただけで、「新しい標本が増えましたね」と声をかけてくる生徒もいます。

堀川 以前はチャイムと同時に理科室に駆け込む生徒が目立ちましたが、今では多くの生徒が5分前に入るようになりました。そういった環境づくりも、生徒が授業への関心を高める工夫点ですね。

9:40 アイスブレイク



生徒はまず、電子黒板に映し出されたアメリカの無声CMを見て訴求内容を推測し、英語で説明し合うペアワークを行った。続いて、日本の土産屋の写真が提示され、生徒はペアの相手と、店員と外国人旅行者の役を分担し、買い物の場面を想定したやり取りを英語で行った。生徒は、ジェスチャーを交えながら一生懸命やり取りをしていた。

授業  
ハイライト

●3年生「コミュニケーション英語Ⅲ」の「The Legacy of Kano Jigoro」の全6時間のうちの9時間目。前時に書いた英作文を基に、グループごとにプレゼンテーションと相互評価を行った。(P.45に単元の指導計画を掲載)

主体的・対話的で  
深い学びへ

実践  
アクティブ・ラーニング

英語

協働学習やアウトプット活動を  
バランスよく配置し、  
自ら学びに向かう姿勢を育む

大西先生のアクティブ・ラーニング

模擬授業の体験から、生徒同士の  
コミュニケーションを重視する指導観に転換

大西友一朗先生は、講義型の授業をしていた頃、生徒間に溝があることを課題に感じていた。「その溝は、『英語を楽しんでいる、楽しんでいる』『英語が得意、不得意』の差として表れていました。中学校時代から基礎学力のある生徒は、授業を理解して英語力を高めていきま



香川県・私立四国学院大学香川西高校

大西友一朗 おおにし・ゆういちろう

教職歴19年。同校に赴任して17年目。  
特別進学コース長。進路部長補佐。  
英語科主任。

### 香川県・私立四国学院大学香川西高校

◎上戸洋裁研究所として設立。2016年度に四国学院大学の系属校となる。キリスト教精神に基づき、人格の尊厳と自由を基盤として豊かな人間性を醸成する教育を展開。野球部や男女サッカー部、陸上競技部などが強豪として有名。

◎設立 1946(昭和21)年

◎形態 全日制/普通科・商業科・衛生看護科/共学

◎生徒数 1学年約180人

◎2020年度進路実績(現役のみ)

国公立大は、大阪大、山口大、琉球大、岡山県立大などに8人が合格。私立大は、早稲田大、立命館大、関西学院大、甲南大、四国学院大などに延べ66人が合格。短大、専門学校進学39人。就職44人。

◎URL <http://www.kagawanishikou.com/>

## 9:55 本文の内容の確認



大西先生が先に読み上げた教科書の本文のフレーズを、生徒が全員で復唱。次に、生徒を起立させて、各自が音読を1回する度に時計回りに90度回転し、4回読み終えて正面を向いたら挙手する活動を行った。その活動後、大西先生が本文の内容について、生徒に英語で質問し、指名された生徒が英語で答えることを数回繰り返して、本文の内容を確認していった。

## 9:50 新出単語の確認



生徒が各自で単語学習カードやノートを見直した後、大西先生は新出単語が書かれたフラッシュカード（\*1）をテンポよく提示し、生徒全員が一斉に答えた。新出単語の確認は毎時間行っており、本単元を学ぶのは6時間目であることから、多くの生徒に新出単語が定着。カードが示されると、生徒は大きな声で単語を発音したり、意味を答えたりしていた。

すが、そうではない生徒は授業に関心も示さず、その溝は深まるばかりでした」

そうした課題意識の下、5年ほど前から参加するようになった英語教師向けの外部研修を通じて、大西先生の指導観は徐々に変わっていった。大きな変化は、生徒同士のコミュニケーションを重視するようになったことだ。そのきっかけは、外部研修で行われた模擬授業に生徒役で参加した際、教師から一方的に教えられるより、自分で考えて表現し合う学びの方が断然楽しく、理解も深まると実感したことだった。以前の授業では、インプット活動が大半を占めていたが、今では、授業で自分が説明する時間は長くても20分間とし、インプットとアウトプットのバランスを考慮して、ペアやグループで行う活動をできるだけ多く取り入れている。

個人学習と協働学習のバランスを図り、学びを深める工夫もしている。本時では、前時に単元のまとめとして取り組んだ英作文の内容を、グループでプレゼンテーションする活動を行った。「自分の考えを発表する場を設けることで、相手に伝えることを意識して英作文を書くようになり、内容が深まります。加えて、プレゼンテーションする内容を暗唱できるようにするために何度も音読をするので、スピーキング力の向上にもつながります。また、プレゼンテーションを聞いて相手の考えを知れることは、コミュニケーションが生まれるきっかけにもなります。そのように、1つの活動から様々な教育的効果

を生み出し、学びが深まるようにしています」

### 思考の活性化・深化への配慮

#### 理由と根拠を持って自分の意見を述べる活動で、伝える力を鍛える

大西先生がアウトプット活動で生徒に意識するように繰り返して伝えているのが、「ARE (Assertion, Reason, Evidence)」の要素を入れることだ。本時のアイスブレイクやプレゼンテーションでも、まず自分の考えを述べ (Assertion)、それを理由 (Reason) と根拠 (Evidence) を持って説明するように指導した。「AREを意識することで、自分の思考が深まり、相手を納得させられる伝え方が身につきます。AREは、英語だけでなく日本語で話す際にも意識してほしいことであり、説得力のある小論文を書く土台にもなります」

アウトプット活動では、SDGsに関するテーマを設定することが多い。本単元では、オリンピックが取り上げられているため、持続可能な開発目標の視点から、「東京オリンピック・パラリンピック後、それらの施設をどう使うか」を英作文とプレゼンテーションのテーマにした。

「私には、世界平和に貢献できる生徒を育てたいという思いがあり、その実現に向けたコミュニケーションツールとして英語4技能が不可欠だと考えています。そのため、授業でも英語を使いながらSDGsについて考える機会を

\*1 単語や語句などが書かれたカードを瞬時に切り替えていくこと。暗記などに使われる。

## 10:15 プレゼンテーション



4～5人のグループとなり、1人ずつ立って、自分の書いた英作文をプレゼンテーションした。聞き手役の生徒は、ループリックに基づいた内容や伝え方などに関する評価とコメントを評価シートに記入し、プレゼンテーション後には英語で質疑応答を行った。大西先生は各グループを回りながら、笑顔でうなずいたり、拍手をしたりして、場の雰囲気づくりに努めた。

## 10:10 プレゼンテーションの準備



生徒は、「東京オリンピック・パラリンピック後、それらの施設をどう使うか」をテーマに前時に書いた英作文のA L Tによる添削の内容を確認し、本時に行うプレゼンテーションを暗唱してできるよう、繰り返し音読練習をした。大西先生は、「聞き手の存在を意識して、大きな声で分かりやすく伝えよう」と呼びかけた。

できるだけ付けています」

英語の授業でアウトプット活動を繰り返す一方で、同校の「総合的な探究の時間」では、A L Tの指導の下、学期に1回、SDGsをテーマとした英語でのプレゼンテーションを行っている。学校全体で教科を超えたカリキュラムを構築し、英語力や思考力を相乗的に高めている。

### 場づくりへの配慮

### 間違いを恐れずに活動できるよう、 何度も声をかける

生徒に英語を使いたいと思わせる活動として行うのが、授業冒頭のアイスブレイクだ。大西先生は、生徒が関心を持ちそうな動画や画像を厳選して活動内容を準備。活動中には「英語は間違いを繰り返しながら身につけるものだから、積極的に話そう」「楽しむことを忘れないように」などと、雰囲気づくりに努めている。

「生徒が安心して英語を話せるように、声をかけています。間違いを恐れなくなると、ミスから学べることもあると気づき、ペアの相手が間違えた時にも指摘し合うようになります」大西先生は、ほとんど日本語を使わず、英語で授業を進め、タイマーで各活動の時間を区切り、スピーディーに活動を切り替えていく。

「耳から入ってきた英語を素早く反射的に発音させたり、日本語を介さず英語で思考させたりすることで、4技能の育成を図っています」

### 成果と課題

### 英語学習に積極的になり、 全体的に英語力が伸びる

大西先生が授業を変化させるに連れて、生徒は自ら英語を学ぶようになったという。

「英語学習にポジティブな生徒が増えたと感じています。そして、4技能を使う中で、『音読を繰り返したら自然と英語が出てきたから、次も音読を頑張ろう』などと、コミュニケーションの中で様々な活動の効果を実感できることが、自ら学ぶ姿勢につながっているようです。そうした主体的な学習者を生み出す学びこそ、アクティブ・ラーニングだと捉えています」

大きな成果は、どの学力層の生徒も英語力が向上していることだ。とりわけ下位層の生徒の英語力が底上げされ、課題だった英語力の差が縮まっている。昨年度の卒業生の中には、入学時に英語の模擬試験の偏差値が30台だった生徒が、卒業時には60台に上昇したケースも珍しくなかった。英語学習の楽しさに目覚め、大学でも英語を学びたいと考える生徒も増え、大西先生が担当する特別進学コースでは、外国語・国際系学部に進学する生徒の割合が、5年前の約2割から、現在は約5割にまで上昇した。

「英語が好きな生徒が増えるのは喜ばしいことです。英語を自分の目標を達成するためのツールとして生かし、世界平和に貢献する人へと成長することを願っています」

## 単元の指導計画

【教科・科目】英語・コミュニケーション英語Ⅲ 【分野・単元】Chapter1 The Legacy of Kano Jigoro 【テーマ・作品】東京オリンピック・パラリンピック後、それらの施設をどう使うか(グループでプレゼンをしよう) 【設定時数】全6時間の中の6時間目 【単元目標】テーマに沿って自分の意見を表現し、相手の意見を聴き、メタ認知能力を高める。

時数	学習内容	身につけさせたい 資質・能力	授業の流れ	教師の配慮	評価方法
1	<ul style="list-style-type: none"> <li>本文を速読し、問いに答える。</li> <li>WPM(*2)でスコアをつける。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>間違いを恐れず、英語で表現することができる。</li> <li>これまでに学習した知識や新出単語を用いて、速読力を身につける。</li> </ul> <b>【知識、技能、思考力、表現力、協働性】</b>	<ol style="list-style-type: none"> <li>アイスブレイクを行う。</li> <li>新出単語の確認を、クイズ形式のプリントで行う。解答した生徒から、順次教師が答え合わせをする。隣の席の生徒とプリントを交換して、アクセントも含めて再確認する。</li> <li>プリントの問題を1分間で速読した後、本文を速読する。</li> <li>時間を区切って問題に取り組む。解答した生徒は、教師が答え合わせをし、ポイントを与える。</li> </ol>		<ul style="list-style-type: none"> <li>速読表にスコアを入れる。</li> </ul>
2	<ul style="list-style-type: none"> <li>和訳を先に渡し、同時通訳(前半)。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>間違いを恐れず、英語で表現することができる。</li> <li>新出単語を覚えることができる。</li> <li>音読によって、本文の内容を正しく理解し、速読力を身につける。</li> </ul> <b>【知識、技能、思考力、表現力、多様性、協働性】</b>	<ol style="list-style-type: none"> <li>アイスブレイクを行う。</li> <li>単語を音読した後、マンプリング(*3)で単語を5分間で覚え、覚えた単語の確認をペアで行う(1問につき5秒)。</li> <li>本文をマンプリングで暗唱し(5分間)、ペアで同時通訳を行う。</li> </ol>	<b>【対話的な学び】</b> 簡単な評価カードを作ることにより、ペアワークへの取り組みを促す。	<ul style="list-style-type: none"> <li>単語シート</li> <li>同時通訳シート</li> </ul>
5	<ul style="list-style-type: none"> <li>本文内容(後半)の確認</li> <li>本文のテーマに関する英作文</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>間違いを恐れず、英語で表現することができる。</li> <li>新出単語を定着させることができる。</li> <li>本文の内容を深く理解することができる。</li> </ul> <b>【知識、思考力、判断力、表現力、協働性】</b>	<ol style="list-style-type: none"> <li>アイスブレイクを行う。</li> <li>フラッシュカードで新出単語を確認する。</li> <li>本文の内容に関する質問を英語で(英語の質問文は、事前に生徒が黒板に書いておく)。</li> <li>質問の答え合わせをし、難解な文章を解説する。</li> <li>本文の内容に関連したテーマについて考え、自分の意見を英作文でまとめる。時間内に終わらなければ、後日提出する。</li> </ol>	<b>【主体的な学び】</b> 英作文のテーマについて自ら調べることにより、発表への意識を高める。	
6	<ul style="list-style-type: none"> <li>プレゼンテーション</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>間違いを恐れず、英語で表現することができる。</li> <li>新出単語を定着させることができる。</li> <li>他者の意見を聴き、自分の今後の考え方を広げることができる。</li> <li>自分の意見を相手に伝えることができる。</li> </ul> <b>【思考力、判断力、表現力、主体性、協働性】</b>	<ol style="list-style-type: none"> <li>アイスブレイクを行う。</li> <li>フラッシュカードで新出単語を確認する。</li> <li>事前に返却された前時に書いた英作文について、生徒はALTの添削の内容を確認し、自分の英作文の音読練習をする。</li> <li>プレゼンテーションの注意点を伝え、リハーサルを行う。</li> <li>4~5人のグループとなり、生徒が1人ずつプレゼンテーションする。聞き手はループリックで評価する。</li> </ol>	<b>【対話的な学び】</b> 評価シートに評価者のコメント欄をつけ、発表者が評価者の意見を知ることができるようにした。 <b>【深い学び】</b> SDGsにつながるヒントが得られるよう、英作文のテーマを「東京オリンピック・パラリンピック後、それらの施設をどう使うか」とした。	<ul style="list-style-type: none"> <li>ループリックによる他者評価</li> </ul>

\*大西先生作成の単元の指導計画を基に編集部で作成。単元の指導計画の全6時間分は、ベネッセ教育総合研究所のウェブサイト(<https://berd.benesse.jp/>)からダウンロードできます。「HOME→教育情報→高校向け」をご覧ください。

### 同僚の声



**英語科 山中秀和先生** 教室にはほどよい緊張感があり、生徒だけでなく、大西先生自身も授業を楽しむ様子が見られました。タイムアッパーで時間を区切って展開する授業は、テンポがよく、メリハリができることで、生徒の集中力は途切れていませんでした。そうした授業構成を自分も取り入れたいと思いました。

**英語科 青山直樹先生** ループリックを基にした評価結果を評価シートに書き込んで相手に渡す相互評価があることで、プレゼンテーションする生徒は、明確な目標を持って音読練習をしていました。評価する生徒も、気を引き締めてしっかり聴く態勢ができ、リスニング力の向上につながると思います。

**数学科 山下達也先生** テンポよく、スピーディーに展開する授業でしたが、授業についていけない生徒は見あたりませんでした。題材やレベルの設定が適切であり、どの学力層の生徒も自分で考えられるからだと思います。私が担当する数学の授業でも、そうした課題設定や活動の時間配分などの工夫を取り入れたいです。

**国語科、地理歴史・公民科 渡邊涼花先生** 大西先生は、ペアワークやプレゼンテーションを通して、「相手の気持ちを考えて話す」「分かりやすい言葉で伝える」など、教科の枠を超えて社会で必要な力も育成していました。異なる教科の授業でも学べる点がたくさんあり、私も日本史の授業でフラッシュカードを活用しています。

\*2 Words Per Minuteの略。1分間に読むことのできる単語数のこと。 \*3 英語学習法の1つで、聞こえてきた英語の音を小声でぶつぶつ言うように発音すること。

石川県立加賀高校

## 観点別学習状況の評価の実施

# 授業態度を重視した評価と 少人数制クラスの導入で、 生徒の学習意欲を高める

### 変革のステップ

#### 背景と課題

- 定期考査を重視する従来の評価方法では、授業に真面目に取り組む生徒を公正に評価することができていなかった
- 生徒の授業への参加意欲が低かったため、アクティブ・ラーニングの視点を取り入れた授業の推進が課題だった

#### 実践内容

- 観点別学習状況の評価を実施** 授業態度やパフォーマンス評価の規準を策定し、定期考査や提出物に加え、ルーブリックを使って、「関心・意欲・態度」も公正に評価する仕組みを構築
- 少人数制クラスを増加** 少人数制授業を行う教科・科目で、従来の3クラスを4クラスにし、教師が生徒一人ひとりの学びをより丁寧に見取れるよう体制を整えた

#### 成果と展望

- 生徒の授業態度が変容し、授業に積極的に参加するようになった
- 「思考力・判断力・表現力」の育成の強化が、今後の課題

**授業に真面目に取り組む生徒を評価できる仕組みを作りたい**

2018年度、石川県立加賀高校は、学期ごとの成績の評価方法を改定した。従来の定期考査7割、平常点3割という比重を改め、「関心・意欲・態度」「思考・判断・表現」「技能」「知識・理解」の4観点(\*)による観点別学習状況の評価(以下、観点別評価)を実施し、定期考査や提出物に加え、ルーブリックを使ったパフォーマンス評価を導入することにした(図1)。

評価方法を改定した背景には、「頑張っている生徒を、公正に評価したい」という思いがあった。学び直しを必要とする生徒が多く入学してくる同校では、学びに向かう力を育成するこ

### PROFILE



普通科高校として開校後、2000年度、南加賀地区唯一の総合学科高校となる。3年間を見通したきめ細かなキャリア教育を行い、生徒の進路実現を図る。2年次から、希望進路に応じた進学、生活・福祉、ビジネスの3系列を用意。

設立 1973(昭和48)年

形態 全日制/総合学科/共学

生徒数 1学年約80人

2020年度進路実績(現役のみ) 4年制大は、金城大に1人が合格。短大、専門学校進学18人。就職40人。

住所 〒922-0331 石川県加賀市動橋町ム53

電話 0761-74-5044

Web site <https://cms1.ishikawa-c.ed.jp/kagaxh/>

\* 教科・科目によっては、その特性から3観点または5観点としている。

とを重視していた。しかし、従来の評価方法では、授業に真面目に取り組んでいても、定期考査の得点が低ければ、低い評定をつけざるを得なかった。教務主任の中已出仁美先生は、次のように語る。

「努力しても評価が低ければ、生徒はやる気を失ってしまいます。一方で、授業態度に問題があっても、定期考査で高得点を上げれば高い評価を得られます。もつと評価すべき生徒を評価できていないといったジレンマがありました」

また、同校では、これからの社会で一層必要となる主体性や協働性、コミュニケーション力



**校長 桐生裕三** きりゅう・ゆうぞう  
教職歴34年。同校に赴任して2年目。「学びて思わざれば則ちくらし、思いて学ばざれば則ちあやうし（孔子）」

**教務主任 中已出仁美** なかみで・さとみ  
教職歴13年。同校に赴任して10年目。「生徒一人ひとりに寄り添い、かわり、彼らの成長とともに喜び合えるように」

**進路指導課 前田鷹図** まえだ・たかと  
教職歴10年。同校に赴任して4年目。「誰に対しても公平であること。土曜三日、即更刮目相待」

**教務課 秋山拓也** あきやま・たくや  
教職歴3年。同校に赴任して3年目。「学ぶことをやめたら、教えることをやめなければならぬ」

などを育むために、アクティブ・ラーニング（以下、AL）の視点を取り入れた授業を積極的に推進していた。しかし、従来の評価方法では、授業態度はあまり評価されないため、育成を目指す資質・能力、及びそれらを育成するための教育活動に、評価方法が対応していないといった問題があった。教務課に所属し評価方法の改定を推進した前田鷹図先生（現在は進路指導課所属）は、次のように語る。

「本校が育成を目指す資質・能力は、当時も今も変わっていません。知識の習得だけでなく、主体性や協働性などを育みたいのです。そのために、ALの視点を取り入れた授業を行おうと思っても、生徒の授業への参加意欲は低く、授業が成り立つ状況ではありませんでした。どうすれば生徒が意欲的に授業に取り組むようになるのか真剣に考えました」

教務課は17年12月、管理職と協議の上、評価方法の改定案を作成し、全教師に配布して意見を募った。すると、評価方法の煩雑さを懸念する声はあったものの、指導と評価の一体化を図るといった趣旨には、概ね賛同が得られた。そこで、18年3月の職員会議で正式に改定を提案。それが承認され、18年度に観点別評価を実施することとなった。

### 「学習意欲の向上をねらい、 「態度」の評価を重視

同校の観点別評価の特徴は、「関心・意欲・態

図1 観点別評価の構成

		成績判定（計100点）					
		40点（%）		20点（%）		20点（%）	
		関心・意欲・態度		思考・判断・表現		技能	
考査のある科目	提出物等	パフォーマンス評価	40%	パフォーマンス評価	70%	パフォーマンス評価	80%
	考査点	60%	30%	20%	100%	知識・理解	考査点（小テスト等）
考査のない科目	提出物等	パフォーマンス評価	40%	パフォーマンス評価	100%	パフォーマンス評価	パフォーマンス評価
	考査点	60%	100%	100%	100%	100%	

観点別評価は上記を基準とし、詳細は、各教科・科目の特性と実情に応じて教科会で決定することとした。パフォーマンス評価では、生徒にあらかじめルーブリックを提示して到達目標を明確にし、評価の透明性を保つようになっている。

\*学校資料を基に編集部で作成。

度」を重視している点にある。成績評価は1000点法とし、「関心・意欲・態度」に40点を割りあて、残りの3観点を各20点とすることを基本とした（図1）。授業に取り組み姿勢を公正に評価することで、生徒の学習意欲を向上させるねらいがあると、桐生裕三校長は説明する。

「学習に苦手意識を持つ生徒に、『関心や意欲を持つとう』と言っただけでは無理があります。しかし、教師の話を実践に聞いたり、クラスメートと協力しながらグループ活動に取り組

んだりするといった『態度』は、心がけ次第でよい方向に変えられます。『態度』の評価を重視することで、学びへの意欲が高まるこ

図2 「授業態度(関心・意欲・態度)」の評価規準

伸ばしたい力: 今すべきことを考え、課題に懸命に取り組む姿勢

A	Bの規準を達成していて、それに加え <ul style="list-style-type: none"> <li>積極的に発言することができる。</li> <li>質問したり、調べたりして難しい発問に諦めず取り組むことができる。</li> <li>工夫してノートやプリントを書くことができる。</li> <li>問題解決のため、積極的に周囲とかかわることができる。</li> </ul>
B	<ul style="list-style-type: none"> <li>先生やほかの生徒の話静静地に聞くことができる。</li> <li>必要なことをノートに書くことができる。</li> <li>聞かれたことに真剣に向き合うことができる。</li> </ul>
C	Bの規準を達成できておらず、授業に対する集中力に欠ける場面が多い。
D	Cに加え、 <ul style="list-style-type: none"> <li>授業の準備をしてこない、ずっと居眠りをしているなど、意欲が感じられない。</li> <li>授業中に度々注意され、授業が進む妨げになる。</li> </ul>

欠席はE評価となる。\*学校資料を基に編集部で作成。

図3 資料の読み取り活動の評価規準

伸ばしたい力: 資料を読み取る技能  
 評価対象: 資料を正しく読み取る

A	資料から発問の解答に関連する事柄を、正確に読み取ることができる。
B	発問の解答にはつながっていないが、資料を正しく読み取ることができる。
C	正しく読み取ることができていないが、資料を読み取ろうと努力している。
D	諦めてしまって、資料を読み取ろうという努力が見られない。
E	授業欠課

\*学校資料を基に編集部で作成。

とを期待しました」

どの教師も、分かったという体験を通じて生徒の関心や意欲を引き出そうと、丁寧な説明に努め、学力に課題のある生徒にも分かりやすい授業を実践することを意識してきた。しかし、学習への苦手意識が強いため、初めから理解することを諦めてしまっている生徒がいたのが実情だった。そこで、評価の基準を明確にし、その基準に従って授業に臨めば、よい評価が得られ、やがて「真剣に授業を受けてみたら、自分でも理解できる」と気づき、学びに対する関心や意欲が高まっていくことをねらいとした。

観点別評価を適切に行うために導入したが、ルーブリックを使ったパフォーマンス評価だ。ペーパーテストでは点数化しにくい資質・能力を測る際に、教師によって評価の軸にずれが生じないように評価基準を設け、生徒にも到達目標が分かるようにその基準を示した。

「関心・意欲・態度」では、全教科・科目共通の「授業態度(関心・意欲・態度)の評価規準」(図2)を、教務課主導で作成。さらに、教科・科目ごとに、グループワークなどでパフォーマンス評価を行う際には、必ずルーブリックを作成し、生徒に「示すこと」にした。例えば、「地理A」の授業で行う資料の読み取りでは、図3の評価規準を用いる。教務課の秋山拓也先生は、その手応えを次のように語る。

「授業において、何をどこまでできるようになれば評価されるのかといった基準が明確

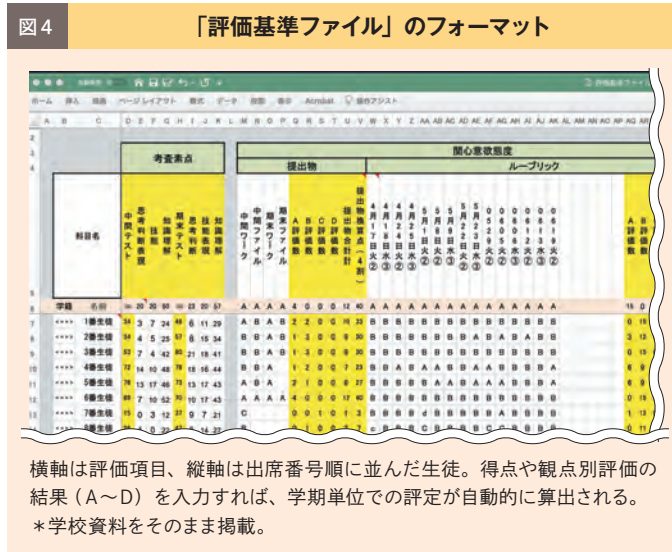
に示されたことで、それを目標として頑張れる生徒が増えました。私たちもルーブリックを生徒と一緒に見ながら、「この部分ができるようになったら、評価もBになるよ」といったように、より具体的に行動指針を示しながら声をかけられるようになりました」

### 評価方法を変更した意図をすべての教師が繰り返し伝える

新たな評価方法においては、例えば、「関心・意欲・態度」のパフォーマンス評価の導入により、教師の負担が大きくなる懸念された。そこで、教務課は、表計算ソフトで「評価基準ファイル」(図4)を作成した。それは、生徒一人ひとりの到達度を打ち込めば、学期単位での評定が自動的に算出されるシステムだ。

「新しい評価方法の趣旨に賛同はできても、評価する作業を負担に感じている、適切な評価はできません。集計作業を効率的に行えるよう、定期考査もパフォーマンス評価も、得点や結果を入力すれば、最終的な評定が自動的に算出される仕組みとしました。これで、一度の入力は数分程度の作業で済むようにし、また、毎週の教科会で入力状況を確認することにしました」(前田先生)

生徒にも、新しい評価方法の周知と浸透を図った。年度初めのホームルームで、担任から、授業中の態度やグループワークなどの取り組み状況を重視した評価を行うことを伝え、各教科・



科目でも、初回の授業で同様の説明をした。すべての教師が、同じ内容を生徒に伝えることで、徹底的に意識づけを図った。加えて、教室の黒板の横には、常に生徒の目につくように、「授業態度（関心・意欲・態度）の評価規準」を貼った。

『なぜ、評価方法を変えたのか』と質問してきた生徒には、『君たちが社会に出た時に必要となる力を育成するためだよ』と答えました。本校の生徒の大半は、卒業後すぐに就職します。授業中に教師の話をしっかり聞く姿勢や、グループワークでクラスメートと協力しながら問題解決に取り組む態度などは、社会に出てからも求められます。生徒には、

『そうした態度は、基礎学力と同じぐらい大切だよ』と、発信し続けました」（中巳出先生）

**「変化の年」と勝負をかけ、少人数制クラスを増やす**

新しい評価方法を導入するとともに、少人数制授業を行う教科・科目では、従来の3クラスを4クラスに増やした。1クラスあたりの生徒数を減らしたことで、教師は生徒一人ひとりの学びの様子をより丁寧に見取ることが可能になり、多くの生徒が落ち着いて授業に取り組むようになった。

「クラス数を増やしたことで、教師1人あたりの担当授業時数は増えましたが、授業の雰囲気をよくしたいといった思いを、教師は皆、抱いていました。そのため、学級数の変更も、快く賛同してくれました」（中巳出先生）

「新しい評価方法を導入する18年度は、学校と生徒を变える勝負の年になる」と改革を推進した結果、年度内で多くの生徒の授業に臨む姿勢が変わった。「努力しても無駄」と諦めていた生徒たちが、「テストの得点はよくないけれど、授業中の『態度』が評価されるのであれば、何とかなりそうだな。それに社会に出た時にも評価されることであるのなら、頑張ろう」と、授業態度を意識するようになったのだ。

「保護者から、『これまででは、「何でこんな成績なの?」としか子どもに言えませんでしたが、今は、〇〇をよくすれば成績が上がる

から頑張つて」と言えます』と、うれしそうに言われることもあります。評価の対象に態度を加え、評価の基準を明確にしたことで、成績について、保護者も生徒に声をかけやすくなったのだと思います」（中巳出先生）

**自分の行動を振り返り、自己分析できる力を育みたい**

同校の観点別評価は、今年度で3年目を迎えた。生徒には、ルーブリックで示された目標に向かって努力する力は確実についてきた。ただ、それによって自分がどのように成長し、今後の課題が何かを自身で分析して次の目標を設定する力は、まだ不足している。そこで20年度から、生徒にアンケート調査を実施し、それを自身の行動や成長についての振り返りの機会にさせる取り組みを行うことを検討している。

桐生校長は、今後の展望を次のように語る。

「本校では、『関心・意欲・態度』については、指導方法や評価方法が確立され、一定の成果も出ています。次は、『思考力・判断力・表現力』を伸ばす段階にあると考えています。その3つの資質・能力を、生徒にどのレベルまで育成することを目指すのか。その評価をどのようにルーブリックに落とし込んでいくのか。そして、3つの資質・能力を育成するために不可欠となる教師の授業力の向上をどう図っていくのか。それらの課題に今後は取り組んでいきます」

校内の教師同士による対話を通して、自校の指導ツールの改良を図る本コーナー。  
今号は、富山県・私立片山学園中学校・高校が、文理選択の仕上げとして活用している  
文理宣言シートについて、1年前に同シートを使用した2年生とともに検討した。

改良！指導ツール

ビフォー  
アフター

生徒と  
ともに！

# Before

STEP 3 「意思」を言葉にする

\*ボールペンで記入しましょう。

1. 選択するほうを○で囲んでください。

2. 1を選択する理由を詳細に書いてください。

3. 理科、社会の選択について、選択するほうを○で囲んでください。

文系	社会	世界史	地理
理系	社会	日本史	地理
	理科	物理	生物

\*文系は全員日本史履修、理系は全員化学・化学基礎履修です。

4. 志望学問領域を3つまで書いてください。

第1志望学問領域	
第2志望学問領域	
第3志望学問領域	

5. 上記文理選択についての保護者の方からの応援メッセージ

教員チェック欄	学級担任	学年担任	提出期限 11/11(月)
---------	------	------	------------------

STEP1 では自己理解  
に、STEP2 では学問  
研究などに生徒は取り  
組んだ。その上で  
STEP3 である本シー  
トに取り組む

## ねらい

文理選択に向けて、自己分析や適性診断の結果を踏まえた学問研究に取り組んできた1年生が、総仕上げとして、文理選択の理由を文章にまとめて担任に伝えることで、主体的な進路選択の第一歩を踏み出し、学習へのモチベーションを高めることがねらい。

## 課題

- 1 文理選択に向けて深めてきた自己理解、学問研究の成果を踏まえて、文理選択の理由を説得力のある文章にまとめさせたい。
- 2 文理選択を通して、希望進路実現のために今後の高校生活で力を入れるべきことを考えさせたい。

## 改良会議実施校

### 富山県・私立 片山学園中学校・高校



教頭、進路指導部長

**森内梨絵**

もりうち・リエ

教職歴11年。同校に赴任して12年目。



教務主任、数学科主任

**山形武司**

やまがた・たけし

教職歴11年。同校に赴任して12年目。



進路指導部、理科主任

**下条丈士**

げじょう・たけし

教職歴10年。同校に赴任して11年目。



2年生理系クラス

**加藤希実**

かとう・のぞみ

医療関係の職業に興味があり、理系を選択。



2年生文系クラス

**永井雄一朗**

ながい・ゆういちろう

吹奏楽部所属。法学系統の学部を志望し、文系を選択。

### 富山県・私立片山学園中学校・高校

◎「孝・恩・徳」を教育理念に掲げる富山県初の中高一貫校。中高6年間に4期に分け、それぞれの到達目標を設定し、第1志望大学合格のための学力・体力・人間力を養う。主体的な学びを重視するアクティブ・ラーニングを、全学年・全教科で実践。2021年4月に、探究活動を主軸とした「国際科学探究コース」を新設。

◎設立 2005(平成17)年

◎形態 全日制/普通科/共学

◎生徒数 1学年約100人

◎2020年度入試合格実績(現浪計) 国公立大は、北海道大、東北大、東京大、名古屋大、京都大、大阪大などに49人が合格。私立大は、慶應義塾大、上智大、東京理科大、早稲田大、同志社大などに延べ262人が合格。

◎URL <https://www.katayamagakuen.jp/>

# 1年生 文理宣言シート



文理どちらを選んだのかを聞く前に、そこに至るまでに追究した「自分」を書くようにしたことで、シートに取り組む生徒の気持ちが大きく変わりそうです。2年生や3年生になった後も、学部・学科や志望校を考える際になどに、生徒が見返せるものになるとよいですね。



自己理解、学問研究、そして文理宣言と、文理選択の流れは円滑だと思っていましたが、丁寧に補足説明しなければ、それらが連動していることに生徒は気づかないシートになっていたことがわかりました。生徒との対話を通して、自分の思い込みから抜け出すことができました。



文理宣言シートに至るまでに考えてきたことを、生徒が整理しやすくなったと思います。これまでは、生徒が文理を選択した理由を「書けない」点ばかりに目が向いていましたが、書くための材料を整理することができるシートになっていなかったのだと気がつきました。



学校でプリントを受け取っても、何が目的なのかを深く考えないまま取り組むことが多かったんです。でも今回、先生方のお話を聞いて、この宣言シートの意義がきちんと理解できました。何かに取り組む際には、その目的や意義を理解しようと努める姿勢を大事にしたいと思いました。



この宣言シートに限らず、先生方には、私たち生徒の「主観」をどんどん聞いていただきたいと思っています。自分の考えであれば、あたり障りのないことを適当に書いてやり過ごすことはできません。そうした機会を通じて、私たちは自分の信念、ポリシーに気づいていくのだと思います。

どのような対話を通じて改良できたのかは、次ページで!!



## After

### STEP3 「これからの自分」を言葉にしよう

A B Cの視点から「自分」について考えて、文理を宣言しよう

#### A これまでの自分

★STEP1で分かった自分の好きなことや特技、長所、性格、大切にしている価値観などの中から、「これからの自分」を考える上で重要なものを書き出そう。

#### B 未来の自分

★STEP2で分かった適性のある仕事と関連する学問領域、また、適性のある学問などの中から、「これからの自分」を考える上で重要なものを書き出そう。

それまでに取り組んできたSTEP1、STEP2の内容を踏まえて、文理選択に必要な事柄を振り返るためのスペースを設けた

#### C 自分の現状

★得意教科や苦手教科、保護者の希望や友人の意見など、「これからの自分」を考える上で重要なものを書き出そう。

A、B以外にも文理選択に影響を及ぼす得意教科や苦手教科、保護者の意向などを整理できるように、「自分の現状」の欄を設けた

#### A B Cを踏まえて、「これからの自分」について書こう

★今後の高校生活をどう過ごしたいか・どう過ごすべきか、A B Cで追究した自分のことを踏まえて書いてみよう。教科・科目や学校行事など、具体的に頑張りたいことがあればそれを交えて書いてみよう。

「これからの自分」の第一歩として私は、 **文系** ・ **理系** を選びます

※どちらかを○で囲む

### 改良ポイント

- STEP3の文理宣言シート作成に至るまでに取り組んだ自己理解、学問研究を振り返るスペースを設ける。
- 自己理解や学問研究以外に、文理選択に影響を及ぼす要素を整理する欄も設けることで、生徒の思いを棚卸しさせやすくする。
- 文理選択以降の「これからの自分」について語らせた上で、最後に文系・理系を宣言させる。



このマークのある図版は、加工可能なデータとして、ベネッセ教育総合研究所のウェブサイト (<https://berd.benesse.jp>) からダウンロードできます。「HOME → 教育情報 → 高校向け → 生徒指導・進路指導ツール集」をご覧ください。

## 実録

## 改良会議

先生と生徒の  
対話のダイジェストツール使用者である生徒とともに  
文理選択に影響を与える要素を  
洗い出し、改良点を明確化

## 教師が感じている課題点を生徒に確認

**河野** 先生方だけで行ってきた本コーナーの改良会議に、初めて生徒にも参加してもらいました。実際に指導ツールを使用した生徒とともに、その改良のための議論を行うという試みです。まずは、先生方から「文理宣言シート」の課題点についてご説明いただけますか。

**森内** STEP1で自己理解、STEP2で学問研究に取り組んできた生徒が、STEP3として文理の選択結果とその理由を文章で表明するのが本シートです。STEP1、2に比べて、STEP3に取り組む生徒のモチベーションは低く、文理選択の理由を、自身の経験や希望進路にひもづけながら論理的に表現できない生徒が少なからずいるのが現状です。そのため、担任によるシートの添削が必要となり、生徒、教師双方が負担を感じるケースも見られます。

**山形** 過去の経験を振り返り、自分が大切にしている価値観に立ち返って文理選択をした過程を書く生徒は少なく、選択の理由を箇条書きす

るだけの生徒もいます。3年次の志望理由書の作成などを考えると、文理選択の理由も文章で表現できるようになってほしいと思います。

**下条** 「文理宣言シート」に取り組むことで、その後の高校生活、そして大学入試に向けてやる気を高めてもらいたいのですが、進路に対する熱意を感じさせる宣言はまだ多くありません。ですが、面談などの場では多くの生徒は自分の思いを話してくれます。

**河野** では、生徒の2人に、実際に1年前にこのシートにどのように取り組んだのかを聞いてみましょう。

**永井(生徒)** 僕は、学校の委員会活動で役職に就き、活動する中で、組織のあり方を勉強したいと思うようになり、文系を選びました。でも、文理宣言シートで、そうした自分の経験を交えて文系を選んだ理由を書けたかと聞かれると、書けていなかったように思います。

**加藤(生徒)** 私は文系科目が得意で、適性診断でも文系向きと診断されました。でも、医療分野の仕事に関心があり、本当にぎりぎりまで悩

## 改良会議ファシリテーター

VIEW21編集部  
高大領域担当責任者  
**河野仙一**  
こうの・せんいち

今回、生徒から意見を聞いたことで、ツールの改良の方向性が明確化されました。生徒とともに教育活動の改善について考えることは、今後、多くの学校が取り組む価値のあるものだと確信しました。

んで理系を選びましたが、そうした葛藤までは文理宣言シートには書きませんでした。

**森内** 自身の経験からの気づきや悩みに向き合う中で葛藤は、進路選択の大切なプロセスです。生徒がそれを率直に書き留められるシートに改良したいです。自己理解や学問研究で深めたことは、シートを書く際に振り返りましたか。

**永井(生徒)** 今は、先生方の話を聞いて文理宣言シートとそれまでの取り組みとのつながりが理解できましたが、シートを書いた時には、それまでの取り組みを踏まえようという意識は持っていなかったと思います。シートは、最初に文・理どちらかを選ぶことから始まっていますが、まず、自己理解や学問研究を通して考えたことを振り返ってから、最後に文理宣言をする流れがよいかもしれません。

**山形** 自己理解、学問研究での気づきを整理す

## 改良会議を振り返って



るのはもちろん、自分の過去の経験、さらには保護者の希望や友人の意見など、広い視野で文理選択に向き合ってほしいです。そうして、理想の将来像や成功体験だけでなく、現実の悩みや葛藤も含めて文理選択に影響を与えている要素を言葉にした上で、文理宣言をしていることを生徒が自覚できるシートにしたいです。

**永井（生徒）** 私も、部活動の活動目標を決める際に、記述式のアンケートを作成したことがあります。その回答を見て、「意図が伝わっていない」と反省した経験があります。質問の目的や意図が分からないと、回答する側は答えを書くことが難しいのです。私たち生徒に読解力、想像力が不足していることも一因ですが、シート上の「選択する理由を詳細に書いてください」という一文が、私たち生徒にとっては何を求めているのが理解しづらかったのかもしれない。

### 目的を見直すことで指導が変わる

**下条** 文理選択の理由を第三者も納得する文章にして書けるように、担任の先生が添削も行ってききましたが、文章化という作業をどう受け止めていましたか。

**加藤（生徒）** 書くことで改めて今の自分に向き合ったり、大切にしていた思いに気づいたりすることはよくあります。文理選択は進路選択の大切な第一歩ですから、そこで考えたことを文章で残しておくことは必要だと思います。

**森内** 2人の話を聞いて、しっかりとした文章で文理選択の理由を書くということ以上に、今の自分の思いを自分の言葉で書くということが、文理宣言シートの目的であるべきだと気づきました。文章の完成度を高めるための添削に時間をかけるのではなく、生徒の思いをくみ取るこ

ツールを作成した教師の認識とそれを使った生徒の認識の差が分かったこと、生徒と対話する中で教師が想定していたゴールさえも見直す経験ができたことが、有意義でした。

私の想像以上に生徒は深く考え、そして私と違う考えを持っていることに感動しました。生徒と一緒に考えることで、1つのシートから大きな気づきを得られるのだと驚きました。

生徒がどのような思いでツールを使っていたのか、生徒自身の言葉で聞くまでは気づかなかったことがたくさんありました。今後も生徒の声に耳を傾けていきたいです。

### 改良したいのに、どうすべきか分からない……

#### 指導ツールを募集しています！

「改良！ 指導ツール ビフォーアフター」では、取材にご協力いただける先生及び取材で検討させていただく「指導ツール」を募集しています。「自校で長年使っているツールを見直したい」「ツールのより効果的な活用法を検討したい」といった、課題意識をお持ちの学校のご応募をお待ちしております。

〈個人情報の取り扱いについて〉をご確認いただき、必要事項①～④をご入力の上、指導ツールを添付して下記のe-mailアドレスにご送信ください。

\*送信前に一度、生徒情報が削除されているかご確認をお願いいたします

- ①学校名・お名前 ②分掌・ご教職歴 ③ツールの内容(目的・活用時期・活用方法)  
④ツールに対する課題意識、改善要望 [view21\\_since-1975@mail.benesse.co.jp](mailto:view21_since-1975@mail.benesse.co.jp)

〈個人情報の取り扱いについて〉 この「改良！ 指導ツール ビフォーアフター」のツール募集でご提供いただく個人情報は、今後の企画を検討する目的で利用いたします。お客様の意思によりご提供いただけない部分がある場合、手続き・サービス等に支障が生じることがあります。また、商品発送等で個人情報の取り扱いを業務委託しますが、厳重に委託先を管理・指導します。個人情報に関するお問い合わせは、個人情報お問い合わせ窓口（0120-924721、通話料無料、年末年始を除く、9時～21時）にて承ります。(株)ベネッセコーポレーション CPO（個人情報保護最高責任者）  
上記をご承諾くださる方はご送信ください。

とに、より時間をかけたいと思います。

**河野** 文理宣言シートの構成が整理されただけでなく、シートのも見直すことができたことで、教師は文理宣言シートをどのように活用すべきかが明らかになりました。教育活動の目的を丁寧問い直してみることで、何に時間をかけるべきで、何を効率化すればよいか明確になるのだと分かりました。

トレンド・ワード

# スペシヤルニーズ

生徒の学びや進路選択、そしてその後の人生に影響を与えるような革新的な技術や価値観を「社会のトレンド」として、「暮らす」「学ぶ」「働く」の観点から解説する本コーナー。今回は「スペシヤルニーズ」を取り上げる。それは、発達障害を始めとする発達の遅れや身体の障害などによって、様々な支援を必要とする状態を表す言葉だが、個別最適化やダイバーシティ（多様性）といった、未来社会を語る上でも重要なキーワードとなっている。発達障害のある高校生のためのサポートセンターで普通教育を行う明蓬館高校校長・理事長の日野公三先生（\*1）に話を聞いた。

サマリー

障害を「ニーズ」として受け止め、  
 それぞれの能力を最大限発揮できる支援を行う

障害の特性を理解して  
 個々の学びをサポートする

近年、様々なメディアで「発達障害」がテーマとして取り上げられることが多い。当事者やその家族の声を聞く機会も増え、発達障害、特に「自閉症スペクトラム障害（ASD）」「注意欠陥・多動性障害（ADHD）」「学習障害（L

D）」に対する社会の理解も進んでいる（図1）。2012年の文部科学省の調査（\*2）では、小・中学校の通常学級に在籍する児童・生徒のうち、6.5%に発達障害がある可能性が示されており、日本の教育を考える上での大きなテーマとなっている。

発達障害がある子どもを、「一人ひとりに合った支援、つまり、D）」に対する社会の理解も進んでいる（図1）。2012年の文部科学省の調査（\*2）では、小・中学校の通常学級に在籍する児童・生徒のうち、6.5%に発達障害がある可能性が示されており、日本の教育を考える上での大きなテーマとなっている。

スペシヤルニーズの持ち主」と捉えて、それぞれの得意・不得意に応じた学習環境を整え、豊かな学びを実現しようといった動きも生まれている。

「以前は、発達障害は本人の努力不足や保護者の育て方が原因で起こる障害だといった間違った認識もありました。そのため、発達障害のある子どもたちは、『やれ

図1 発達障害の種類と障害特性

自閉症 スペクトラム 障害	対人コミュニケーションを苦手とし、特定の物事へのこだわり（パターン化した行動、興味・関心の偏り）、言葉の遅れなどの特性を持つ。知的な遅れを伴うケースもあれば、通常と変わらないケースもある。
注意欠陥・ 多動性障害	不注意（集中できない）、多動・多弁（じっとしてられない）、衝動的に行動する（考えるよりも先に動く）といった行動特性を持つ。自己コントロールが苦手。
学習障害	読む、書く、計算するなどの能力のうち、特定の能力において、その習得と使用の両面で極端な苦手を抱える。特定の高次脳機能の障害のため、一生懸命学習してもその効果が表れない。

\* 学校資料を基に編集部で作成。

解説者  
 内閣府認定特区高等学校  
 明蓬館高校  
 校長・理事長  
**日野公三**  
 ひのこうぞう  
 著書に『発達障害の子どものための進路と多様な可能性』（WAVE出版）。



\* 1 明蓬館高校の授業の様子は、本誌 2019年8月号 P.46-47「高校教師 study-tour」にも掲載しています。  
 \* 2 文部科学省初等中等教育局特別支援教育課「通常の学級に在籍する発達障害の可能性のある特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する調査結果について」

図2 学校現場で表れる発達の特徴

学習面で表れる特性

- 適切な速さで話すことが難しい
- 物事の因果関係を理解するのが難しい
- 指示の理解が難しい など

行動面で表れる特性

- 気が散りやすい
- 着席中も手足を動かし、じっとしていられない など

対人関係で表れる特性

- 共感性が乏しい
- 比喩やたとえが分からず、言葉通りに受け取ってしまう
- 対人関係をうまく築けない など

\* 学校資料を基に編集部で作成。

ばできる』といった言葉に苦しみ続けられ、自己肯定感の低下によって、自傷行為や引きこもりといった2次障害を起こしてしまいうケースも多くありました。しかし近年、発達障害は脳機能の障害による発達の偏りであることが認知されるようになると、本人の発達の特性を踏まえて、よりよい社会生活を送れるようにサポートする考え方が広まってきました」

一人ひとりがかけがえのない存在として力を発揮する社会へ

人の発達の特性には凸凹がある。例えば、児童向けの知能検査WISC検査では、言語的な情報

を理解する能力、非言語的な情報を基に推論する力、情報を記憶にとどめてそれを操作する力、順序よく処理・識別する力が数値化されるが、多くの子どもに得意な領域と不得意な領域が存在する。

「誰にも発達の凸凹があります。文字の読み書きが苦手な生徒、音声による指示の理解が苦手な生徒など、周囲がそれぞれの生徒の特性に気づいた時、WISCのような検査につなぎ、科学的な診断を得ることで、本人の努力不足などではないことが明らかになります。その上で、読み書きが苦手な生徒のために音声の読み上げソフトを使ったり、学習に集中しやす

いように教室の掲示物は最小限にとどめたりするなど、学習環境を整えることで、一人ひとりの能力や適性に応じた学びが実現します(図2)」

現代は、構成員の多様性を保障し、強く健全な組織をつくろうといったダイバーシティの視点が企業などで求められている。人種や性別、年齢、ライフスタイル、学習スタイルなどにこだわらずに多様な人材を生かし、それぞれの能力を最大限に発揮させようという考えは、障害という診断を持った人だけが対象ではない。個々人に必要な合理的配慮に基づいて公正な教育の実現を目指すことは、すべての人の幸福につながると考えられる。

現状の教育環境には適応しないが、特定の領域で突出した力を発揮する生徒もいる。事実、発達障害があっても、研究者や芸術家として第一線で活躍する人も少なくない。

「多数の人が適応している学び方が合わないからといって、学びそのものできないと考えるのは間違っています。人とは違った道

だけれど、それが自分に合った道で、自分の目指す方向に向かって進んでいるのであれば、それは学びからドロップアウトしたのではなく、スピンアウトしたにすぎないと私は思います」

かつて「学習障害」は、英語圏では「Learning Disorder」や「Learning Disability」など、「障害」を示す言葉を使って表現されていた。しかし、近年は「Learning Differences」という言葉が一般的になり、学び方における「違い」であるという認識が広まりつつある。加齢や病気などで心身の状態が変化する中で、人はいつかは「スペシャルニーズ」の持ち主となる。少子高齢化が進む社会で、一人一人ひとりを大きな可能性を持ったかけがえのない存在として考えることで、社会のあるべき姿も今とは違って見えてくるのではないだろうか。

● 次ページからは、「学ぶ」「働く」「暮らす」の3つの切り口で、「スペシャルニーズ」について、現状と課題を見ていく。

# 学ぶ

## 学習・評価方法が多様化し、個別最適な学びへ

### 一人ひとりに合った 学習スタイルへ

全国広域通信制高校である明蓬館高校は、発達障害の支援スキルを持った支援員、臨床心理士などの相談員、そして各教科の教員がチームとなって発達障害のある生徒を支援するSNEC（スペシャルニーズ・エデュケーションセンター）を全国に設置している。生徒は、パソコンやタブレットを活用



写真1 学習に没頭しやすいように配慮された机。話し合いが必要な時、生徒はオープンスペースに移動する。

用して、興味・関心に合った授業をオンラインで視聴し、自分のペースで学習を進める（写真1）。成績評価はペーパーテストに加えて、レポートや制作物などの学習成果物などを通じて多面的に行われる。

発達特性に合った学習環境を整えることで、大きく成長する生徒が少なくない。例えば、短期記憶が苦手な、教師が板書する内容をノートに自筆で書き写すことが困難だったある生徒は、タブレットのカメラ機能を使って板書を撮影することで授業に集中できるようになった。学びの意欲も高まり、自ら探究的な学習に取り組むようになり、AO入試で難関大学合格を目指した生徒もいた。

「近年、全日制の高校においても、ICTを活用した授業が増え、成績評価も、ペーパーテスト中心から多様な活動を対象とする多面的・総合的な評価に変わりつつあ

### 図3 スペシャルニーズを持つ子どもへの支援のポイント

- 1 教職員が発達障害の正しい診断名と診断基準、特性について理解する
- 2 教職員がネガティブな言葉、態度を安易に用いず、ポジティブな言葉、態度を意図的に、しかし自然に用いる
- 3 学校内にアセスメント体制がある。医療機関との緊密な連携体制がある
- 4 生徒数に見合った、臨床心理士や特別支援教育の学習支援者、精神保健福祉の有資格者がいる
- 5 個別の教育支援計画を運用する
- 6 保護者への相談支援を行う
- 7 卒業後の進学、就労における継続的な支援に役立つ、個別の教育支援計画と支援実績を蓄積する
- 8 紙のプリントを極力少なくし、多様なデバイス（PC、タブレット、スマホなど）を使ったeラーニングで、課題レポートに取り組めるようにする
- 9 課題レポートについては即時の採点とフィードバックを行う
- 10 成績評価を制限時間つきの一斉テストに依存しない。多様な成果物（ポートフォリオ）、多様な評価軸で評価する
- 11 生徒がWebベースで学びやすい認証ページ（学習支援システム）および生徒管理システムを運用する
- 12 校長あるいは副校長が議長を務め、校内委員会、ケース会議を定期的に行う
- 13 就労移行支援事業所からの情報収集を行う
- 14 登校時に落ち着いて学習に取り組めるブース環境を用意する
- 15 学習障害の個別的なニーズに沿った教材および補助教材を提供する体制がある

\* 学校資料を基に編集部で作成。

ります。不得意な領域を持つ場合に適切な診断を行い、特性に合った支援をすることで力を発揮する生徒は、どの学校にもいると思います。生徒が集う学校という場で、一人ひとりの生徒の特性に合わせてカスタマイズされた学びを提供することができたなら、生徒にとっては、教科学習だけでなく他

### 生徒の多様な学びを保障する これからの学校の体制

個別最適化された学びは、ICTが普及すれば実現するものではない。一人ひとりの生徒の学びの特性や教室での困り事をキャッチ

する校内体制の充実が不可欠だ。  
図3は、発達障害がある生徒の個別最適な学びを支援するためのポイントを、明蓬館高校がまとめたものだ。個別最適化された学びを

## 働く

### それぞれの能力を生かして競争力を高める

コンサルティングやIT、製造業など、業種を問わず、世界有数の企業が、働く人たちの多様性を担保するダイバーシティ経営の努力を続けている。それは、企業の社会的責任からだけでなく、競争力を高めるために必要だと考えられている。性別、年齢、国籍、障害の有無、キャリアや働き方などにおいて多様な人材が、それぞれの能力を発揮することで、イノベーション（技術革新）が起り、価値創造につながるからだ。

AI（人工知能）の発達によって、今ある仕事の多くが今後自動化・機械化し、社会のあり方も大きく変わると予測されるが、そうした社会においては、企業には、

実現する未来の学校とは、ハード、ソフト両面でのような支援を行っていく学校であるかが、そこから見えてくるだろう。

目指すべき社会のあり方を模索しながら、そこで必要とされる新たな事業を展開していくことが求められる。

「発達障害のある人たちなど、社会に対して何らかのニーズを持つている人は、生活の中で見過ごされている困り事を察知する能力に長けています。そういった力を発揮する場を広げ、多様な人材が活躍することで、これからの社会が求めているものを見抜き、ビジネスを発展させていくことができるでしょう」

発達障害のある人を積極的に採用し、その能力を生かして業績を上げている企業もある。「先日訪問した大手ゲーム開発会

社には、データ作成や入力業務、画像加工など、コンピューターを使った作業を行う子会社がありましたが、そこで働く社員の大半は自閉症スペクトラム障害のある大卒者です。指示が曖昧にならないように工程管理表を明確に示し、集中して作業ができるよう、シュレッダーなどの大きな音が出るも

のは1か所に配置するなど、様々な配慮がなされていきました。自閉症スペクトラム障害のある人は、配慮が行き届いた環境であれば集中力を発揮して、1つの作業に没頭できるという特性を持っています。そういった強みを引き出すことで、すべての人が重要な戦力となるわけです」

## 暮らす

### 地域で共生するための配慮や支援を知る

高齢化が進む社会では、年齢を重ねる中で何らかの障害を持つことになる人の割合が増えている。日本においても、2025年には65歳以上の5人に1人が認知症を発症すると、厚生労働省が予測している（\*3）。誰にとっても暮らしやすい共生社会をつくることが一層求められている。

「発達障害のような、外見からは分かりにくい障害に対する社会の理解は、まだ十分ではありません。特に最近では、自然災害が発生した際、避難所などで障害のある

人たちが生活できず、行き場を失ってしまう事例が見られます」

熊本市は、2016年の熊本地震で、障害のある子どもがいる家庭が指定避難所に行くことができなかつた事例を踏まえ、市内の特別支援学校6校を、障害のある子どもとその家族に特化した「福祉子ども避難所」に指定した。

大規模な自然災害が各地で発生する中、地域にどのような人たちが暮らし、どのような支援や配慮を必要としているのか、お互いに理解できる仕組みが必要だ。

\* 3 厚生労働省「認知症施策推進総合戦略（新オレンジプラン）～認知症高齢者等にやさしい地域づくりに向けて～（概要）」

# SDGsの視点で見る大学の学び



SDGsの達成に向けた取り組みや研究の視点で、大学の学びを紹介する本コーナー。今号では、質の高い教育の普及を目指す目標4と、安全な水やトイレの確保を目指す目標6に関する大学の学びを取り上げる。まずは、それぞれの目標について、世界と日本の状況を解説した後、目標4は東京大学、目標6は金沢工業大学の学びを紹介する。



## 解説



**目標4**  
すべての人に包摂的かつ公正な質の高い教育を確保し、生涯学習の機会を促進する

### 世界の状況

#### 教育へのアクセスは改善 質・公正等の重視へと転換

2000年〜15年に実施された国連ミレニアム開発目標(\*1)では、初等教育の完全普及の達成が目標の1つとして掲げられました。先進国の支援により、学校に通っていない初等教育就学年齢の子どもの数がほぼ半減するなど(\*2)、発展途上国の基礎的な初等教育へのアクセス(機会)は、大きく改善しました。

そのため、SDGs設定時には、

教育を含めなくてもよいのではないかとといった意見も出ました。しかし、教育は、人材育成に加えて、研究や技術開発を行う上でも不可欠であり、そのほかのSDGsの目標をつなぐ役割を果たします。今後は、質・公正・包摂・生涯学習の視点がポイントになると考えています。

例えば、アフリカでは、初等教育の無償化によって、総就学率は上がりましたが、教室定員を上回る児童が入学し、教育の質が保たれていま

## 解説



**目標6**  
すべての人々の水と衛生の利用可能性と持続可能な管理を確保する

### 世界の状況

#### インフラ整備は進むが、 人口増加で状況悪化の懸念も

日本では「水と安全はタダ」と言われますが、世界に目を向けると、それは決して当然のことではありません。発展途上国では水道の普及が進まず、水たまりの泥水などを飲んでしんでいる地域も少なくありません。そうした不衛生な水は、下痢症などを引き起こし、乳幼児死亡率を高める要因にもなっています。

国連機関のUN-Waterによ

ると、世界の人口のうち、安全な飲料水を摂取できる人は71%、衛生的なトイレを使える人は45%です(\*1)。そのため、目標6では、すべての人が安全な水やトイレを利用できる社会の実現を目指しています。

水問題の解決が容易でないのは、水は偏在するものだからです。人口が多い地域に、必ずしも水源が存在するとは限りません。さらに、水質確保のための浄化施設などの整備が追いつかない地域もあります。

\*1 発展途上国における貧困問題の解決に向けて設定された国際目標。

\*2 国連ミレニアム開発目標報告(2015年調査)より。

せん。

公正という面では、移民や難民の子どもが就学機会を得られていない現状などがあります。多言語が用いられる国では、どの言語で教育を行うのが公正に直結する課題です。公用語や国際言語、多数派の言語を使うとしても、少数派への配慮が必要となるからです。

### 日本の状況

## 持続可能な社会づくりの担い手を育む教育を

日本では、目標4は基本的に達成しており、17の目標のうち、既に達成した数少ない目標の一つです。ただ、公正・包摂の視点から取り組むべき課題はあります。特別支援教育やインクルーシブ教育はその一

### 解説者



東京大学大学院  
教育学研究科  
准教授  
北村友人  
きたむら・ゆうこう

専門分野は、比較教育学、国際教育開発論、カリフォルニア大学博士課程修了。国連教育学文化機関（ユネスコ）勤務後、名古屋大学准教授、ジョージ・ワシントン大学研究員、上智大学准教授を経て、現職。

つです。特別な支援を必要とする子どもは年々増えており、特別支援学校の教師だけでなく、すべての教師が、教職課程の段階で特別支援教育をより深く学ぶ必要があります。加えて、在留外国人の教育機会の阻害や多様な性に関する配慮不足などの課題も挙げられます。

また、教育は17の目標の土台になるからこそ、目標4のターゲット7に掲げられた「持続可能な開発のための教育（以下、ESD）」（\*3）の普及・促進が重要です。02年の世界首脳会議で我が国が提唱したESDは、持続可能な社会づくりの担い手を育む教育であり、教科指導にも取り入れられるほか、キャリア教育などにも取り入れることができます。持続可能な社会の姿から逆算して自分がすべきことを考える、バックキャストイングの手法で、子どもが主体的に進路選択にかかわっていくような教育が、今後より求められることでしょう。

**P.60～61で、目標4の達成に向けた「東京大学」の学びを紹介します。**

発展途上国におけるインフラ整備

は、JICA（国際協力機構）など、各国の国際協力により進んでいます。しかし、今後は世界的な人口増加により、水問題が悪化するのではないかと懸念されています。生活用水だけではなく、食糧増産や産業発展のためにも大量の水が必要となり、今以上の水不足が起きると予想されています。複数の国に水源がまたがる国際河川の場合、水利権を巡る紛争が頻発することも危惧されています。

### 日本の状況

## 組織的な管理で、水資源をより効率的に活用

水が豊富な日本ですが、水問題は無関係というわけではありません。

### 解説者



金沢工業大学  
バイオ・化学部  
応用化学科 教授  
土佐光司  
とさ・みつし

専門分野は、環境化学、化学工学。東京大学工学部都市工学科卒業後、同大学大学院工学系研究科修士課程（都市工学）修了。麻布大学講師などを務めた後、1999年から金沢工業大学講師などを経て、現職。

日本が大量に輸入する食糧の生産には、多くの水が使われており、それは「バーチャル・ウォーター（仮想水）」という概念で知られています。日本は、仮想水の輸入という形で、世界の水不足を引き起こしているとも言えるのです。それゆえ、日本も水問題に対して当事者意識を持ち、世界中への援助を積極的に続けていく必要があるでしょう。

国内では、上下水道などのインフラは十分整っていますが、感染症対策や温暖化による藻類の増加が引き起こす水質悪化対策など、環境変化によって取り組むべき課題も変化します。上下水道の管理をITやAI、バイオテクノロジーなどを駆使して組織的に行い、水資源をより効率的に活用する社会への進化も求められています。それらの技術を世界に発信して、水問題の解決に向けてリーダーシップを発揮できる存在となっ

**P.62～63で、目標6の達成に向けた「金沢工業大学」の学びを紹介します。**

\* 3 Education for Sustainable Development の略。 \* 4 2017年調査より。



大学の学び

教育現場を理解する研究者を育成し、  
日本や世界の教育改善に貢献する  
東京大学大学院教育学研究科学校教育高度化専攻教育内容開発コース  
北村友人研究室

途上国支援、平和教育を  
通じて世界に貢献したい

東京大学大学院教育学研究科学校教育高度化専攻教育内容開発コース博士課程1年の須藤玲さんが、途上国の教育に関心を持ったのは、高校

私たちが紹介します



教育学研究科 学校教育高度化専攻 教育内容開発コース 博士課程1年  
須藤 玲  
すどう・れい

兵庫県・私立六甲学院中学校・高校卒業。上智大学総合人間科学部教育学科卒業。同大学院総合人間科学部教育学専攻修士課程修了。



教育学研究科 学校教育高度化専攻 教育内容開発コース 修士課程1年  
萩原 さつき  
はぎわら・さつき

神奈川県・私立公文国際学園中等部・高等部卒業。国際基督教大学教養学部卒業。

2年生の時だ。出身高校は奉仕活動の一環で、インドのハンセン病施設で暮らす子どもたちへの募金を毎月行っており、須藤さんはその子どもたちに直接会いに、同国を訪れた。「高校教師になりたいと考えていましたが、インドの貧困の状況を目のあたりにし、自分にできることはないかと考えるようになりました」そんな折、当時、上智大学総合人間科学部に在籍していた北村友人准教授の講演会に参加し、教育分野で途上国に貢献できることを知り、上智大学総合人間科学部教育学科に入学。その後、同大学院修士課程に進み、教育社会学を学んだ。

「経済や開発の面から途上国支援にかかわる人が多い中、私は教育の面から支援をしたいと考えました。そこで、より実践を重視した教育学を行う北村准教授の下で学ぼうと考え、東京大学大学院の博士課程に移りました」同コース修士課程1年の萩原さつきさんは、高校時代、ポルトガルに1年間留学した経験から、平和教育に興味を持った。「世界中から集まった留学生と一緒に学び、多様な価値観に触れることができました。帰国後、過激派組織イスラム国がポルトガルに勢力を拡大するという報道にショックを受け、世界の平和を目指すにはどうしたらよいか考え始めました」萩原さんは、平和研究を専攻できる国際基督教大学教養学部に入學。中学校の英語教育で平和教育を実践する卒業研究に取り組んだ。

「平和教育をより広い視野で学びたいと考えていたところ、平和教育を包含する『持続可能な開発のための教育（以下、ESD）』（目標4、16）を研究している北村研究室のことも知り、東京大学大学院に入學しました」

北村研究室のある東京大学では、学部1・2年次は、全員が教養学部  
に所属し、3年次から各学部に進む。  
教育学部は、3専修5コースに分か  
れており、専門科目を履修し、4年  
次から研究室に所属する。北村准教  
授が学部で担当するのは、教育社会  
科学専修の教育実践・政策学コース  
で、卒業論文の指導も行っている。  
同大学院教育学研究科には、2専  
攻10コースがあり、北村研究室は、

実際の授業を分析し、  
よりよい教育を追究する

この学びに関する  
他のSDGsの目標





写真1 北村研究室には、留学生も在籍。萩原さんは、研究の手始めに、フィリピン人の留学生とともに論文検索システムを用いて国内外のESDに関する論文を調べ、キーワードを分析している。

学校教育高度化専攻教育内容開発コースに設置されている。

教育現場の実践から学ぶことが、学校教育の質向上を考える際に重要であると捉え、「授業の事例研究」と「授業の実地研究」の2つの授業を同コースの核としている。

『授業の事例研究』では、生徒のノート、教師と生徒のやり取りなど、自分なりの視点で授業を分析し、皆で議論します。今年度は、オンラインで行いましたが、議論は尽きることなく、私も授業の見方が深まりました」（須藤さん）

「授業の実地研究」では、学生が実際に10時間程度、授業を観察し、教室の中の現実を理解する。

北村研究室は、教育内容開発コースの人文社会教育分野を担い、「目

標4 質の高い教育をみんなに」を中心とした研究を行う。

ゼミ生がテーマとするのは、各国の教育の思想・政策・制度・実践だ。ゼミ生同士の対話を重視し、院生と学部生と一緒に議論を深めている（写真1）。

### 自らの課題意識を深め、国内外に質の高い教育を

萩原さんは、目標4のターゲット7に掲げられているESDの普及について研究している。学習指導要領にも「持続可能な社会の創り手」の育成が目標に掲げられているが、日本の中等教育では、ESDがまだ浸透していないのが現状だ。

「ESDは、『総合的な学習の時間』など、教科外で学習するという意識が強いようです。ただ、ESDとは、他者を思いやる気持ちを育てる教育なども含まれており、教科の中でも実践できます。全国の学校がESDを実践できるよう、学校を対象とした調査を行い、課題を明らかにしたいと思っています」（萩原さん）

須藤さんは、学部時代から東ティモール<sup>1</sup>の教育を研究している（写真



写真2 大学2年生の時から計4回、調査のため東ティモールを訪問。現在は渡航できないため、他国での多言語教育の実践に関する先行文献の研究を行っている。

2)。同国は、アジアでも最貧困の国の1つで、教育環境の整備が十分ではない。歴史的な背景もあり、多くの言語が使用されているため、学校で教師がどの言語を使って教えるべきかなどの課題が存在している。

「母語を基礎とした多言語教育がいくつかの地域で行われています。その実践例を取り上げ、子ども・保護者・地域社会の様子を、国内の複数の地域間で比較しようと考えています。回国全土で一定の質が担保された教育を実施する（目標5、10、16）のが自分の使命だと考え、研究に取り組んでいます」（須藤さん）

卒業後は、2人とも研究者の道に意欲を入れた。須藤さんは国際連合など、国際機関への就職を、萩原さんは教材製作を行う企業への就職を検討している。

## 学びとSDGs

学術的知見と教育現場の実務を学び、2つをつなぐ人材に



東京大学大学院  
教育学研究科准教授  
北村友人  
きたむら・ゆうと

私の研究室の主な研究テーマは、教育における公共性の問題です。学術的な知見と教育現場における実務の双方を学び、その2つをつなぐ人材の育成を目指しています。

須藤さんと萩原さんは、研究テーマを実体験から導きましたが、研究を深めるためには、自分の関心が、どのように社会の問題に結びついているのかを考えることが大切です。

そして、問題の解決策を考えるためには、実践知から学ぶことが有益です。研究室では、カンボジアなどの途上国に赴き、調査・分析を行うフィールドワークを上智大学と合同で行っています。また、研究者や卒業生も参加する研究会を開催しています。多様な人と学び合う中で、自らの学びを掘り下げてほしいと思っています。

高校生には、探究的な学びに積極的に取り組んでほしいです。複数の新聞を読み比べたり、海外の通信社のウェブサイトを閲覧したりして、情報収集を行うことで、探究の土台となる「知の基礎体力」を身につけることは、大学の学びの基礎にもなります。

この学びに  
関する  
SDGsの  
目標



## 大学の学び

# 水処理などを効率化する新技術を開発し、 衛生的で安心な水環境を実現する

## 金沢工業大学 バイオ・化学部 応用化学科 土佐研究室

### 応用範囲が幅広い 実用的な化学技術を習得

金沢工業大学バイオ・化学部応用化学科では、生活や産業に結びつく化学技術を実践的に学ぶ。同技術の応用範囲は、洗剤や化粧品といった日用品を始め、水処理（\*1）、自然界で分解されるプラスチック、太陽電池、蓄電池などと、幅広い。

### 私たちが紹介します



バイオ・化学部  
応用化学科4年  
日影 錬  
ひかげ・れん  
岐阜県立吉城高校卒業。



バイオ・化学部  
応用化学科4年  
小塚 遥斗  
こつか・はると  
栃木県立宇都宮工業高校卒業。

1、2年次は、物理化学、有機化学、無機化学、分析化学、生物化学の5分野の基礎をじっくりと学習し、技術者としての土台を固める。並行して、これからの時代を創る技術者としての資質も育む。例えば、2年次の必修科目の「技術者と持続可能社会」では、持続可能な社会について学び、その実現に貢献する技術者としての役割を理解し、討議や発表に必要な能力、自主性・計画性・実行力などを身につけていく。

同学科4年の日影錬さんは、入学動機を次のように話す。

「高校の化学の実験が楽しくて、専門的に化学を学べる大学を探す中で、『自ら考え行動する技術者を育成する』という大学の教育方針にひかれ、本学を志望しました。実際、学生の主体性に委ねられている部分

が大きいです」

2年次から実験を多く取り入れるのも、同学科の教育課程の特徴だ。実験科目は少人数で実施され、教員の厚い指導を受けながら、必要な技術を習得していくことができる。同学科4年の小塚遥斗さんは、次のように述べる。

「2年次の実験科目では、実験に必要な器具の扱い方や実験の手順、レポートの書き方などを基礎から学びました。そこで基本的なスキルをしっかりと身につけたからこそ、3年次以降の研究を主体的に進めることができました」

### 汚染物質除去の新技術を開発し、 水環境の改善を目指す

3年次からは、環境化学、エネ

ルギー機能化学、バイオ機能化学の3領域から専門科目を選択し、学生の関心や目標に沿って専門的な学びを深めていく。

3年後学期からは、研究室に所属して本格的な研究を行う。学生は、教員の専門分野や先行研究、自分の関心を基に研究テーマを選定。同学科では、社会での実践を意識させるため、学生は研究の進め方やスケジュールなどをまとめる「プロジェクトポータル」を作成し、教員の承認を得てから研究を開始する。

環境化学領域の土佐光司教授の研究室では、水処理や微生物燃料電池、バイオマスなどの化学技術を様々な分野に活用しており、SDGsの「目標6 安全な水とトイレを世界中に」に貢献する研究も行って。小塚さんは、チームで問題発見・

### この学びに関する 他のSDGsの目標



\*1 水を使用目的に合わせた水質、あるいは環境に合わせて排出するための様々な処理のこと。

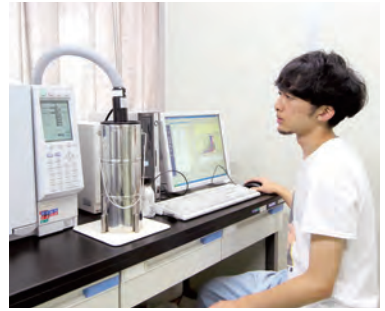


写真1 小塚さんは、地域の浄水場から水道原水の提供を受けて、汚染物質除去の実験を繰り返し、水の成分を分析している。

解決に取り組む2年次の「プロジェクトデザインII」の授業で、エビや巻貝などの生物の利用による、水の浄化や水槽内の藻類などの汚染物質の除去に関する研究を行った。

「1つの問題に対して様々な解決法がありました、皆で議論しながら最適な方法を選んで実行する過程にやりがいを感じました。そして、その授業を通じて、水処理にかかわる研究に取り組みたいと考えるようになり、土佐研究室に入りました」

現在は、浄水場と連携して処理前の水道原水（湖水）の提供を受け、金属有機構造体（\*2）を用いて水中のカビ臭の原因物質を吸着・除去する研究を行っている（写真1）。

「一般的な水処理の方法には、生物処理や活性炭処理、オゾン処理などがありますが、生物処理では大量

の汚泥（\*3）の発生、オゾン処理では意図しなかった生成物の発生、活性炭処理では低い再利用性などのデメリットがあります。金属有機構造体を用いた技術を確立できると、より効率的に水中のカビ臭を除去でき、コストも下げられます。発展途上国の水環境改善への貢献も目指しています」（小塚さん）

### 汚泥を再利用する技術で、循環型社会の構築に貢献

日影さんが水処理に興味を持ったのは、生まれ育った環境が関係している。

「故郷の岐阜県の水道水はとてもおいしいことに、地元を離れて初めて気づきました。その素晴らしい水環境を守るために、化学でできることを研究したいと思いました」

日影さんは、3年次に「水の環境と化学」の授業を履修し、水質汚濁物質の性質や水処理について学び、ますます水処理への関心を深め、土佐研究室に入った。現在は、大学近隣の下水処理場と連携し、下水処理で出てきた汚泥からバイオガスを発生させることで、発電につなげる仕

組みを研究している（写真2）。

「埋め立て処理されることも多い汚泥ですが、エネルギーとして再利用できれば（目標7）、埋め立て地が不要になるだけでなく、処理の過程で汚泥が含む大量の水を処理できるなど、循環型社会の構築に近づきます」（日影さん）

2人とも、2021年1月までに研究成果を卒業論文としてまとめる予定だ。十分な成果が得られた場合は、学術雑誌などに論文を投稿する予定だという。

卒業後、エンジニアとして就職予定の日影さんは、「自らアイデアを発信できる技術者になりたい」と意気込む。メーカーの技術職として就職予定の小塚さんは、「大学で身につけたコミュニケーション能力や技術を生かしたい」と目標を語った。



写真2 汚泥という廃棄物がエネルギーに変わることに興味を持ったという日影さん。ガスの発生効率を調べる実験を日々行っている。

## 学びとSDGs

### 化学技術の習得にとどまらず、次代の技術者に必要な姿勢を育成



バイオ・化学部  
応用化学科 教授  
土佐光司  
とさこうじ

現代社会の生活は、化学技術の進歩に支えられていますが、時代の変遷とともに、単に便利で性能が高いものをつくれればよいという考えは通用しなくなりました。自分たちが生み出した技術や製品は、世の中によい影響を与えるのか、多くの人の幸せにつながるのか、持続可能な社会の構築に貢献できるのかといったことが強く問われるようになっていきます。

本学科では、化学の技術の習得はもちろん、そうした社会の流れに対応できる技術者としての考え方や姿勢の育成を重視しています。

その一環として、私の研究室では、実際の社会問題の解決につながる研究テーマを設定し、企業や自治体、海外の大学などの外部の組織と連携し、コミュニケーションを取りながら、研究に取り組めます。その中で、多くの学生が問題解決は1人ではできないことを学んでいます。

卒業生は研究室での経験を生かし、材料、エレクトロニクス、バイオ、環境、エネルギーなど、様々な分野で活躍しています。

\* 2 金属イオンと有機化合物が連結した、内部に無数の空間がある物質。 \* 3 下水処理場や工場の排水処理で生じる大量の固形物。

# 若手教師・教育創造MTG ミーティング

## 第3回オンラインミーティング & 有志メンバーによる授業研究・レポート

# 日々の授業実践や思いを語り合い、 若手としての共通の課題を追究する

全国の若手教師が地域を超えてつながり、これからの教育について語り合う「若手教師・教育創造MTG」。お互いの考えや取り組みへの理解が深まる中で、より具体的なテーマについて議論を交わす場面が増えてきた。今回は、3回目を迎えたオンラインミーティング、そして、オンラインで行われた有志による授業研究についてレポートする。



レポートその1 第3回オンラインミーティング（8月下旬実施）

これからの教師像を描きながら、  
若手として全国への「提言」を模索

これからの教師の役割を  
より広い視点で捉える

3回目となった全体のオンラインミーティングでは、2人の教師の質問提起（囲み参照）を受けて議論が進められた。テーマの1つは、「未来の教師が担う役割」。教科指導、進路指導、探究活動、部活動指導など、様々な場面で多様な役割を担っている

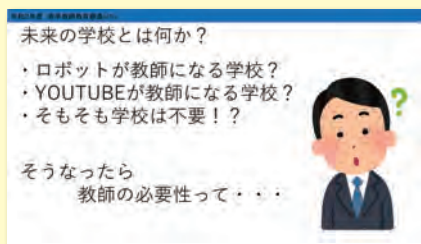
るのが現在の教師だが、ICTが発達する中で、「目の前の仕事に一生懸命取り組むだけでよいのか」「教師個人として、また、教師集団の1人として、教師のあり方をどのように考えればよいのか」といった問いが投げかけられた。もう1つのテーマは、新学習指導要領の実施に向けて、教育課程の見直しやカリキュラム・マネジメントの推進が求められる

### 私の教育活動 **喜** **怒** **哀** **楽**

テーマ1 ● 学校の「未来」課題

#### 未来の教師が担う役割とは？

埼玉県教育委員会 浅見和寿先生



#### 浅見先生の 思い

現在、私たちは、教科指導、進路指導、探究活動、生活指導、部活動指導など、様々な役割を担っているが、未来の学校において教師が担うべき役割は何か。全国の先生方の考えを聞きたい。

#### 浅見先生の発表に対する意見・感想

- ◎生徒を、大学生や地域、企業とつなぐコーディネーター、そして、生徒と校外の人たちとの対話を支援するファシリテーターの役割が求められていることを実感している。
- ◎生徒が集い、お互いの熱量を感じながら学ぶ場がますます大切になってきている。生徒一人ひとりの個性を理解した上で、それぞれに応じた指導ができるのが教師だ。

## 私の教育活動 **喜** **怒** **哀** **楽**

テーマ2 ● 学校の「今」 課題

### それぞれの教育活動を「つなげる」には？

広島県立広島工業高校 **川口広司先生**

#### ■ 相談 (私の悩み)

新学習指導要領 (再来年度の新入生) の実施に向けて

1. 教育課程の見直し, カリキュラムマネジメントの進捗度は?
2. 教員間で教科横断的な視点を持ち, 授業ができていますか?
3. 先生方の「それぞれの教育活動」はどう「つながって」いますか?

#### 川口先生の 思い

新学習指導要領の実施を前に、私たちが取り組むべき課題は山積している。教師間の連携と同時に、教師一人ひとりに「自らの教育活動をほかの教育活動とつなげる」発想が求められると思う。先生方の考えと実践を聞きたい。

#### 川口先生の発表に対する意見・感想

- ◎生徒の「なぜこれを勉強するの?」といった疑問は、その生徒の視点を広げるチャンスであるとともに、普段の授業を探究学習や特別活動へ「つなぐ」きっかけになることを意識したいと思った。
- ◎新学習指導要領の実施を前にして、教科横断的な視点での授業研究が自分にはもっと必要だと感じた。

る中、「教師間で横断的な視点を持ち、授業を始めとする多様な教育活動をつなげていくにはどうすればよいか」といった投げかけがあった。  
SDGs (\*1) や Society 5.0 (\*2) など、社会課題を多角的に捉えながら、これからの社会を包括的に描く力が生徒には求められている。同様に教師にも、自身の専門科目の枠にとらわれず、「これからの学校」における自らの役割を大胆に描いていく力が求められていることを、メンバーである若手教師たちが感じ取っているからこそ、そうしたテーマが提起されたのだろう。

### 全国へ若手教師の 「提案・提言」を発信

全国の若手教師が定期的に語り合う中で、「この場で様々な刺激を受け、それぞれが自校でアクションを起こしているが、そうした刺激を自分たちだけのものにとどめるのではなく、何らかの形にして、全国の先生方にもっと広く伝えたい」「私たちがこの場で得た『元氣』を、全国のほかの先生方にも分けていきたい」といった声が上がることが増えてきた。そして、メンバー間での対話を発展させて、日本の「これから

の教育」を創造する上で考えるべきこと、起こすべきアクションを全国に提案・提言していこうという、言わば本ミーティングの新たな目的が生まれるに至った。現在は、1年間の活動を通じたメンバーの気づきを「提案・提言」としてまとめていくため、神奈川県立愛川高校の森迫恒平先生がファシリテーターとなつて、オンライン上でのマインドマップ作成などにより、メンバーの相互の関心、強みを可視化する試みを続けている。今後、メンバーたちは、「これからの教育」を考えた時に、現状から変えていくべきこと、新しい

#### レポートその2

有志メンバーによる授業研究 (8月上旬実施)

## 協働性を育むアクティブ・ラーニングの実践を題材に、 これからの授業のあり方を語り合う

### 予習を起点にした 協働的な授業実践を紹介

これまでのオンラインミーティングでは、「これからの授業」のあり方が何度も話題となった。そこで、有志メンバーがオンラインでの授業研究を企画。岩手県立遠野高校の



リアルタイムで共同編集が可能なデジタルホワイトボードをオンライン上で活用して、各メンバーの興味・関心を整理し、全国への提案・提言へとつなげていく予定だ。

く始めるべきことを整理し、ともに取り組んでいくことを本誌面などを通して発信していく予定だ。

佐藤紘大先生が、数学の授業での実践を紹介した。佐藤先生が目指しているのは、生徒が当事者意識を持って参加し、楽しみながら学ぶ過程で、「よく生きる」ための資質・能力を育成する授業だ。具体的には、生徒は家庭での予習で課題を発見してから授業に臨み、グループで課題につ

\*1 Sustainable Development Goals の略。2015年に国連が掲げた持続可能な開発目標のこと。「貧困をなくそう」「飢餓をゼロに」など、17の目標と169のターゲットから成る。

\*2 AIやロボットなどの新たな技術を産業や社会生活に取り入れることで、新たな価値が生み出される「超スマート社会」。2016年1月に閣議決定された「第5期科学技術基本計画」の中で、目指すべき新たな社会の姿として提唱された。

いて探究し、最適解や納得解を見つけていく（スライド1〜5参照）。

授業で教師が果たす役割について、佐藤先生は「生徒が予習で発見してきた複数の課題を踏まえて、『クラスの共通課題』を提案すること」と語った。その授業で身につけてほしい知識や見方・考え方を生かすことのできる「クラスの共通課題」を設定できるかどうか、教師としての力量が問われるというわけだ。

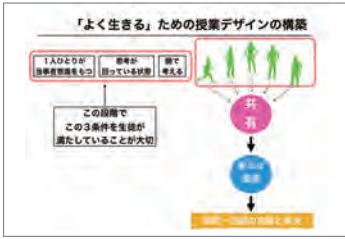
予習を起点にした授業を行うに当たり、佐藤先生は、なぜこのようなスタイルの授業を行うのか、授業の意義を説明することを大切にしている。時には授業の時間を割いて生徒と語り合う中で、「このような授業は、個の力を集団の力へとつなげる実体験であり、君たちがこれからの社会で『よく生きる』ために必要な

ものだ」と、熱意を込めて生徒に伝えることもある。未来の社会の姿を

思い描きながら、今行うべき授業のあり方を生徒と語り合い、生徒自身がその授業の必要性について納得すること、すべての生徒が予習に取り組むようになったという。

佐藤先生の実践を聞いた後、授業研究の参加者は、それぞれの感想や疑問点、関連する自身の取り組みを述べ、それに対して佐藤先生が、さらに自身の実践における発見や課題を語っていった。参加者の意見を基に、「生徒が教え合い、学び合う環境をどのようにつくるか」「生徒への問いを立てるのは誰であるべきか」「そもそも授業における問いとは何か」「1コマの授業、学期単位などでの資質・能力の評価はどのように行うべきか」など、様々なテー

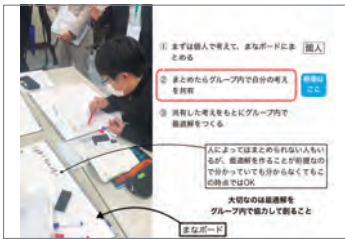
マへと対話は広がっていった。参加者からは、「1つの実践を深く理解し、さらに参加者同士がお互いの実践を語り合う中で、自分の理想の授業が少しずつ見えてきた。まだまだパワーアップしなければと思った」「授業をする中で生まれた疑問や問題を、どんどん自分なりに昇華して、授業に仕かけを取り入れていく姿勢やその工夫に刺激を受け



スライド1 生徒が生涯を通じて学び続けられるよう、「よく生きる」ための授業を佐藤先生は追究している。



スライド2 生徒は、予習で自分が見いだした課題や疑問点を Classi (\*3) のアンケート機能を使って入力。授業はそれらを共有することから始まる。



スライド3 予習をする中で生徒が見いだした課題を、佐藤先生が「クラスの共通課題」として整理。それについての最適解を、個人やグループで考える。



スライド4 グループで考えた最適解をほかのグループに説明する。佐藤先生が重視する「集団の1人としての学び」を、生徒は常に意識することになる。



スライド5 授業の振り返りはオンラインツールを活用。関心・意欲・態度に関する自己評価を行うとともに、その日の内容を踏まえた見方・考え方の理解度を尋ねる。

\*3 株式会社ベネッセホールディングスとソフトバンク株式会社の合併会社である Classi 株式会社が提供する、学校教育での ICT 活用を総合的に支援するサービス。

## 授業研究

### 参加者の感想

個人の課題を共有し、より深い集団の課題に昇華した上で、協働して問題解決を図り、個人の思考力を鍛えようとする佐藤先生の授業は、とても勉強になりました。生徒が内容の習得に必要性を感じ、学ぶ・身につけるという行為に充足感を覚えることは、生徒の予習状況や学習の定着度を大きく左右すると、私も思います。「予習で抱いた疑問を授業で解決する」という学習の黄金サイクルは、望ましい学びのスタイルとして当然視されてはいても、多くの高校生にとって、その確立は簡単なことではありません。しかし、佐藤先生がおっしゃるように、生徒が授業を自分事として捉えるようになれば、生徒は望ましい学びのスタイルに近づいていくのではないのでしょうか。私が普段向き合っている問題の解決のヒントが得られた気がしました。(北海道・私立札幌第一高校/佐藤亮介先生)

マへと対話は広がっていった。

た。私も予習のあり方を工夫したい」といった声が上がった。

発表者の佐藤先生は、「参加者の興味・関心がどこにあるのかを確認しながら自分の実践をお話ししたことで、一方通行にならず、議題も絞れたと思います。先生方から意見や感想を聞くことで、さらに深められたテーマも見つかりました」と今回の授業研究の成果を語った。

テーマ

## 新教育課程の編成方針と 校内での推進方法

新課程入試までのスケジュール  
資質・能力の組織的な  
育成・評価の体制が必要

新学習指導要領に対応した2025年度入試（新課程入試）までのスケジュールと、高校現場における新学習指導要領に基づく教育課程（以下、新教育課程）の検討の流れを示したのが図1だ。21年度夏ごろには、「新学習指導要領に対応した実施要項の見直しに係る予告」が発表される。22年度には各大学が選抜予告を、24年度には「25年度大学入学者選抜実施要項」を発表する。高校では、22年度から新学習指導要領が年次進行で実施される。指導要録において観点別学習状況の評価の記載が求められるようになり、資質・能力の3つの柱を組織的に育成・評価する体制づくりに取り組むことが急務となっている。ベネッセ文教総研（以下、文教総研）が行った現場へのヒアリングによると、20年度秋から年度末にかけて新教育課程編成の仮案を作成し、21年度の5、6月に出示される検定済教科書見本を踏まえて、6月ごろまでに新教育課程を策定する学校が多かった。

図1 新課程入試までのスケジュールと、新教育課程の検討の流れ

		2020 (令和2) 年度	2021 (令和3) 年度	2022 (令和4) 年度	2023 (令和5) 年度	2024 (令和6) 年度
		小学校新課程	中学校新課程	高等学校新課程→		
		高3	高3	高3	高3	高3
		高2	高2	高2	高2	高2
		高1	高1	高1	高1	高1
入試 スケジュール	大学入学共通テスト 初実施		【夏ごろ予定】 「新学習指導要領に対応した実施要項の見直しに係る予告」	各大学から選抜予告		【夏ごろ予定】 「2025年度大学入学者選抜実施要項」発表 新課程入試（2025年度入試）
	【秋～3月】 新教育課程の編成（仮） ↓ 教育委員会へ提出		【5～6月】 検定済教科書見本 ↓ 新教育課程の編成  【6～7月】 教科書採択  【10月】 指導書	↓ 新教育課程の編成の微調整  指導要録の改善 →観点別学習状況の評価の記載必須	新教育課程の編成の微調整	新教育課程の編成の微調整
新教育課程の検討の流れ		指導のあり方・評価のあり方の校内での検討		指導要録の改善に伴う、観点別学習状況の評価の記載		調査書変更

\*ベネッセ文教総研作成。

## 学校としての大きな視点が 新教育課程編成に不可欠

新教育課程の編成を考える際、多くの学校において課題となるのが、必修科目の単位の増加によるコマ数不足だ。働き方改革が進む中、週時間を減らそうとしている学校が増えており、さらに課外活動の充実のため、生徒が自由に活用できる時間を増やしたいという思いもある中で、必修科目の単位増にどのように対応するか、苦慮している学校は少なくない。

文教総研が全国の教師に、どのように各教科・科目等のコマ数を決定し、新教育課程編成を進めていく予定か、ヒアリングした結果をまとめたのが図2だ。

現場の対応の方針は、大きく3つに分けられる。1つめは、育成を目指す資質・能力を軸とした対応だ。例えば、読解力の育成を重視する学校であれば、2年次も文系、理系を問わず、国語をほかの教科よりも増単位で履修させるといった対応が考えられる。また、生徒の学力を分析し、1年次は国語、数学、英語を重視する教育課程とし、地理歴史・公

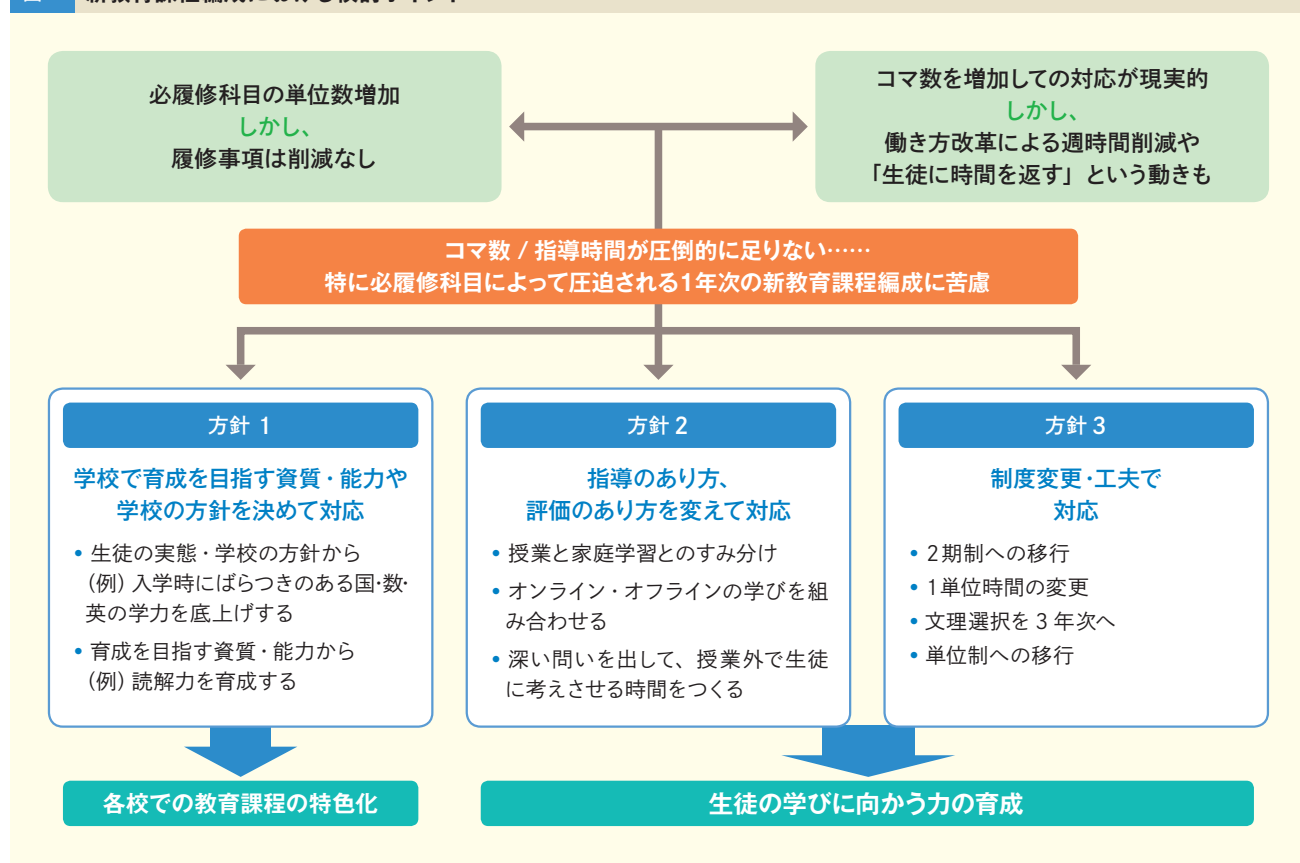
民は1年次に必修科目1科目、2年次に2科目とする予定の学校もある。

2つめは、指導と評価のあり方を変えることによる対応だ。新型コロナウイルスの感染拡大を受けた臨時休業によって、授業におけるICT活用が促進された学校は少なくないが、オンラインツールを使った授業や家庭学習を組み合わせて指導を効率化し、限られた授業時間でも生徒の学びの質を担保する。すべてを授業でやりきるのではなく、生徒への問いを工夫し、生徒の自学自習をより促進させようという学校もある。

3つめは、制度の変更・工夫で対応するケースだ。2期制への移行や1単位時間の変更、3年次からの文理でのクラス分けの実施などによる対応で、新教育課程に対応する学校も見られる。

いずれの対応の方針も、これまでの単位数を参考にした教科・科目間での単位数調整にとどまるものではないことが分かる。新教育課程の編成では、生徒の資質・能力や学校としての特色の明確化といった大きな視点が必要だ。

図2 新教育課程編成における検討ポイント



\*ベネッセ文教総研作成。

## 資質・能力、指導・評価を踏まえた新教育課程編成へ

### 青森県立青森高校

青森県立青森高校は、2017年度に学校として育成を目指す10の資質・能力「青高力」を設定。その到達度を測るための評価規準と尺度を示すルーブリックと、育成の過程を示すシラバスを作成している(本誌2019年4月号・特集を参照)。学校として育成を目指す資質・能力を共有した同校の教師たちは、新教育課程の編成をどのように進めようとしているのか、話を聞いた。

## Q1 どのような方針で新教育課程を策定しているのか？

### A1 育成を目指す資質・能力を踏まえ、自校に求められる授業観を校内で目線合わせることが不可欠

**矢倉校長** 新教育課程の編成を進める上で重要なことは、育成を目指す資質・能力を踏まえてよりよい教育課程を追究するという大前提を校内で共有することです。本校では、学校として育成を目指す10の資質・能力「青高力」を備えた「目指す生徒像」を設定しており、新教育課程の編成も、目指す生徒像の実現につな

がるものになります。本校では、教務部が中心となつて新学習指導要領の「総則」を読み解き、新課程で「目指す生徒像」を実現する際にキーとなる4つの観点を言語化しました(P.70図3)。それは、授業改善、学習の見直し・振り返り、教科横断、そして学習評価です。その4つの観点を新課程における目玉として、教

育課程編成を進めていくことになりました。そのようにして、教育課程編成を教科間のコマ数の振り分けに終わらせず、あくまでも新課程における目指す生徒像の実現のためのものと、校内に周知することが重要です。

**千葉教頭** 何のための教育課程編成なのかという大きな目的を共有した上で、教師一人ひとりの授業観の転換も求められます。生徒への情報伝達量を授業で重要視してしまうと、どうしても「時間が足りない、教科書が終わらない」という考えに



校長  
**矢倉 慎次**  
しらくら・しんじ  
教職歴38年。同校に赴任して3年目。



教頭  
**千葉 栄美**  
ちば・えみ  
教職歴32年。同校に赴任して2年目。地理歴史・公民科。



教務主任  
**笠井 敦司**  
かさい・あつし  
教職歴24年。同校に赴任して9年目。国語科。



外国語科主任・1学年副主任  
**菊池 真理子**  
きくち・まりこ  
教職歴26年。同校に赴任して6年目。外国語科。

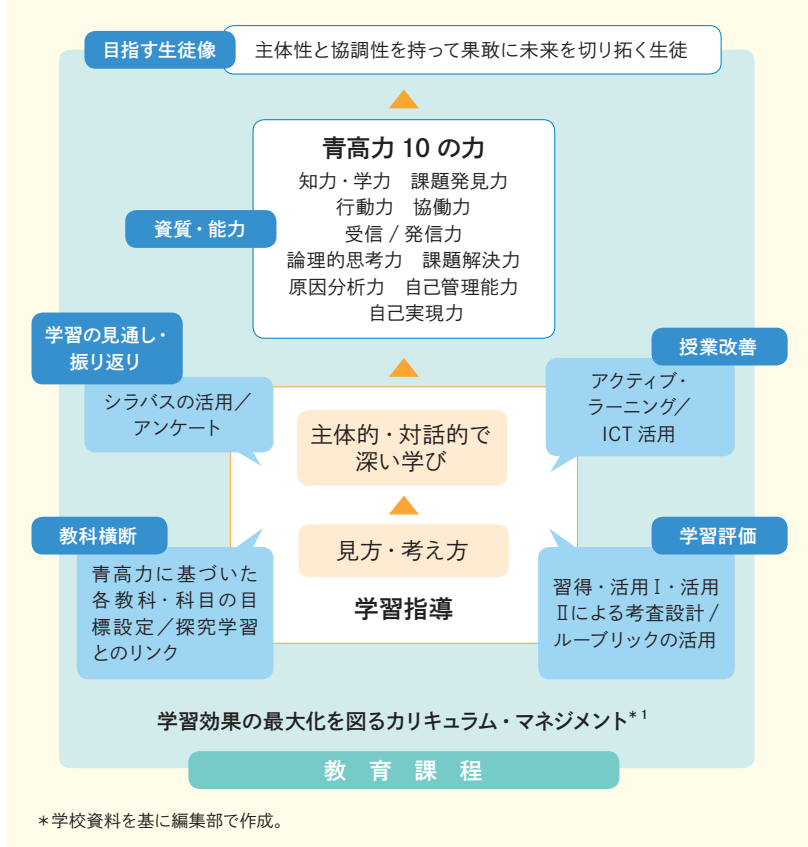
陥ってしまいます。しかし、これからの社会を踏まえて、生徒に必要な資質・能力を考えると、授業の中で必ず生徒が情報を獲得し、正解にたどり着く必要はなく、それぞれの考えが深まっていけばよいと思います。新課程の教科書がまだ手元ない状態でも、これからの授業のあり方を校内で共通のものとするのも重要だと思っています。

**菊池先生** 「青高力」については、学校全体、そして各学年で毎週のように話し合い、決めていったことを覚えていきます。「青高力」は、各学年での到達目標までをルーブリックにしたわけですが、やはりルーブリックで描いた状態を実際の授業に

#### 青森県立青森高校

- ◎旧青森県立青森高校と旧青森県立青森女子高校が統合して生まれた。網領に「自律自啓」「誠実勤勉」「和協責任」を掲げる。2017年度に文部科学省「スーパーサイエンスハイスクール」の指定を受ける。
- ◎設立 1900(明治33)年
- ◎形態 全日制/普通科/共学
- ◎生徒数 1学年約280人
- ◎2020年度入試合格実績(現役のみ)  
国公立大は、北海道大、東北大、東京工業大、東京大、京都市大などに175人が合格。私立大は、慶應義塾大、上智大、早稲田大、同志社大などに延べ200人が合格。
- ◎URL <http://www.aomori-hs.ac.jp/>

図3 青森県立青森高校 カリキュラム・マネジメントの全体像



\*学校資料を基に編集部で作成。

落とし込む段階になって、これまでとは違う生徒への問い方や題材の選び方にするなど、授業のあり方が変わっていききました。新課程においても、「青高力」のルーブリックと照らし合わせた上で、教育課程の編成に臨むことが求められると思います。

笠井先生 本校では、「青高力」として受信/発信力、論理的思考力を挙げています。自分の考えを適切な形で相手に伝えることは、本校の生徒に欠かせない資質・能力です。新学習指導要領でも重視されていますが、そうした資質・能力を生徒に育むために、教科を横断しながら英語の「論理・表現」と国語の「論理国語」の授業をつくっていくようにしていることも、本校ならではの選択肢だと思っています。資質・能力をそれ

千葉教頭 管理職、教科主任、分掌主任から成るキャリア教育委員会内直轄の作業チームである、新教育課程編成プロジェクトチーム（以下、PT）が新教育課程の編成を中心的に担います。PTは、学年、教科、分掌横断のメンバーで構成され、本校の「新教育課程編成大綱」で示されたステップ（図4）で、編成作業

を行います。もちろん、PTに任せきりにせず、何を目指した教育課程編成であるかを全教師が共通理解し、情報提供などを通じてポジティブにかかわっていく機運を校内で高めていくことも大切です。

笠井先生 新教育課程編成のステップは「新教育課程編成大綱」に細かく明示していますが、実際には、作業

## A2

学年・教科を超えたプロジェクトメンバーが、「これからの教育」という視点を持って語り合う

## Q2

どのような体制・ステップでコンセンサスを得ながら教育課程編成を行うのか？

それぞれの教科・科目の授業でどのように育むのか、どのようなテストで評価するのか、日々試行錯誤を重ねています。授業での生徒への発問、そして定期考査の問題が、知識を覚えているかどうかを問うているのか、それとも、知識を活用して課題に取り組むことを求める問題になっているのか、全教科で問題意識を持って

各教師が問い直しています。本校では今年度から、教頭が各教科の定期考査の問題に目を通して、資質・能力の育成につながる作問になっているかを確認し、各教科にフィードバックしています。学校ぐるみで授業改善に取り組むことも、新教育課程の編成を進める土壌として大切だと思っています。

\*1 教育課程に基づき組織的かつ計画的に教育活動の質の向上を図っていくこと。

を進める中でさらに工程を細かくして時間をかけたり、統合したりするケースも出てくると思っています。大切なのは、これからの社会と求められる学びのあり方を念頭に、学校の教育目標を踏まえて、教科の立場を超えて語り合いながら編成を進めていくイメージを全教師に持つってもらうことです。9月には、「大学入試改革×withコロナ×学校教育で大切なこと」というテーマで、新学習指導要領の「総則」の理念をAfterコロナの教育の形にどのように結びつけていくかを校内で議論しました。そうした大きな視点による校内での対話を、特に作業工程の前半では重視しています。

能力の育成に注力してきました。ですから、例えば新教育課程の検討の過程で、他教科の教師にパフォーマンス評価について共有してもらったことなどは、新課程においては指導と評価の改善も不可欠であることを理解する上で大きな意味があります。

**宍倉校長** 目の前の生徒に一生懸命という意味では、本校もほかの多くの高校と同じです。ただ、新教育課程の編成において先だけ先に歩き始めることができているとしたら、それは笠井先生を始めとするミドルリーダーが活躍できているからでしょう。教科書も入試もその実像がまだ見えないからこそ、「こんな資質・能力を育みたい」と、大きな視点で語り合うことが大切であり、そうした時に力を発揮してくれるのがミドルリーダーだと思います。

より詳しい内容は、『ハイスクールオンライン』でお届けします！



新教育課程の編成方針と校内での推進方法  
 ・青森県立青森高校の実践事例・校内で目線合わせができる校内資料  
 (教科横断・授業改善・学習評価の構図や論点など)

有識者による新課程の動画解説も満載

#### 図4 新教育課程編成までのステップ(「新教育課程編成大綱」より)

##### 1. 新教育課程編成のための事前の研究・調査(グローバルな視座から)

- ・新学習指導要領改訂のポイントについて理解
- ・県教育委員会「教育課程編成資料」の読み合わせ
- ・ベネッセのWebセミナー「Withコロナにおける学校教育の形とこれからの学びのデザイン」への参加
- ・ベネッセのハイスクールオンライン内の「新課程レポート」や大学主催の研修会などを活用した校内研修
- ・「大学入試改革×withコロナ×学校教育」で大切なことは何かを校内で議論

約1カ月(8月)

##### 2. 学校の教育目標など、教育課程の編成の基本となる事項の確認と共通理解(ローカルな視座から)

- ・本校の綱領「自律自啓」「誠実勤勉」「和協責任」と、綱領を体現する生徒像＝「目指す生徒像」、目指す生徒像に必要な資質・能力である「青高力」の内容の確認
- ・現行教育課程で課題だと感じている事柄の洗い出し・明確化
- ・現在の授業・考査・週末課題・行事などに抱えている課題感の洗い出し
- ・「評価」に関する課題(特に「パフォーマンス評価」)について、実技科目の評価の仕方を学びつつ、評価の観点・方法についての共通理解
- ・本校生徒の進路選択・受験の特徴の確認
- ・ここまでの視点を総合して、「新教育課程編成の方針」を策定

約1カ月(9月～10月)

##### 3. 新教育課程の編成作業

- ・必修科目を軸に、標準単位数で2022年度入学生の教育課程(1～3学年)を策定
  - ・上記1、2の視点を踏まえ、単位数の増減、学年の配置を調整
  - ・教育課程表「原案1」としてまとめる
  - ・上記2で策定した「新教育課程編成の方針」に基づく「原案1」をキャリア教育委員会に諮問
- \*学校資料を基に編集部で作成。

約1カ月(10月～11月)

一疑問や課題を解決!実践につながる!

新課程レポート

ベネッセ教育情報センター

『ハイスクールオンライン』トップページ > 入試改革/新課程 からアクセス

「生徒国際イノベーションフォーラム 2020 @オンライン」開催

# 世界中の生徒や教師たちが、「学校のWell-being」を語り合う

「学校のWell-being (よりよいあり方)」とは、どのような状態で、それはいかにして実現されるのか。日本イノベーション教育ネットワーク (協力OECD/\*1) が進める「地方創生イノベーションスクール 2030 第2期 (ISN2.0)」の実践・研究の集大成として、2020年8~9月、「生徒国際イノベーションフォーラム 2020 @オンライン」(実行委員長 ISN 共同代表: 福島大学学長 三浦浩喜教授) が開催された。世界9か国(\*2)、日本も全国の中学校・高校から生徒や教師、教育関係者らが参加。多様な参加者が、対等な立場で語り合い、未来の学校や教育のあり方を描き出した。

## 「ライブトーク」プログラム

### DAY 1 August 11th

- 15:00 Item 1 Opening Ceremony
- 15:30 Item 2 Learning & Inquiry Fair
- 16:30 Item 3.1 Introduction about Workshop
- 16:50 Item 3.2 Knowledge Building Workshop ①
- 18:20 Item 3.3 Knowledge Sharing & Short Feedback
- 18:30 Item 4 Something Fun! ①

### DAY2 August 12th

- 15:00 Item 5 Reflection On DAY 1
- 15:15 Item 6 Knowledge Building Workshop ②
- 16:20 Item 7 Knowledge Building Workshop ③
- 17:10 Item 8 Drawing Future Well-being School
- 18:10 Item 9 Something Fun! ②
- 18:40 Item 10 Closing Ceremony



オンラインイベント「生徒国際イノベーションフォーラム 2020 @オンライン」のトップ画面。参加者はこのページから各テーマの掲示板にアクセスし、意見交換を行った。

**世界中の生徒と教師が参加し、2日間のライブトークを実施**

日本イノベーション教育ネットワーク (協力OECD/以下、ISN) の主要事業である「地方創生イノベーションスクール 2030」では、2030年の社会で求められる資質・能力や、それを育成する教育のあり方を、OECD (経済協力開発機構) や文部科学省の協力を得て実践・研究している。18年に開始した第2期の実践・研究の集大成として、20年

8~9月、「学校のWell-being」をテーマに、世界9か国の中高生、大学生、教師、研究者らがオンライン上で語り合う「生徒国際イノベーションフォーラム 2020 @オンライン」が開催された。会期中は、インターネット上の掲示板において意見交換が行われ、8月11・12日には、オンライン会議ツールを利用した「ライブトーク」が実施された。本記事では、各国から約300人が参加し、教育の未来を見つめて語り合った「ライブトーク」の様態をレポートする。

\*1 国際連携で教育研究を行う産学コンソーシアム。これまで行われたイベントは、本誌2018年6月号P.50-53、2019年10月号P.20-23で紹介。

\*2 日本、アメリカ、インドネシア、シンガポール、中国、トルコ、ドイツ、フィリピン、マレーシア

## すべての参加者が

## 未来の教育のエポックメーカーに

「ライブトーク」の目標は、未来の学校の枠組みや指標づくりの第一歩として、世界中の生徒や教師が、30年の「学校のWellbeing」を考え、今ある学校の変化の可能性と課題を明らかにし、そこから、「個人のWellbeing」と「社会のWellbeing」を実現する学校づくりに結びつけることだ。参加者は、事前にSNS上で自己紹介や自身の取り組みの紹介、意見交換を行って当日を迎えた。

開会の挨拶で、ISN共同代表の東京大学公共政策大学院 鈴木寛教授は、「カンファレンスを楽しんで新たな友人をつくるとともに、学びの本質や未来の教育についてじっくりと考えてほしい。すべての参加者が、これからの教育のエポックメーカーとなることを願う」と、参加者に呼びかけた。

続いて、ISNが中高生の探究学習を通じて地方創生モデルの創出を目指していることを受け、参加者はグループに分かれ、中高生は事前に準備した資料を基に、自校の探究学習のプロセスや成果を発表した。

## ワークショップ第1部

# 現在の学校の課題は何か、生徒や教師、研究者らが意見を交わす

「学校のWellbeing」について議論するメインプログラムの「Knowledge Building Workshop」は、3部構成で行われた。参加者は38のグループに分かれ、2日間とも同じメンバーで議論。海外の参加者を含むグループは原則、英語を主言語とした。

第1部のテーマは、学校の現状と課題だ。グループごとに、教育、仕事、環境、ワーク・ライフ・バランス、健康、コミュニティなど、「OECD B L I (Better Life Index / よりよい暮らし指標)」の11カテゴリー（\*2）の中から1つが割りあてられ、それをテーマに議論が進められた。ワークショップの開始時には、モデレーターから、「参加者の誰もが『正解』を持っておらず、思ったことや考えたことを遠慮せず、自由に発信しよう」といった声かけがあった。

各カテゴリーには、その内容に応じて3つの質問があらかじめ設定されており、それらに沿って意見交換

が行われた（写真1）。図は、「教育」のカテゴリーの質問と、それが割りあてられたグループで出された意見の例。

2日目の冒頭に、モデレーターが第1部の振り返りを共有した際には、各グループで議論された次のような

### 図 「教育」のカテゴリーの3つの質問と、意見の一例

- あなたが参加している授業の中で、最も豊かな授業は？
  - コミュニケーションを取る授業
  - グループの中で課題を設定して考える授業
- 大人になった時に必要な力を育むために、学校で中核となる活動、授業は？
  - 各自が考えて問題解決ができる探究活動
  - 自分で問いを考える力を養える授業
- これからの学校で扱う必要のある学習内容、新しい教科は何？
  - （探究学習の前段階として）思考力の基礎を養う授業
  - LGBT、人権などへの理解を促すための授業
  - SDGsに対する危機感を生徒が実感できるほど掘り下げた授業
  - 社会で起きていることを集中的に学ぶ授業

\* 取材を基に編集部で作成。

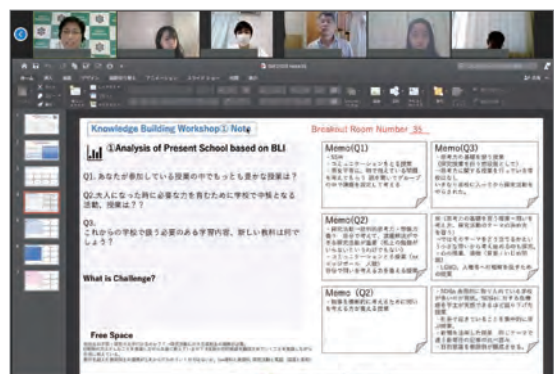


写真1 「教育」のグループの様子。生徒や教師、教育関係者など、異なる立場のメンバーが混在するように、グループが組まれた。

論点が紹介された（行頭のカッコ内は11のカテゴリー）。

- （教育） 私たちの将来のためには、思考力を強化する授業が重要だ。
- （仕事） 探究学習は生徒に自身のキャリアを考える機会をもたらす。
- （ワーク・ライフ・バランス） 生徒自身がアイデアを高められるよう、疑問を持ったリ調査したりする時間を設けることが重要だ。
- （健康） 生徒は、十分な睡眠を取っておらず、ストレスを感じている。ストレスは、教師と生徒に誤解を生じさせる原因にもなる。
- （環境） 学校は、ソーラーパネル設置やエアコンの適切な温度設定、

\* 2 11のカテゴリーは、収入、仕事、居住、安全、健康、ワーク・ライフ・バランス、教育、人生の幸福、コミュニティ、市民参加、環境。

リサイクル活動を通じて、環境問題に貢献している。

・(安全) 対人関係に不安を感じている生徒もいる。

第1部では、各グループがテーマ

## ワークショップ第2部

# 未来の学校のデザインを議論。 対話を通して考えが変化する生徒も

2日目に実施した第2部では、第1部の議論の内容に基づき、未来の学校のあり方を考えた。

未来の学校での学びのあり方が論点となった「教育」のグループでは、未来の学校に求めるものが明確になっていく生徒の姿が見られた(写真2)。第1部では、「知識を学ぶだけならば、オンラインでも十分かもしれない。対話や探究ができる場であることが、学校の価値だ」といった意見が多数を占めた。だが、ある生徒は、「一晩じっくり考えて思ったのだが、実践するにしても、知識がなければ、何を実践すべきか考えられない。例えば、新型コロナウイルス

に沿って学校や教育の現状を見つめ直し、よい取り組みに目を向ける一方で、次第に議論は今後の課題や目指すべき方向性へと発展していった。

スも、その危険性に関する知識がなければ、人の行動は変わらなかった。やはり知識を軽視してはならない」



写真2 議論が深まるにつれて、参加者は積極的になり、一人ひとりの発言量が増えていった。

## ワークショップ第3部

# 理想の実現に向けた戦略と見通しを立て、参加者全員で共有

と発言した。そして、「未来の学校における知識の習得については、社会に出てからの実践で役立つという観点を重視してほしい」と語った。

探究学習のあり方について議論したグループでは、生徒が、「初日のプレゼンテーションを聞いて思ったことだが、探究学習では全国の学校が地方の課題を取り上げており、テーマが似通っている。もっと個人が興味を持った探究学習ができる」と面白

いと思う」と問題提起した。

それを聞いた同グループの教師は、「その通りだと思う。地域研究にとらわれず、国政に関心がある生徒は、政治について探究すればよいし、もっと身近なこともテーマになり得る。その点は、学校や教師の課題として考えていきたい」と語った。

各グループでは議論の深まりに伴い、未来の学校や教育の方向性が徐々に明らかになっていった。

第3部では、第2部で議論した学校のあり方をいかにして実現していくか、戦略と見通しを検討した。

「教育」のグループでは、生徒が「未来の学校も、軸は授業であるべきだと思う。その上で個人の関心や適性を考慮し、それに応じた学びを選択肢として設けてほしい」と発言。その実現に向けて、別の生徒が「学びを変えるためには、生徒だけでは

なく、先生同士の対話も大切だと思う。先生同士がつながり、生徒の様々な個性を理解したり、オンラインや対面の授業をどのような方向性の下でつくっていくかを話し合ったりすることで、実際に学校は変わっていくはず」と、ビジョンを提示した。

「健康」のグループでは、生徒の健康増進のために、売店や自動販売機で健康食品を販売することをプラン



## 2020年8月号へのご意見

### 優れた問いを投げかけた8月号の特集

8月号の特集では、深く考えさせられる問いを投げかけられた。北海道旭川東高校の松井恵一先生と福井県・私立福井南高校の浅井佑記範先生の対談で示された、コロナ禍における教師の気づきとそれを昇華する環境が、教師が次に進む原動力になるといった指摘に加えて、長野県蘇南高校の小川幸司校長が示した、トップダウンでもボトムアップでもない「対話による集合知」が重要だという考えに、大きな衝撃を受けた。さらに、吉田梅乃さんの「変えられないことではなく、変えられることに注力しよう」という言葉から、教師という職業を一度相対化して捉え直すべきではないかという問いを投げかけられたように思えた。愛知県立日進西高校 野々山新

### その場しのぎではなく、あり方を見直したい

8月号の特集のすべての記事は、「コロナ禍において、今取り組んでいること」ではなく、「コロナ禍を機に考えたこと」が通底したテーマになっていた。感染予防のために、授業や学校行事、部活動などの見直しを迫られたが、その場しのぎの変更にせず、様々な視点からそのあり方を考え直すチャンスだと捉えて、今後のことを考えていくべきだろう。コロナ禍が今後いつまで続くのか、誰にも分からない。実施できないことがあるのならば、それに代替する方法を考えたり、そもそもそれが必要なのかを原点に立ち返って見直したりする機会としたい。

山形県立米沢東高校 高橋英路

### 新連載で進路指導に役立つ新たな情報をキャッチ

8月号からの新連載「これからの進路指導のための世の中トレンド解説」で取り上げられた「スマートシティ」は、実社会と大学等での研究とがどう結びついていくのかが具体的で分かりやすかった。進路指導だけでなく、探究学習の指導にも役立ちそうだ。

東京都立北園高校 鈴木公美

### 過去と現在の比較と教材の工夫に共感

8月号の「実践 アクティブ・ラーニング」では、栃木県立宇都宮女子高校の黒川治彦先生が、生徒の実態に応じて教材を工夫している点に共感した。アクティブ・ラーニング(以下、AL)は、グループワークありきで考えられる傾向があるが、生徒の思考を能動的にするという本質を改めて認識した。そうしたALの実現のためには、生徒同士が意見を言いやすい雰囲気づくりが、教師に求められている。

東京都立羽村高校 久富悠生

### 実業高校の先進事例が励みになった

8月号の「指導変革の軌跡」で紹介された愛知県・名古屋市立工芸高校の取り組みは、実業高校で「高校生のための学びの基礎診断」を実践する意義を整理する上で参考になった。以前訪問したことのある同校は、実業高校のフラッグシップ的な存在であり、今回の記事は励みにもなった。福岡県・福岡市立博多工業高校 森永明子

OFF SHOT



石川県・私立星稜中学校・高校でのオンライン・ワークショップの取材を終えて校舎を出ると、グラウンドからサッカー部の大きなかけ声が聞こえてきました。本田圭佑選手が在籍していた同校のサッカー部は、全国大会の常連として有名です。この日は悪天候でしたが、部員は懸命にボールを追っていました。その様子を見ると、ワークショップで先生が語られていた、臨時休業中に生徒が見せた向上心のことを思い出しました。制約のある中で歯がゆい思いをしながらも、工夫を凝らして「今、自分にできること」に取り組んでいた生徒たち。サッカー部の部員も、大会が中止になったり、思うように練習ができなかったりと、悔しい思いをしたことでしょう。そのような生徒に寄り添っていくために、「今、私たちにできること」を考え続けようと、身が引き締まる思いを抱きつつ帰路につきました。(朝比奈)



『VIEW21』高校版が  
電子ブックに  
なりました!

『VIEW21』高校版は2020年4月号から電子ブックでご覧いただけるようになりました。ベネッセ教育総合研究所のウェブサイトでご確認ください。  
HOME → 教育情報 → 高校向け → 情報誌最新号

VIEW21 最新号 検索

VIEW21 高校版 2020 12 月号

次号は 12月15日発行 (予定)

『VIEW21』高校版は年6回の発行です

## 教師を育てた 言葉たち

No. 022

### 愛媛県立丹原高校 五味 稔 先生

ごみ・みのる

◎教職歴 28 年。同校に赴任して 9 年目。教務課長・教務主任。担当教科は数学。同校での進路課長在任時、進路が決まった生徒にペーパーフラワーを作らせ、自分の進路先の名称を掲示する時に、それを飾らせるようにした。新入生には「あなたも先輩みたいに花を作れるように、一緒に頑張ろう」と声をかけるという。



**今** から 16 年前に赴任した前任校は、生徒の希望進路が多様で、教師には幅広い視野での生徒支援が求められていました。赴任 2 年目、進路課に配属され、国公立大学進学を希望する 2 年生の理系クラスの担任となった私が、生徒の進路実現の可能性を高める上で重視したのは、AO・推薦入試でした。ただ当時は、全国的にも AO 入試の出願指導のノウハウがまだ十分蓄積されておらず、生徒の志望を深めるためには出願までにどのような指導を行えばよいのか、明確な方針はありませんでした。

生徒の進路観を育み、大学での学びへとつなげる契機として私が提案したのは、地元企業への訪問でした。学校が所在する地域は製造業が盛んで、独自の技術を持つ企業も多く存在していました。そこで、そうした企業に生徒を訪問させ、大学での研究の目的を明確にさせたいと考えました。さらに、中学生を高校に招いて行う数学や理科のコンテストの企画・運営を生徒に任せるなど、多様な経験を積むことで志望理由をより強固なものにしておこうとしました。ただ、どれも初めての挑戦で、どの程度の成果がもたらされるのかは分からず、手探りの状態でした。そんな私の提案に対しての当時の校長の返事が「**思うようにやりなさい。生徒のために思うなら、やって無駄なことはない**」だったので。

新しい取り組みを前に二の足を踏むのではなく、失敗を恐れずに思いついたことはどんどんやりなさいと応援していただいたことに、私は心から感謝しました。管理職が明確な言葉で後押ししてくれたこ

とで、前向きな気持ちが学年団全体に広まっていくのを感じたことを覚えています。

3 年生に進級しても引き続き私が担任を務めたそのクラスからは、AO 入試での難関国立大学医学部医学科を含む 36 人の国公立大学合格者が出ました。そして、その時の大学合格者の約 7 割が、AO・推薦入試での合格者でした。1・2 年次から進学意識を高めたことで、第 1 志望大学の合格がかなわなかった生徒も「やれることはやったので納得しています」という晴れ晴れとした表情を見せてくれました。

**以** 来、この言葉は様々な場面で私を支えてくれています。新型コロナウイルスの感染拡大を受けた臨時休業中、本校が愛媛県で唯一、オンライン授業を全クラス全科目で実施することができたのも、「失敗を恐れずにやってみよう」という私の呼びかけに、若い先生たちが応えてくれたからだと思います。生徒からは、「先生方が不慣れでも一生懸命授業をしてくださっている様子を見て、自分ももっと頑張らないといけないと思いました」といった声を聞いています。やはり、「生徒のために思うなら、やって無駄なことはない」のです。

今後、少子化によって生徒募集に苦しむ学校が増えていきます。これまでは進路課長として「出口」のお世話をしてきましたが、今度は教務課長として生徒募集の「入口」のお世話をするようになりました。進路実績という「通知表」を、地元の中学生と保護者がどのように評価するのか、自分の目で確認することになり、進路指導の重責を再認識しています。

愛媛県立丹原高校 全日制/普通科・園芸科学科/共学/1 学年約 110 人/2020 年度進路実績(現役のみ) 国公立大は、信州大、香川大、愛媛大などに 17 人が合格。私立大は、京都産業大、松山大などに延べ 54 人が合格。短大、専門学校進学 30 人。就職 26 人。

# VIEW21

ビュー21 高校版 Volume 4 2020年10月号  
2020年10月15日発行／通巻第384号 発行人 山河健二 編集人 春名啓紀 発行所 (株)ベネッセコーポレーション ベネッセ教育総合研究所  
VIEW21編集部 〒163-0415 東京都新宿区西新宿2-1-1 新宿三井ビルディング  
©Benesse Corporation 2020

お客様  
サービスセンター

【フリーダイヤル】 0120-350455

受付時間 月～金 8:00～18:00 / 土 8:00～17:00 (祝日、年末・年始を除く)

株式会社ベネッセコーポレーション岡山本社 〒700-8686 岡山市北区南方3-7-17

0K VOL4

 Benesse